

山 梨 県

道德教育用郷土資料集

教師用



平成24年3月

山梨県教育委員会

山 梨 県
道徳教育用郷土資料集

平成 24 年 3 月

山梨県教育委員会

「山梨県道徳教育用郷土資料集」 発刊にあたって

次代を担う子どもたちが、未来への夢や目標を抱き、周囲の人たちと協調しつつ自律的に社会生活を送ることができるようになるために、豊かな心の育成は欠くことのできないものであります。そして、豊かな心を育成するためには、よりよく生きていくために必要な道徳的価値を自覚し、それらを自分の生き方に反映させられるようにしていく必要があります。新学習指導要領においても、豊かな心の育成が改訂の柱の一つに掲げられ、道徳教育の充実がこれまで以上に求められています。

山梨県教育委員会では、これまで道徳教育に関するさまざまな施策の実施に努めてきましたが、このたび、本県の子どもたちに豊かな心を育む要となる道徳教育の更なる充実に資するため、平成七年度に発刊された道徳教育用郷土資料を改訂することとしました。本資料を活用し、山梨の優れた伝統や文化を継承してきた人々の思いや先人の生き方について考えることは、豊かな心を育むことや、それらを生み出した郷土や地域、家族や自分自身に対する誇りをもつことにつながります。山梨の未来を担う子どもたちが自分や家族、そしてふるさと山梨に愛着と誇りをもった人となることを願ってやみません。

終わりに、熱心に作成に当たっていただきました関係者のみなさまに、心より感謝の意を表します。

平成二十四年三月

山梨県教育委員会教育長

瀧田 武彦

目次

(○印は平成二十三年度作成資料)

その一 小学校低学年用

読み物資料頁 活用例頁

うちおりの おてだま	二	一七二
ぶどうの つぶさん こんにちは	六	一七四
つみかさねの たちゅうさん	一〇	一七六
清太いも	一四	一七八
よさぶろうさんの みどり	一八	一八〇
おかあさんの なみだ	二二	一八二
○のうぞういけの あかうし	二七	一八四
○がっこうの たんじょうび	三一	一八六

その二 小学校中学年用

五平どんのなみだ	三六	一八八
電車のできごと	四〇	一九〇
二人のそう吉	四四	一九二
キタダケソウのこえ	四八	一九四
美じゅつ館のおみやげ	五二	一九六
兵左衛門の水	五六	一九八
○二千年のいのち 山高神代桜	六〇	二〇〇
○わたしたちのまちのおたから	六四	二〇二

その三 小学校高学年用

ブッポウソウのなぞを解く—中村幸雄—	七〇	二〇四
藤原女医さん	七四	二〇六
富士の日の出	七八	二〇八

御岳新道を切りひらく — 長田円右エ門 — (郷土愛) 八二〇

フットボールの父 ポール・ラッシュ (国際理解・親善) 八六

花のかおりに生きて — 望月春江 — (創意工夫・進取) 九〇

○自然教室のできごと (公正・公平・正義) 九四

○湖をわたる風 (勤労・社会奉仕) 九八

その四 中学校下級学年用

地方病とのたたかい (生活習慣・心身の健康・節度・節制) 一〇四

いのちの輝き (人間愛・思いやり) 一〇八

— ハンセン病救済に生涯をかけた女医 — (男女理解・異性観) 一一二

二人の力 — イチノセグワの発見と普及 — (家族愛) 一一六

花かげの詩 — 大村主計 — (郷土愛・先人への感謝) 一二〇

情熱の人 — 近藤喜則 — (郷土愛・先人への感謝) 一二四

ワインにかけた二人 (国際理解) 一二八

○平和と友情の鐘 (礼儀) 一三二

○美しいふるまい (生活習慣・心身の健康・節度・節制) 一三八

その五 中学校上級学年用

貧しくとも心けだかく (公德心・社会連帯) 一四二

トンネルの向こうに — 新倉掘抜にかけた永島安竜 — (勤労・奉仕) 一四六

消防の父 小宮山清三 (郷土愛・先人への感謝) 一五〇

内藤清右衛門と『甲斐国志』 (正義・公正・公平) 一五四

種まく人 (生命尊重) 一五八

秋のほたる — 生命を見つめて生きた文人 飯田蛇忽 — (真理・真実・理想の実現) 一六三

○ビー ジェントルマン (希望・勇気・強い意志) 一六七

○地雷のない世界から実りの大地へ (希望・勇気・強い意志) 二五〇

本資料の構成と利用の仕方

一 本資料の構成について

- (一) 本資料は、道徳の時間の指導の充実に資することを主な目的に作成した。
- (二) 本資料の内容は、山梨県にゆかりのある民話、逸話、伝記などを資料化したものであり、子どもたちに、身近な郷土を愛する心を育てていくことを主なねらいとした。
- (三) 本資料は、小学校低学年、中学年、高学年、中学校下級学年及び上級学年の各学年用に、それぞれ八資料、計四十資料と、その活用例から構成されている。
- (四) 第一章は「読み物資料」、第二章は「郷土資料活用例」で構成した。

二 本資料の利用について

- (一) 第一章「読み物資料」は、指導する時期や児童の実態などを考慮し、適宜工夫して、柔軟な活用を図ることが大切である。
- (二) 第二章「郷土資料活用例」は、各資料を活用する際の参考になると思われることについて例示した。
- (三) 第二章「郷土資料活用例」の「その他」については、指導上参考となる文献などを示した。

第一章 読み物資料

その一 小学校低学年用

うちおりの おてだま

バスが きました。

かけだそうと したとき、

「おばあさんが さきよ。」

おかあさんが、わたしのてを ひっぱりました。

「すみませんね。」

おばあさんは あしが わるいらしく うまく のれません。わたしは、まちきれなくて さっと すきまから バスに のりました。

うちおり：自分の家で、糸を紡ぎ、機織り機で布をつくること。（くず繭を使って、織っていた。）



おかあさんが、おばあさんの　てをとって、のせているのが　みえま
した。

つぎのひ、がっこうで　おてだまづくりを　しました。おとしよりの
ひとたちと　いっしょです。となりに　すわった　おばあさんを　みて
びっくり　しました。

「おや、きのうの　げんきな　こだね。」

おばあさんは　にこにこ　しながら、ふろしきづつみから、あおや　あ
か、オレン^{おれん}ジ^じいろの　きれを　だして　ていねいにつくえに　ならべ
ました。つやのある　きれいな　きれです。ところどころに　ちいさな
こぶが　ついて　いました。

「この　きれは　うちおりと　いうんだよ。きものを　つくった　のこ
りだけれど、うちで　くろうして　つくった　ものだから、だいに
とって　あるんだよ。」

おばあさんは、おてだまの　ふくろを　ぬいながら　はなして　くれま

した。あおい ふくろが、ひとつ つくれました。

「こどものころはね。どのうちでも、かいこを そだて、まゆを つくって いたんだよ。よいまゆからは つやのある きれいな きぬいとが つくれたから、よく うれたものさ。うれのこりの くずまゆからは、うちで いとを つくり それを つなぎあわせて きれにしたんだ。ほら、この こぶが いとを つないだ ところだ。うちおりと いうんだよ。」

あかい ふくろが、また ひとつ つくれました。わたしは、ふくろのなかに ちいさな まめを いれました。オレンジのたまも つくれました。てのひらで ポンポン つくと やわらかくて とつても いいかんじでした。

「もう、うちおりを するひとは いないだろうな。」
いつつめの たまを つくったとき おばあさんが ぽつんと いいま

そして、おてだまの あそびうたと たまの とりかたを おしえて くれました。

わたしは、うたいました。

「ひ、ふ、み、よ、おばあちゃん。」

「いつ、む、なな、や、おばあちゃん。」

たまを おとしても おとしても やりな

おしました。

「ひ、ふ、み、よ、おばあちゃん。」

「いつ、む、なな、や、ごめんさい。」

わたしは、バスで あった ことを おもいだして いました。

おてだまづくりが おわって、かいだんを おりていく おばあさん

のところへかけて いきました。おかあさんが したように てを

とって あげました。



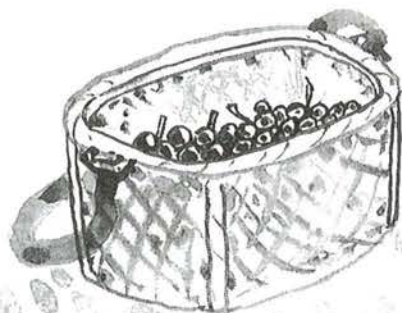
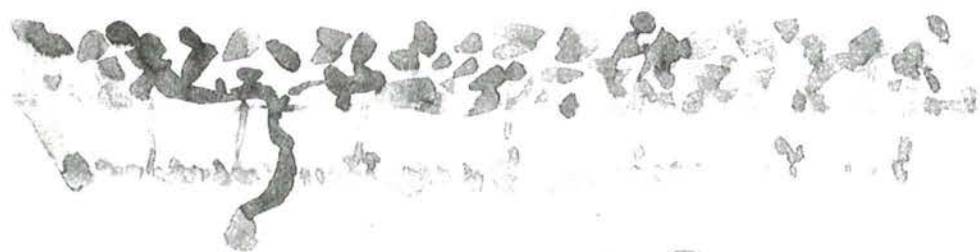
ぶどうの つぶさん こんにちは



きょうは、ぶどうがりの おきゃくさんが おおせい きます。

あやちゃんは、いつもより はやく おきて おとうさんと ぶどう えんへ でかけました。うすいむらさきいろの ぶどうの つぶに あさつゆが ひかって いました。

「きょうは いそがしく なるぞ。おまえは はずかしがりやだけど おきゃくさんと げんきよく おはなし するんだよ。ぶどうも



よろこぶぞ。さあ、ぶどうを き
るよ。」

おとうさんは ぶどうの ふさを
したから やさしく ささえて パ
パ^{ちん}と はさみで きりとりまし
た。そして、ふさを きずつけない
ように そつと かごのなかに お
きました。

「さあ、あやちゃん きつて ごら
ん。」

「はい。」
へんじに ちからを いれました。

パチンと きつて、てのひらにの
せると、ずっしり おもく かんじ



ました。

とりたてのぶどうをおみせに
ならべました。はじめてのおてつ
だいです。おきやくさんにげんき
よくあいさつができるかどうか
とてもしんぱいです。

かんこうバスがつかまりました。お
おぜいのおきやくさんがおりて
きました。むねがどきどきして、
くちのなかがかわいてきました。
あやちゃんは、おきやくさんに
きこえるようにおもいきってい
いました。

「こんにちは。いらっしやいませ。」

「あら、げんきな あいさつ。ありがとう。ぶどうも げんきにみえるわ。」

おきやくさんが ぶどうを ひとふさ とりあげて いました。

「そうね、このぶどう、ひとかご ください。」

あやちゃんは、うれしく なりました。

「ありがとうございます。わたしが、けさ はやく とつてきた ぶどうです。」

おおきな こえで はきはきと はなしました。

「そうなの、ぶどうの つぶさん こんにちは。」

おきやくさんは、にこにこ しながら あやちゃんの かおを みて ぶどうに あいさつしました。あやちゃんも ひとふさ もって

「こんにちは。」

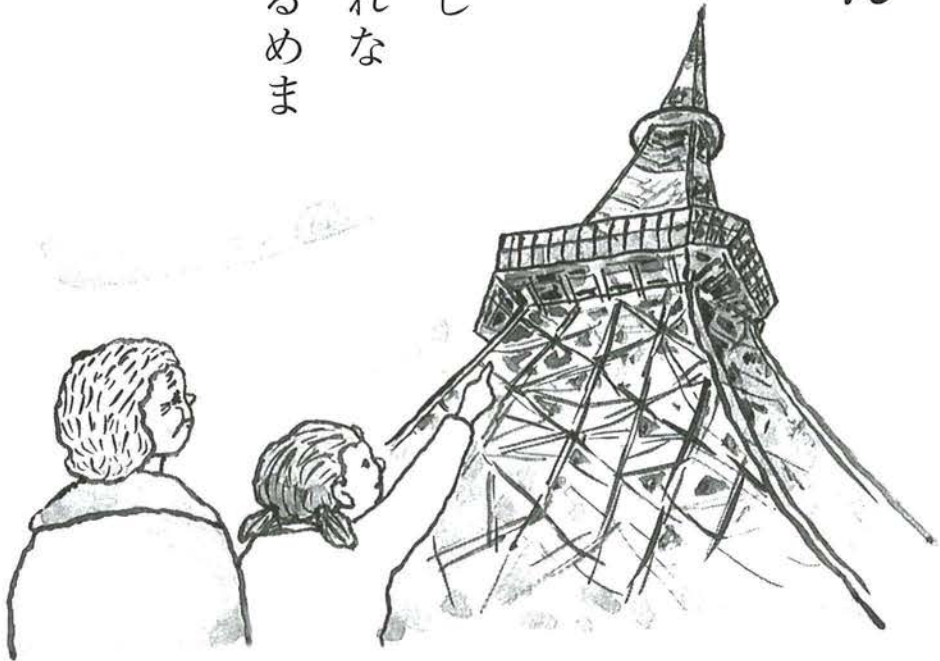
と、いいました。

つみかさねの たちゅうさん

おばあちゃんと、とうきょうタワー^{たわあ}へ
いきました。こうふえきで でんしゃに
のりました。でんしゃのなかで おばあ
ちゃんが おりがみを おしえてくれまし
た。つるの かたちが じょうずにつくれな
くて、おりがみを くしゃくしゃに まるめま
した。

「もういや、こんなもの。」
わたしは、やめてしまいました。

でんしゃからおりて かんこうバス^{ばす}にのりま



した。とうきようタワーは、ちかづくにつれて　しゃしんでみるよりも　ずっと　おおきく　たかく　かんじられ、びっくりしました。エレベーター^{えれべえたあ}でてんぼうだいまで　のほりました。したをはしっているじどうしゃが、おもちゃのミニカー^{みにかあ}のようにみえました。そらはあおくとおくのほうには、富士山^{ふじさん}が　そびえていました。てんぼうだいを　ひとまわりしたときです。おばあちゃんが、びっくりするはなしを　してくれました。

「このとうきようタワーはね、じまんではないが、山梨^{やまなし}県のひとが　せつけいたんだよ。」

「えっ、ほんと。どんなひとなの。」

「ないとうたちゅうさんといって、くしがたちょう（いまの、みなみアルプス市^{あるぷすし}）でうまれ　まちのがっこうで　べんきようし、おおきくなつて　せかいのないとうと　いわれるように　なつた人だよ。」

そんなに すばらしいひとが、やまなしけん山梨県から でていたなんて はじめて
しりました。

「おまえの おとうさんが こどものころのことだ。」
わたしは、すごい すごいと ころでさげびながら てんぼうだいを
もう一どいちぐるりとまわりました。

いえにかえつてから、おばあちゃんと、たちゅうさんが せつけいし
たという けんちょうを みにいきました。くしがたちゅうがっこうで
は、たちゅうさんの きょうぞうを みました。やさしくほほえんでい
るように みえました。

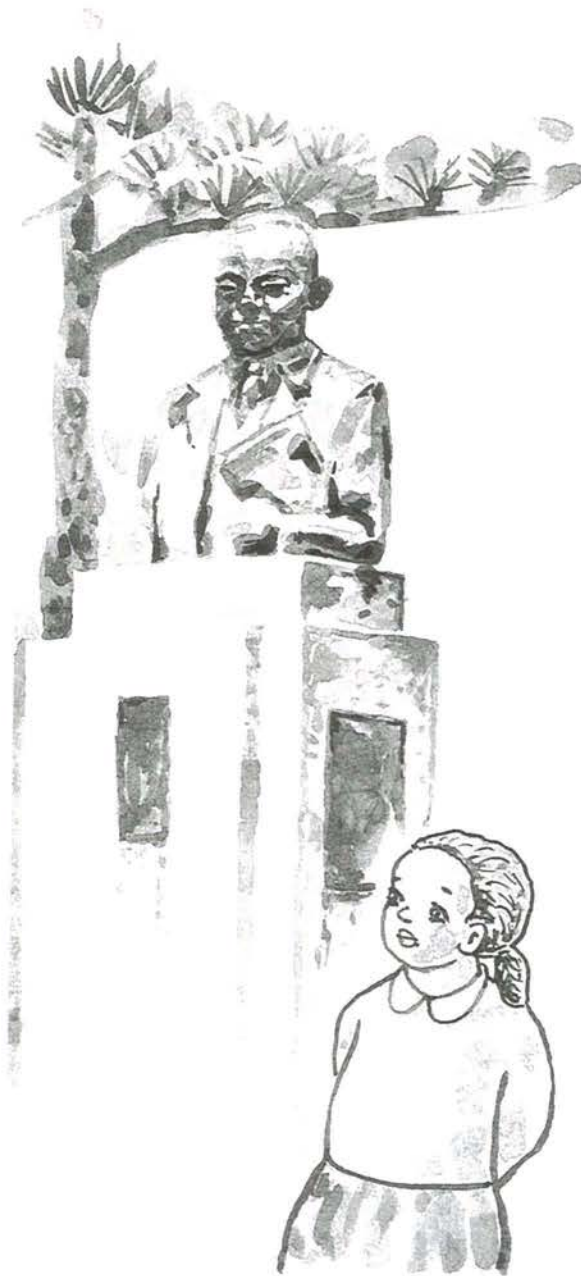
「たちゅうさんは、こどものころ、こうこくや かれんだあカレンダーのうららに
じをかいて おぼえたそうだ。おおきくなつてからも、うらのしろい
こうこくに せつけいずをかいて のおとノートにして とって おいたそ
うだよ。」

おばあちゃんは、わたしのかおと たちゅうさんのかおを みくらべま

した。わたしは、ちよつとはずかしくなりました。

たちゅうさんの くちぐせは、「つみかさね、つみかさね。」だったそうです。こうこくのかみでつくった ノートも きちんと つみかさねておいて せつけいに やくだてたそうです。

わたしは、たちゅうさんの きょうぞうをみながら このあいだ、くしゃくしゃにまるめた おりがみのことを おもいだしていました。



清太せいだいも

ひろくんは にわさきに つんである
じゃがいもで ゴルフごるふあそびを してい
ました。

「はいった。いいぞ。もう一つひと。」
と、うとうとした そのときです。

「まった。いもは いきている。」

ハッとして ふりむくと、おじいちゃ
んが ちいさないもを だいじそうに
もって、 たっていました。

「いも一つで、あたらしい いもが



たくさんふえる。それに、このいもは いのちの おんじんだ。」
ひろくんには、おじいちゃんの いてゐることが よくわかりません
でした。でも、こえのようすから なにか たいせつなことのようにお
もえました。

「にひやくねんくらい むかしかな。ひでりやおおあめ、なつだとい
うのに さむいひがつづいて、こめのとれないとしが なんねんもあつ
た。たべものがなくなり おおぜいのひとがしんだそうだ。そのこ
ろ、甲府こうふに中井清太夫なかいせいだゆうという代官だいかんがいた。いのちをまもるために よ
いさくもつはないものかと しらべてみたのだ。すると、ひでりやさ
むさに つよくて、たいふうがくるまえに とりいれのできる いも
のあることが わかった。そのいもが 甲斐かいの国くに（山梨やまなし県けん）でも つ
くれたらなあと かんがえたんだ。」

「じゃあ、そのころ まだ このいもは、つくられて いなかったの。」

「そうなんじゃ。だから たねにするいもを とおくからもらつてきて うえてみた。めがでて はなもさいたが、ほつてみるまでは わからないので しんぱいだったそうだ。」

「うまく いったの。」

ひろくんは、おもわず おおきなこえをだしました。

「うん。ちいさいが あじのよい いもが たくさんな。清太夫せいだゆうさんは、つちのつきたいもを にぎりしめて よろこんだ。さつそく いもづくりをすすめた。それからと いうものはな。」



「まって おじいちゃん。いものおかげでこめのとれないとしても、いのちが たすかったんでしよう。」

と、ひろくんが さげびました。

「そうなんじゃ。ひとびとは、このいものを『清太せいだいも』と よぶようになったのだ。」

おじいちゃんは、もっていた いものを ひろくんの てのひらに しっかりと のせました。

「じゃがいもは、清太せいだ夫ゆうさんからの だいじなおくりものだ。いもにへこんだところがあるだろう。そこから めをだして あたらしいいもを ふやすのだ。清太せいだ夫ゆうさんのいもは いきているんだぞ。」

ひろくんは、おじいちゃんのかおをみながら ちよつと かんがえて いましたが、あそんだいもを あつめにかけてしまいました。

よさぶろうさんの みどり

ふくしがわの^{*} かわのおとを ききながら、おとうさんと おくやま^{*} にいきました。みちのりようがわの きには、はが あおあおとしげっていました。

かわのおとが ちいさくなり、ことりのこえが きこえてきました。おとうさんが おおきなきを みつけると、

「やすもうか。よさぶろうさんのはなしを してあげよう。」
と、いいました。ぼくは、どんなはなしかなと おもいながら、となりのきの ねもとにすわりました。

「よさぶろうさんは、このおくやまに むらのひとたちと ちからをあわせて きをうえたんだよ。」

「このやまのきは ひとが 一^{いっ}ぼんずつ うえたの。」

*富士川…富士川の支流で、南部町の奥山を源とする。

*奥山…南部町西部の山岳地帯。杉や松の美林で覆われた県内有数の山林地。明治末ごろ、荒れ果てた奥山に、望月与三郎氏が植林することを提案し、村民が協力して、二十五年もの歳月を費やして見事に造林を成し遂げる。

「そうだよ。百ねんぐらいまえ、きが
たくさんきりだされて、やまは、は
だかに なってしまった。このまま
では いけないと かんがえたのが
よさぶろうさんだ。」

なんだ、そんなはなしか おもしろく
ないなと おもいながら、あしもとの
ちいさなきをひきぬきました。

「ところが、むらのひとの なかに
は、そんなことは おかねにならな
いし、いえのしごとも できなくな
ると、ほんたいするひとが おお
かったんだ。」

たいへんだ。どうなったかなと つづ



きを まちました。

「よさぶろうさんは、いまは おかねにならないが、きがおおきくなれば、きつと むらのためになる。やまの みどりは、ひとのためになると はなしたんだ。」

おおきなきを みあげると、おひさまのひかりで はっぱのみどりが、すけてみえました。おとうさんは、あるきながら はなしつづけました。

むらのひとたちも むらの五十ねん、百ねんさきのことを おもい、きをうるしごとに とりかかったそうです。一ぼん、一ぼんまた一ぼんと うえたのです。やまはひえて しめりけが おおいので、ひとびとは てやあしやこしのいたみに くるしみました。よさぶろうさんも そのひとりでした。そのくるしみにも まけないで ひろいおくやまに 百八十万ぼんのなえぎを二十五ねんものあいだ、うえつづけたのです。

「おおきくなった やまのきは、がつこうや むらのひとたちがつかう たてものになったんだ。おまえが よりかかったきも、むらのひとたち

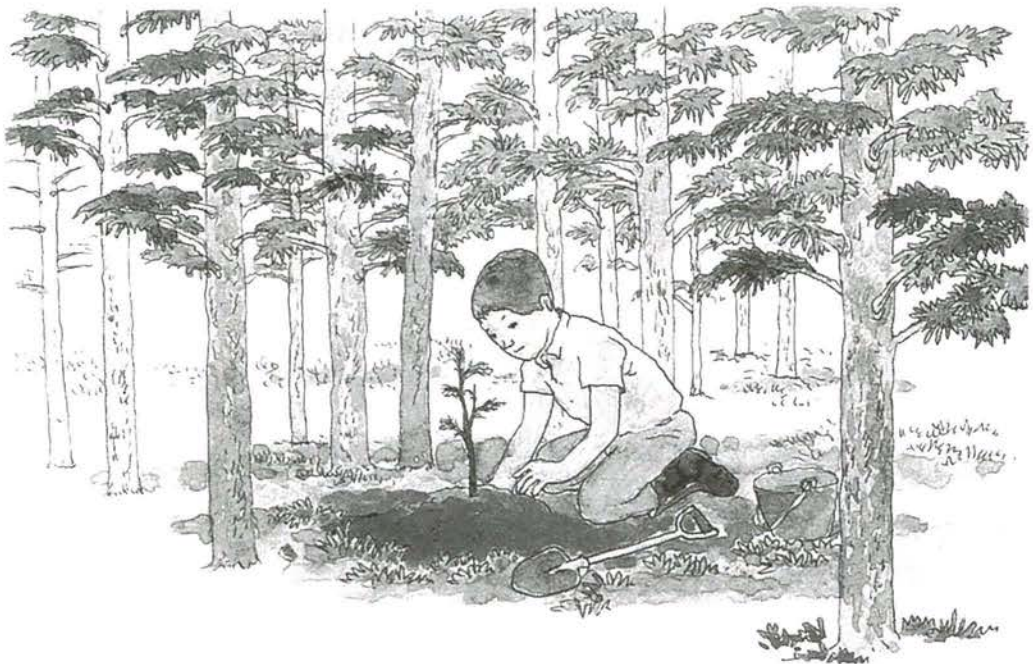
がうえたきだ。」

おとうさんのはなしを ききながら、
きのトンネル^{とんねる}を でると くさはらで
す。ぼくは おもわずさげびました。

「きれいだ。かみくずもない。」

「よさぶろうさんたちのプレゼント^{ぶれぜんと}
だ。みんなで たいせつに つかって
いるんだ。」

すばらしい やまとみどりのことを
だれかに じまんしたくなりました。
かえるとき、さつき ひきぬいた ちい
さなきを そつと うえなおしました。
そして、よりかかったきを りようとで
おもいきり だきしめました。きとこけ
のにおいが ふうんと はなにしみま
した。



おかあさんの
なみだ



「きみよ、ここに さわってごらん。あ
かちゃんよ。」

おかあさんの 大きなおなかに、さわっ
てみました。

「あ、ほんと。うごいた。」

「うまれてきたら、なかよくしてあげて
ね。」

おかあさんは、おなかをさすりながら

いいました。

つぎのひは、いえじゅうそうので いねかりです。きみよさんは、ひとりです。るすばんです。ゆうがたのことでした。

「ああ、つかれた。」

おかあさんのこえです。きみよさんは、げんかんにはしっていきました。おかあさんのかおは、まっさおです。

「かあさん、まっつて。ふとん しいてあげる。」

おかあさんのてを ひっぱって ねかせてあげました。

そのとき、おとうさんが かえってきました。

「よし、こんやは おとうさんが ほうとうをつくらう。」

おとうさんは、てばやく したくをはじめました。きみよさんも み

ずくみやひのばんを しました。

「できたぞ。きみよ。たくさんたべ
ろ。かあさんも たべると いいんだ
が。」

でも、おかあさんは、

「あとで……。」

とって たべませんでした。

そのばん、おかあさんのねつが あが
りました。おとうさんが ばしやで お
いしやさんをむかえに いっているあい
だ、おかあさんのあたまを ひやしてあ



げました。おかあさんは、ときどき ちいさなこえで うなります。
ガタガタ^{がた}。ばしやのとまるおとです。きみよさんは ほっとしました。
つぎのひのあさ、おかあさんのねつはさがりました。

「きみよ。ゆうべは ありがとう。うれしかったよ。」
おかあさんのめに なみだが いっぱいでした。

きみよさんは、おおきくなって およめにいきました。はじめてのあ
かちゃんが、できました。おなかに そつと、さわってみました。あか
ちゃんが うごきます。

「まあ、かわいい。げんきね。」
あかちゃんに、はなしかけました。

そのとき、きみよさんは ずっとずっとまえの おかあさんのなみだ
をおもいだしました。そして、おかあさんが なみだを ながしたの
は、かんびょうしてもらった うれしさだけではなく おなかのあか
ちゃんがげんきだったから ほっとあんしんしたからだと きがついた
のです。おかあさんは あかちゃんを かぞくの たいせつな ひとり
として、たのしい かにいをつくろうと おもっていたのだと きみよ
さんは きづいたのです。

きみよさんは、おかあさんのなみだを いつまでも わすれないで
たいせつにしました。

それから、きみよさんは、かぞくのしあわせを まもる あい^{*}いくか
いで、やまなしけん山梨県じゅうの ひとのために ずうっと、はたらきました。

*愛育会：妊産婦や乳幼児の健康を守ることを目的として、昭和十三年ごろ、源村（現南アルプス市）で発足した。矢崎きみよは、設立当時から会の発展のために大いに貢献した。現在は、山梨県内各市町村にこの会があり、住民の健康を守るための仕事をしている。



のうぞういけ (提供南アルプス市教育委員会)

のうぞういけの あかうし

これは、いまの やまなしけん みなみアルプス^{あるぶす}しに ある のうぞういけに つたわる おはなしです。

むかしむかし、やごしまむらと いう ところに のうぞういけと いう いけが あり、おおきな あかうしが すんで いた そうです。あるばんの こと、この いけの ちかくに すむ さつき という むすめが、いけの ふちに たって

「あしたは、わたしの けっこんしきだと いうのに、おきやくさんに りょうりや おちやを



だす おさらも ちゃわんも みんな
かけている。どうしたら いいずらかか。」
と、なげいて いました。むらの どの
いえにも おさらも ちゃわんも そろっ
てなど いません。

つぎのひの あさ、さつきが いけに
いって みると おわん、ちゃわん、さ
ら、ちよこ、おぜんが みんな そろって
いるでは ありませんか。むらの みんなも やってきて

「こんねん きれいな おわんや おぜんは みたこたあねえ。」

「こりゃあ どういう こんだ。だれが よういして くれとうずら。」
と、ふしぎがりました。

すると そこへ、むらの ちようろうが きて

「この いけにゃあ、むかしっから あかうしさまっちゅう かみさ

まが すんでるつちゆうど。その あかうしさま
じゃあ ねえずらか。」

と、いいました。

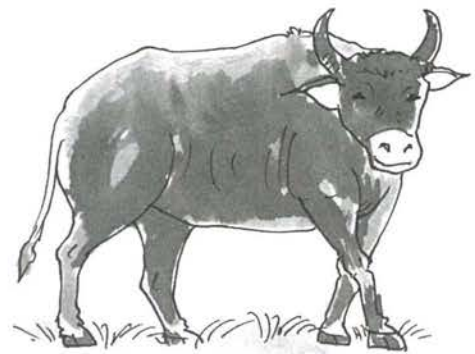
「ほうか。あかうしさまか。ありがてえこんだ。」

むらの ひとたちは おおよろこびし、それから
は ひとが あつまる ときには のうぞういけに
いって おわんや おさらを かして ほしいと

たのむように なりました。あかうしさまは、そんな むらびとの ね
がいを ちゃんと きいて くれました。むらびとたちは、かりた ちゃ
わんを いつも きれいに あらって いけに かえして いました。

ところが、あるとき たろうという わかものが、じいさまから
「このちゃわんを きれいにあらって のうぞういけに かえしとけ。」
と、いわれたのに

「いちいち かえしにいくは めんどうだし、こんな いいちゃわんは
うちに おいといて また こんど つこうこんにするだ。」



と、せっかく かしてもらった おわんや おさらを かえしませんで
した。

すると あかうしさまは のうぞういけから いなくなつて しま
いました。それからと いうもの おさらや おわんが かりられない
ばかりか、むらには おおみずは であるし おおかせは ふくし わる
いことばかりが おこるようになりまして。

むらの ひとたちは、

「こまったこんだ。あかうしさまは、きつ

と おこっているに ちげえねえ。なんと

か ゆるして もらわねば。」

と そうだんし、やつとの ことと おかね

を もちよつて のうぞういけの まんなかに ある しまに ほこら

を たてて おがみました。

けれども あかうしさまは にどと のうぞう いけには もどつて

こなかつたと いうことです。



がっこうの たんじょうび

一ねんせいのおあやさんの クラスくらすに、たいこどうで おしごとを
している おじさんが きてくださいました。せんせいは、

「あしたは、がっこうの おたんじょうびです。きょうは、たいこど
うの おじさんから がっこうが できたころの おはなしを きき
ましょう。」

と、おっしゃいました。

おじさんは あやさんの クラスで
こんなおはなしを してくださいまし
た。

むかし、いまのように がっこうが
なかった ころの ことです。



たいこどう

そのころは おてらを かりて べんきょうを していました。いま
と ちがって べんきょうを したくても まずしかったり いえの
てつだいが あったりして がっこうに いけない こともも おおぜ
い いました。むらの ひとたちは、

「ずっと おてらを かりている わけにも いかない。ひろい ところ
で こどもたち みんなに べんきょう させたい。」

「あたらしい じだいに ふさわしい がっこうで、あたらしい べん
きょうを してほしい。」

と、おもって いました。こどもたちも

「みんなと べんきょうを したい。」

と、ねがって いました。その ねがいを かなえるために、むらの
ひとたちは、みんなでおかねを だしあいました。

そして、とうとう やねの うえに たいこを ならす へやのある
りっぱな がっこうが できあがりました。

「あたらしい がっこうが できて、うれしいなあ。」

こどもたちも　むらの　ひとたちも　おおよろこび　しました。

いまは、たいこどうは、みんなぞくしりようかんと　なりましたが、ますほしようにがつこうの　こうていで　ますほの　こどもたちを　ずっと　みまもって　きました。たいこどうは　ますほの　ひとたちの　がつこうへの　ねがいが　こもった　たてもなのです。

あやさんは、おじさんの　おはなしを　きいて、あした　たいこどうに　行って　みたいとおもいました。

そのよる　あやさんは　たいこどうに　いった　ゆめを　みました。あやさんが、

「たいこどうさん、おたんじょうび　おめでと　う。ながい　あいだ　ありがとう。」



と、いうと、てんじようから こえが きこえてきました。

「あやさん、たいこどうに よく きてくれたのう。この たいこどうは こどもたちが とても だいじに して くれたんじゃ。きょうしつや ろうかを みがいて くれる だけではなく、せんせいの いうことを きいて みんな いっしょうけんめいに べんきようしていたぞ。それが とても うれしかったのじゃ。」

「あの・・・。」

あやさんが なにか いおうとしたとき
ゆめから さめて しまいました。

つぎのあさ、あやさんは がっこうに
いくと ゆめで はなしたかった ことを
せんせいに はなしはじめました。



その二 小学校 中学年用



五平ごへいどんのなみだ

ずっと ずっと むかしのこと。

とよとみむら
豊富村（ちゅうおうし中央市）の村はずれに 大きな まつ

の木と いっしょに お地ぞうさまが 立っていた。

日でりが つづき 水ぶそく。

「お地ぞうさま、水をおねがいします。田んぼのいねを お守りください。」

子どもも大人も、お地ぞうさまに手を合わせておねがいました。

きょうも、空には 雲一つない日でり。田んぼは土がかわいて われてきた。となりの村で 水あら



そい。水がほしくて けんかになった。

五平どんは、村一番の いばりんぼうで、大きな
からだ。

今夜は こんや 月のない 暗い夜。五平どん、田んぼに
出かけて 水の番。

「しめ、しめ、だれもおらん。水をもらおか、いや、
まてまて。少しだけなら 少しだけなら……。」

五平どんの手が 動いた。となりの田んぼに 入
れる水 こっそり止めて 自分の田へ。

そのばん、五平どん ゆめを見た。田んぼに 水
が いっぱいで いねが あおあお すくすく
と、おらあ村一番の 米作り。五平どん ゆめの中
で大いばり。

あくる日、うきうき 田んぼに出かけた。ところ



が 水がどの田んぼにも 少しずつ。

五平どん ぶったまげた。また 夜、田んぼに水
を入れ こっそりかくれて 水の番。

ズシツズシツと 歩く音。よくよく見ると 頭の
丸い 男の子、田んぼに 水を分けている。思わず
五平どん、とび出して

「こらっ。なにしおる。」

持っていたくわで 子どもの頭をこつん。音とと
もに、子どもは消え あとには 暗やみ。

あくる日、村じゅう 大さわぎ。

「おかわいそうに。お地ぞうさまの お鼻が かけ
ていなさる。」

「たたりが ないといいがのう。」

五平どん、みんなのかけから お地ぞうさまを



のぞいてみた。お地ぞうさまの　かなしそうな目、
五平どん　はっとした。

「ゆうべの子どもは　お地ぞうさまだったのか。」
五平どん、むねが　くるしくなってきた。でっか
いからだで　おいおいないた。お地ぞうさまに　手
を合わせて　ないた。

「おらあ、もうこりこりだ。わるさはしねえ。水は
分け合う。」

ゆうべのことを　村のしゅうに　両手をついて
わびた。

お地ぞうさまの目が、いつもの　やさしい目に
なった。

雨が　ぼつりと　ふってきた。

電車の中のびびり

「おはよう。」

わたしは朝おきると、まどをあけ、まっ先に目にとびこんでくる富士山ふじさんにあいさつするのを楽しみです。富士山も、

「おはよう。元気かな。」

と、返事をしてくれます。そうすると、わたしの心にもさわやかな朝がおとずれるのです。

わたしたちの町は、富士山がうつくしくそを広げたところにあります。わたしは、一年中うつくしいすがたを見せてくれる富士山が大すきで、わたしたちの町の、そして日本の自まんだと思っています。そんな富士山には、もちろん外国からもおきやくさまが大ぜいやってきます。



この前の日曜日、わたしはお母さんと富士吉田ふじよしだのえきから電車にのって、おじいちゃんの家へ行きました。おきやくさまは多かったので、ちようどせきが空いたので、

すわりました。すると、わたしの前に大きなリュックをせおった外国の方がのってきました。見たところおじいちゃんと同じくらいの年のようです。富士登山とをした後なのか、とてもつかれているように見えました。

（ずい分つかれているみたい。せきをかわってあげようかな。）

（でも、何て言ったらいいんだらう。わたしえい語なんてひとこと

もしやべれないし。どうぞと言っても、通じなかつたらはずかしい。」

電車がゆれるたびに、からだが大きくうごいて足もとがたよりなさそうでした。まわりのせきの人たちもちらつちらつとその人を見るのですが、みんなこまったように下をむいて、中にはあわてて新聞しんぶんを広げる人もいました。

電車がつぎの月光寺げっこうじのえきについたとき、ガタンと大きくゆれ、その人はグラツとたおれかけました。

（あ、あぶない。）

それを見たわたしは、おもわずせきを立って、

「どうぞ。」

と、言っていました。その外国の方は、はじめはびっくりしたような顔をしましたが、すぐにここにこして、

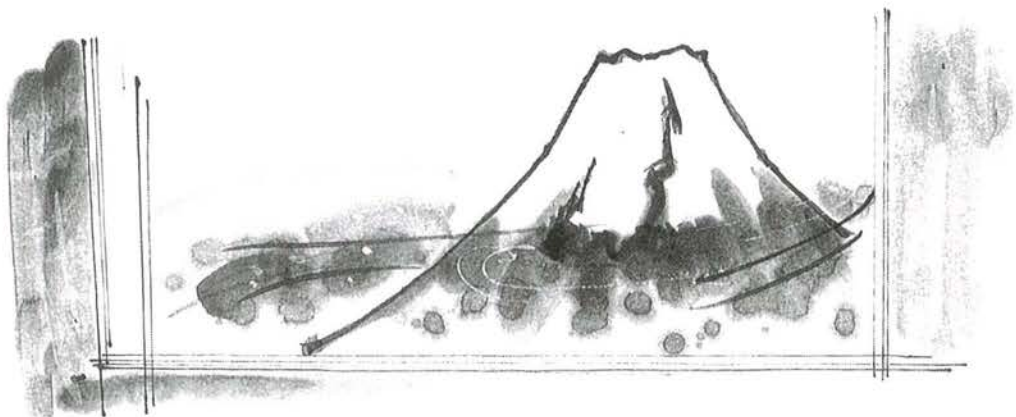
「オー、サンキュー。」

と言つて、せきにすわりました。その後もえい語で何か話しかけられました。ことばはよく分かりませんでした。が、そのうれしそうな顔や話し方で、とてもよろこんでいることがよく分かりました。ふと気がつくとき、まわりのせきの人たちも顔をあげてこちらを見ています。ちよつとはずかしそうな人もいますが、みんなほつとしたような顔をしています。となりにいたお母さんも、ここにこしながら、

「よかったね。」

と言いました。

電車のまどから富士山が、いつもより大きくうつしく見えました。



二人のそう吉きち

むかし、ホッチとうげの茶店に、そう吉という子がいました。とうげの里にもそう吉という子がいて、とても気が合い、とうげの道祖神どうそじんであそんだり、茶店で休むたびの人から、遠くの村の話を聞いたりしていました。なかでもくすり売りの七兵衛しちべえさんから笛ふえをならうのが、一番の楽しみでした。ならいはじめて二年、二つの笛の音がきれいに合うようになり、ならった後で食べる茶店のホッチダンゴはとてもおいしいものでした。

「なかのよい二人じゃの。」

と、おう来の人にほめられると、二人はうれしくてダンゴを道祖神にそなえました。するとふしぎなことに、道祖神の丸い石が、

「ふんばりな。」

と、言っているように思われました。

年月としつきがすぎ、十さいの正月、里のそう吉がほう公に出ることになりました。

「おらあ、笛のこたあわすれねえぞ。ほう公があけたらまた二人でふくべえ。」

「うん、正月の道祖神の祭りまつにな。そうだ、やくそくの石を道祖神におくべえ。」

二人の大すきなホッチダングおうどいろにした黄土色の石を二つ見つけると、一つは笛のれんしゅうをつづけよう。一つは三年後にはかならず会おうというちかいのしるしにして、そなえました。

たがいにたよりのないまま、三年の月日がながれました。とうとう正月の道祖神の祭りの日が来ました。でも、里のそう吉のすがたは見えませんでした。

「笛のことなんぞ、うちわすれたにちげえねえ。」

がっかりするそう吉でしたが、一方では（いや、夕方までには、きつと来る。）と、ひそかにきたいしているのです。しかし、ついにそう吉はやって来ませんでした。

「もう祭りもおわりだ。三年も前のやくそくなんざ、当あてになるもんか。」

とうとう、道祖神にそなえたあの石を やぶにたたきつけてしまいました。それらしい、笛の音もぷつぷつとだえてしまいました。

ホッチとうげにホタルブクロがさいて夏が近づいてきました。田うえもおわろうとい

うある日、見なれないくすりの行商人ぎようしやうじんが茶店をおとずれました。

「ホッチダンゴの茶店というのは、こちらで。」

「へえ。」

「じゃあ、あんたがそう吉さん。わたしは七兵衛のせがれで。父がこしをいためたんで、わたしがかわつてくすりを売ってます。じつはこのあいだ、甲府こうふの住吉神社すみやしでお田うえ祭りがあるというんでよつてみると、笛をふく人の中に父から聞いた里のそう吉さんがいたんです。ほう公先で足をいたため、正月には村に帰れなかったそうで。まだ足はふじゆうでしたが、笛はりっぱでした。」

とうげのそう吉の顔から、ちの気けが引きました。そ



して、道祖神のやぶにかけこみ、草を分け、土をほり返しました。しかしダンゴにたあの石は見つかりません。どうしようもない後こうかいが、心のおくそこからわいてきました。

(来年はきつとやって来る。)

ふたたびとうげのそう吉の笛の音がまつ風にのって、ひびきはじめました。

とうげのむかいのたちおか山に、まっ白な雪。まちにまった里のそう吉をむかえ、道祖神の祭りです。火は赤々ともえ、人出はさい高。

ピッピッピ― ヒヨロロ

ピーピーピッコロロ

二つの笛の音は、たがいにつり合い、つつみ合うように鳴りわたり、人々の心にしみこみました。雪どけ土から、あの黄土色のダンゴにた石が顔を出していました。

今でもとうげから出るその石は、二人のことをかたりかけるかのように見えます。

キタダケソウのこえ

「さあ、ちよう上めざして出発だ。」

わたしは、山登りのすきな両親につれられて、北岳きただけに登りました。風はさわやかです。ちよう上はまだまだずっと先です。何時間か登ると、リュックサックが重く感じられ、息がはずんできました。

「ほら、富士山ふじさんが見えるぞ。」

足もとばかり見て歩いているわたしに、父が声をかけてくれました。

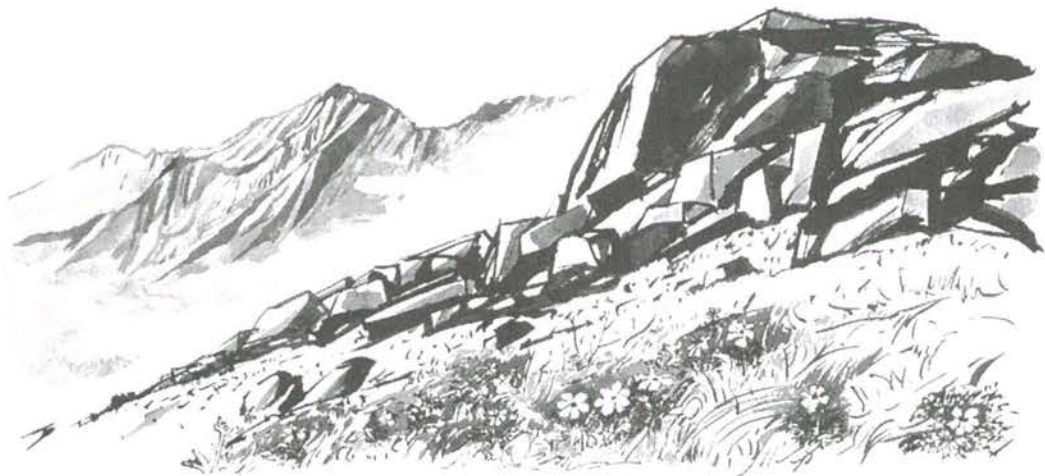
「うわあ。雲の向こうだ。北岳とせいくらべをしているようね。」

目の前に、ゆう大なけしきが広がってきました。

「あらっ、きれい。お花畑よ。」

母の声に山のしゃめんの方を見ると、色とりどりの花が、さきほこっていました。

「高山植物だよ。高い山にさく花ばかりだ。」



父が教えてくれました。

ごろごろした石の間から、風にゆられながら美しくさいている小さな花。寒い冬はどうやってたえるのだろう。小さな花のどこから強い力が生まれってくるのだろう。だれがたねをまいて、だれがせわをしたのだろう。こんなにたくさんのお花を。

「ヤッホー。作ったの、だあれ。」

北岳に聞いてみました。こだまが返ってくるだけでした。父に聞いてみました。

「ああ、それは山や風や光などのしぜんかな。」

と、答えてくれるだけです。しぜんにそんなことできるのかしら。しんじられません。でも、目の前のきれいな花がそう言っているようでした。と、そのとき、

「キタダケソウだぞ。ついに見つけた。こちらにおいで。」

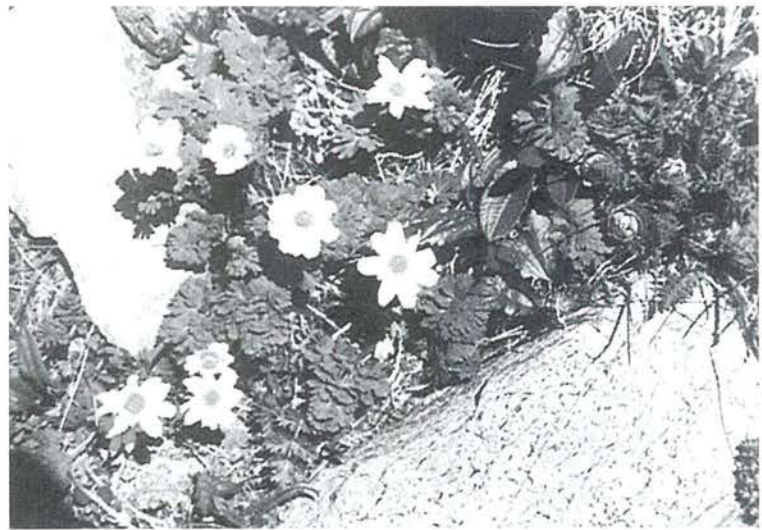
父の声です。わたしは母とかけより、むちゅうで手をのばしました。

「あつ、おるな。」

父が止めたとき、わたしは花に手をかけていました。手をひっこめると、母がじいっとわたしの顔を見つめました。

こんなにたくさんさいている花の一本や二本、取ることくらいでどうして……。と、わけがよく分からなくてとまどっていると、父がしずかな声で話してくれました。

「この花は、地球の長いうつりかわりの中を生きぬいて、世界中でここにしかない花なのだよ。だからこの山の名前がついているのだよ。花はしぜんには強いが、人間の手にはいちばん弱いんだよ。」



キタダケソウ



わたしは、だまって父の話を聞きました。

「おまえが、お父さんとお母さんにとって、世界中でたったひとりのだいじな子であると同じように、このキタダケソウもだいじな花なのだ。」

わたしは、まわりの美しさにだけ心をうばわれていたのです。山の美しいお花畑は、しぜんのかといのちの力が作り出したのだと思いました。

キタダケソウの白い花びらに、わたしはそっと手をふれました。風にふかれて、花びらがやさしくゆれました。

そのとき、わたしは、耳もとでかすかにキタダケソウの声を聞いたような気がしました。

美じゅつ館のおみやげ

ぼくは、だいすけくんと美じゅつ館に、ミレーの絵を見に行くやくそくをしました。だいすけくんに用事ができたというので、美じゅつ館で待ち合わせることにして、先に出かけました。

ちゅう車場には、県外から来た大がたバスが、何台もとまっています。美じゅつ館に入ると、大ぜいの人がいきましたが、しずかで落ち着いた感じでした。売店の近くで待っていると、

「おーい、たかしくん。」

だいすけくんが、はあはあ息をはずませながら走ってきました。

「待ったんだぞ。急ごう。」



山梨県立美術館

「うん。」

階段を急いで上がりました。

てんじ室の入口で、係かかりの人に

「しずかに見てくださいね。」

と、言われました。中に入ると、ガラスの向こうに大きな花の絵があり、画面いっぱい
の白い花が、光にてらされて、くつきりと見えました。ふたりは早くミレーの絵が見た
くて、先へ急ぎました。

「何の用事だったんだい。」

「サッカーのし合のことで、かんとくさんから話があったんだ。」

「いいな。だいちゃん、し合に出るのか。」

おくにはあまり人がいませんでした。

「この前のし合のとき、ぼくがゴールを決めたらう。」

「うん。その一点で勝ったんだよな。」

ふたりの立っている前に、ミレーの絵がありました。羊ひつじのむれをつれて帰る人の後ろ
に、赤い夕日がしずみかけている絵です。

「それで、次の日曜日のし合にも出られることになったんだ。」

「うあつ、すごい。」

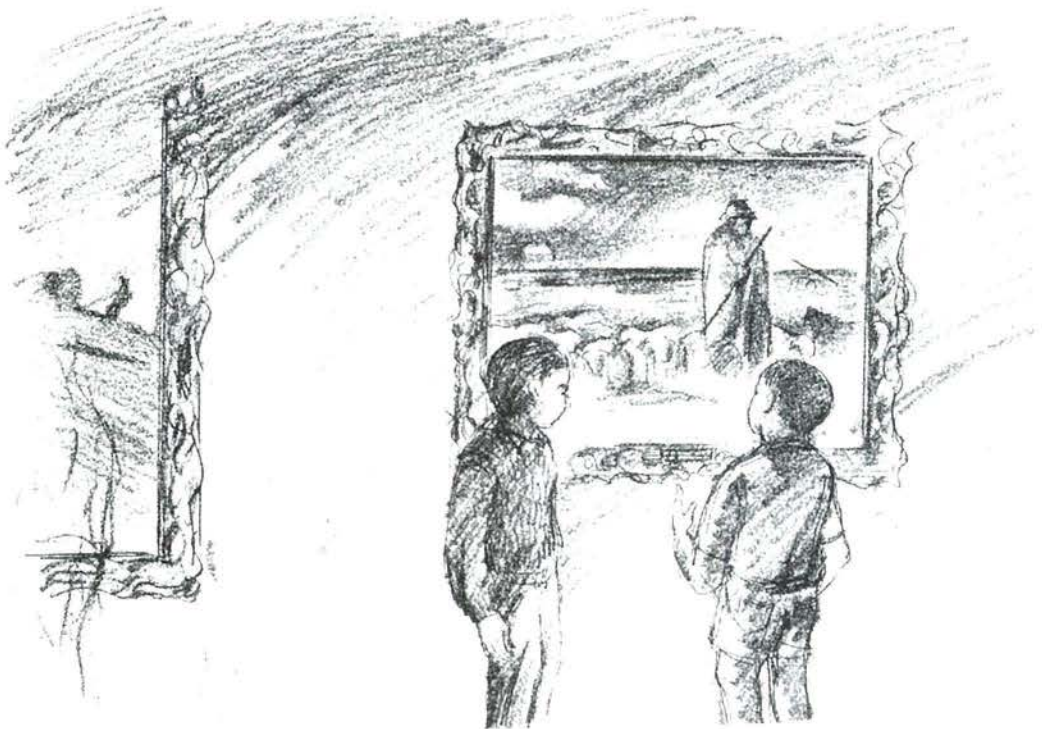
ぼくは、思わず大きな声をだして、ハッとしました。すぐそばに、絵をしんけんに見ているおじさんが立っていたのです。ふたりをちらつと見ると、となりの絵のほうへ行っていました。

ふたりは顔を見合わせ、絵に目を向けました。いのっているような羊かいのしずかな顔が見えました。ぼくは、いなかのおばあちゃんとお畑に行ったときのことか頭にうかびました。

「だいすけくん、ぼくはこんな夕日を見たことがあるよ。」

「うん、まわりのものがみんな赤くそまって見えてさ、それがうすくなるとすぐ暗くなるものな。」

「羊かいは、何をいのっているのかな。」
ささやくように言いました。



それからとなりの『種をまく人』の前に立ちました。よく見ると、種をまいている人のずっと遠くの方に、馬車が小さくかいてありました。夕ぐれで家に帰るのだな、種をまく人もまもなく仕事を終えるのかなと思ったとき、話しかけられました。

「君たち、山梨の子かね。ありがとう。おかげでいいみやげができたよ。」
さっきのおじさんです。返事にこまっていると、

「山梨には、すばらしい美じゅつ館があるね。」

と、言いながら次のてんじ室に行ってしまった。

美じゅつ館からの帰りに、だいすけくんに聞きました。

「おじさん、どうしてぼくたちに『ありがとう。』と言ったのかな。」

「おじさんに気がついて、絵をしずかに見たからだよ。」

でも、ぼくはなんとなく気持ちがすっきりしませんでした。てんじ室の入口で、声をかけてくれた係の人の顔が思い出されました。少し考えてから、ぼつりと言いました。

「ぼくたち先に『すみません』と言えばよかったな。」

ふたりともだまって歩きました。西の空が赤くそまり始めました。ぼくは、ミレーの絵のことも、おじさんのことも、家族へのいいみやげ話になると思いました。

ひょうざ えもん 兵左衛門の水

ぶどうやもも、サクランボなどの畑が広がる、かじゆの里として有名な白根町（南アルプス市）は、昔、原七郷とよばれ、水の少ないところでした。

今から三百五十年ぐらい前、江戸（東京）の商人徳島兵左衛門は、旅の途中、原七郷を通りかかったとき、おもわず足を止めました。

「南に富士、西に鳳凰、北に八ヶ岳をながめることができる美しい土地なのに、このあれはてている田畑はどうしたことだろう。」

村の人たちにわけを聞くと、

「このあたりは水が少なく、たとえ雨がふっても水がすぐかれてしまい、作物づくりはむずかしい土地だ。」

と、話してくれました。

「そうだ、この土地にせぎ（水路）をつくらう。せぎに水が流れれば、田畑の作物も実り、新しい水田もふえる。それに、ここでとれた作物を江戸の人たちに売れば、商売もうまくいくだろう。」



と、兵左衛門は考えました。

せぎをつくるという話を聞いた村人は、おどろきました。

「そんなことができるものか。お金もないのに。だいいちどこから水を引いてくるのだ。」

村人たちは、兵左衛門をかわり者だと思いました。しかし、兵左衛門は、この広大な土地が緑の水田になることをゆめみて、せぎづくりの計画を村の人たちに話して回りました。お金も自分で用意しました。兵左衛門のしんけんなすがたに、村人も心を強くうたれ、工事にきょう力することになりました。北の高いところにある、上円井かみつぶらい（いらさき 葦崎市まゐの 円野町）から、釜無川かまなしの水をせぎに流すことにしました。せぎをほる工事は、山のすそを南へと進められました。

大きな石をくだいたり、あなをほったり、また、水もれをふせぐ工事をしたので、はじめの計画よりだいぶ手間取りました。

兵左衛門も村人といっしょに、土をほり石を運びまし

た。せつ計図も何度も書きなおしました。お金ものこり少なくなり、兵左衛門は、工事をつづけることが苦しくなってきました。そのたびに、ゆたかに実ったいなほをゆめ見てがんばりました。

「今度は大変だぞ。みだい川を横切ってせぎをつくるのだ。」

「川は横切るなんてむりだ。ふだんは水なし川だけど、雨がふれば水や石ころでせぎはうまってしまうぞ。」

「ここまでやってきたのだ。きっと兵左衛門様が考えてくださる。」

兵左衛門は、村人が自分をたよりにしていることを知ると、工事のせいこうをねがってたてたお寺におまいりしたり、江戸の店からお金をとどけさせたりして方法を考え、工事をつづけました。村人とも何度となく相談をしました。

そして何日かがすぎました。

「そうだ。板で水の通るはこを作り、つなぎ合わせよう。それを川のそこにうめれば雨がふってもだいじょうぶだ。」

しかし、兵左衛門には、この工事をつづければ自分のざいさんはなくなり、商売もできなくなるといふ心配がありました。まよったあげく、自分のことよりも水を待っている村人のためにはたらこうと決意しました。兵左衛門の考えを聞き、村人たちはよろこ



現在の徳島せぎ

びました。工事を始めてから三年目、やっと曲輪田くるわだ新田しんでん（南アルプス市）までの十七キロメートルのせぎができあがりしました。しかし、この後、兵左衛門は工事をさい後まで仕上げることなく江戸に帰らねばならなくなってしまうました。

「わたしがいなくてもこのせぎを完成してほしい。」
村人は兵左衛門の意志いしを引きつぎ、工事を進めました。はんのえん助も受けることができ、六年後にせぎはかん成しました。

「水が通ったぞ。兵左衛門様のおかげだ。」

子どもも大人もせぎをまんまんと流れる水に、手を合わせてよろこびました。村人は兵左衛門の村によせたあたたかい心をいつまでもわすれないようにと、このせぎを「徳島せぎとくしま」とよぶようになりました。今でも、白根町（南アルプス市）の人々はせぎの水を大切に使っています。

二千年のいのち やまたかじんたいざくら 山高神代桜

日曜日、春菜は、母につれられて北杜市武川町にある小高いおかにやってきました。桜の花がとてもきれいにさいていました。春菜は、青い空と桜の花を見ながら、ゆつたりとした気分をあじわっていました。

春菜が車からおりて歩いていると、一本の桜の木が、目に入ってきました。太くて、大きくて、どっしりとした木でした。その古木のまわりには、大ぜいの人があつまっていました。近づいていくと、人びとの話し声が聞こえてきました。

「今年もよく花をさかせてくれたね。」

「またこの神代桜が見られてよかった。ほっとしたよ。」

人々は、やさしくあたたかい目でその古木を見つめていました。

春菜が、桜に見とれていると、おばあさんとおじいさんが、近づいてきました。

「この桜の木は、わたしが小さい時からここにあったんだよ。春になると、この桜の木の絵をよくかいたもんだよ。」

九十歳さいになるといっておばあさんは、昔むかしをなつかしむように話し始めました。

「台風で、えだがおれたこともあったが、こんなにきれいな花をさかせている。たいたしたものじゃあないか。おれもまげられないなあ。」

と、おじいさんも話し始めました。

おじいさんは、この桜が「山高やまたかの神代じんだい桜ざくら」といって、ずっと昔からここにあった

こと、樹齡じゅれい二千年の桜と言われて有名ゆうめいになり、大ぜいの人が見物けんぶつにおとずれるようになったこと、以前いぜんかれそうになったことなどを話してくれました。



山高の神代桜



平成十四年ころのことです。

村人たちは、花の数が少なくなり、葉もいきおいがなくなってしまうた神代桜を心配そうに見上げていました。

「この木を守らにゃあいかん。ほうっっておいたら、この木は、しんでしまう。」

村の人たちは桜の木を守るために立ち上がりました。

まず、木の医者である樹木医にみてもらい、弱っている原因を調べてもらいました。土をとりのぞいて根を調べたところ、一部はすでにかれ始めています。えだを支えている鉄の支柱、根がかわかないようにと盛った土、木のすぐ横を通る道路など、よくないかんきょうが、木を弱らせていることがわかりました。

「このままでは、いけない。何としてもこの木を守ろう。」

それから、村の人たちは、長い年月をかけ、木を守るためのかんきょう作りにとり組みました。鉄の支柱を木のぼうにかえ、病びょう気きになっていた根を元気にさせるために栄えい養ようのある土と入れかえ、木の横の道路を通行止めにしました。そして、毎まい年とし、春が近づくと期き待たいと不安ふあんな気もちで桜の木を見上げていました。

ある年の春、桜の古木はたくさんの花をさかせました。

「木にいきおいが出てきた。これならだいじょうぶだ。」

「神代桜がよみがえったぞ。」

村の人々は、満まん開かいの桜を見て、自分のことのようによろこびました。

春菜は、おじいさんの話を聞いて、多くの人々が長い年月にわたり、神代桜を守ろうとしてきたことを知りました。

見上げると、古木は今年もたくさんの花をさかせています。春菜には、今まで見たどんな桜よりも美うつくしく感かんじられました。

わたしたちのまちのおたから

社会科の時間に、自分たちがくらす地いきについて学習がくしゅうしたときのことです。

「自分たちが住んでいるまちのおたからさがしをしましょう。ほかのまちや県の人たち
にじまんできるような場所や物、お祭りまつりや行事などについてしらべ、来週らいしゅうの社会の時間に発表はつぴょうしてもらいま
す。」

と先生がおっしゃいました。

「こまったな。ぼくたちのすんでいるまちにおたからな
んてあるのかな。何をしらべればいいんだろう。」

「そうね、ぜんぜん思おもいかばないね。」

日曜日、健二けんじが、いっしょにかだいにとり組もうとやってきた同じクラスの絵里えりと話を

していると、それを聞いていた健二のお父さんが、

「甲州印伝こうしゅういんでんなんかどうだろう。むかしから甲府こうふで作られていて、今でも大ぜいの人が使っている工芸品こうげいひんだぞ。」

と言つて、さいふを見せてくれました。黒い地色じいろに、赤くて、つやのあるとんぼがいっぱいとんでいるデザインがとてもきれいなさいふでした。

「あつ、それ見たことある。それってわたしたちのまちで作られているんだ。知らなかったな。」

さいふを見ながら絵里がつぶやきました。二人は自分たちのしらべ学習のテーマを「甲州印伝」ときめ、さっそく、甲府市内にある甲州印伝を作っている工場をたずねました。

工場かたの方は、二人のほうもんを心よくうけ入れてくれ、甲州印伝について親切に教えてくれました。

「印伝というのはね、印度（インド）から伝わってきた、もようをつけたかわせいひんのことをいうんだよ。印度から伝来したものという意味いみで印伝とよばれるようになった

たと言われているよ。なんとそれが今からおよそ四百年もむかしのことなんだ。」

「印伝で、そんなに古くからあったんだ…。」

健二と絵里はその歴史れきしの長さにおどろきました。工場の方の話によると、江戸時代えどじだいには甲府のまちに数けんあった印伝細工ざいくしよ所も、時代のながれとともにその数がへっていったそうです。印伝細工所の人たちは、このままでは印伝の大切な伝でんとうがとだえてしまふと心配しんぱいし、印伝を守るまもるために何をしたらよいかを一生けんめい考えたのだそうです。

「しかのかわにうるしでもようをつけるというむかしながらのざいりようや作り方はきちんと守りながらも、人々が今どんなものをほしがっているのかということをしつかりとしらべ、新しい色や形、そしてデザインなどをすすんでとり入れ、人々がきたいする品物しなものづくりを心がけたりしたんだよ。」

と、話してくれました。

「長い長い時間をかけてできあがった伝とうのわざをきちんとしてしよう来らいにのこしていくこともわたしたちの宿題しゅくだいだけれども、おきやくさんの声に耳をかたむけ、新しいぎじゅつをとり入れながら、時代がうつりかわっても買ってってくれる人たちのきたいをうら切らないような品物を作りつづけていくことも大きなしゅくだいなんだ。」

と話してくれました。



印伝を作る人たちの、『印伝を後の世のちよにのこしたい』という強い思いと、そのくろやど力を知った二人にとって、健二のお父さんが見せてくれた甲州印伝のさいふは、何

だかとかくべつなもののように感じかんられました。

じゆぎょうでの発表もぶじにすみ、それからしばらくたつたある日のことです。お母さんの用事ようじでいっしょに東京に出かけた絵里は、デパートのレジのところではっとしました。前にならんでいた女の人が、ハンドバッグから甲州印伝のさいふをとり出したからです。それを見た絵里は、ちよつとほこらしい気持きもちちになり、

「それって、わたしたちのまちのおたからよ。」
と心の中でつぶやきました。

その三 小学校高学年用

ブッポウソウのなぞを解く

——中村幸雄——

ブッポウソウは、アフリカや熱帯アジアを中心に分布しており、日本へは夏鳥として初夏のころわたって来て、秋になると再び南方にわたって冬をこす鳥である。体は美しい青緑色で、くちばしと足は赤く、遠くからでもよく見分けることができる。古くから、この鳥は夜になると、ブッポソーと鳴くものとして、三宝鳥とも呼ばれ、人々から名鳥としてあつかわれていた。

しかし、この美しい鳥は、夜、ブッポソーと鳴く鳥ではないと確信していた人がいた。その人は、中村幸雄さんである。中村さんは、明治二十二年に河口湖畔にある河口村（富士河口湖町）で生まれた。河口村は、目の前に美しい富士山がながめられ、豊かな緑におおわれた静かなところであった。たくさんの野鳥が住みつき、初夏ともなると野鳥たちのにぎやかなさえずり声で包まれた。そんなすばらしい自然の中で育つた中村さんは、小さいころから、野鳥たちの声に耳をかたむけ、鳴き声をまね、鳥を追い回し、しだいに野



ブッポウソウ

鳥に興味をもつようになっていった。

少年の日の中村さんは、毎年夏が過ぎると野鳥たちが南の国へわたって行くのを観察しながら、南の国へ行っているいろいろな鳥を調べてみたいとあこがれていた。

昭和三年、三十九さいの時、その強い思いが実現し、南方へわたった。南の国の野山を鳥類を追って歩き回り、新しい発見をかさねていた。ブッポウソウは、どんな月あかりの夜でも活動しないこと、また、ブッポウソウと鳴いたことは全くなかったことを確にんしていた。山梨へ帰ってから野鳥を追いつつ、ブッポウソウは夜行性どころか、昼鳥の中でも朝ねぼうの鳥であることがわかってきた。

コノハズク



昭和十年四月のことである。愛知県の鳳来寺山から、NHKが、六月七日から八日にかけて、ブッポウソウの鳴き声をラジオで実況放送するという。中村さんは、(まちがっておぼえられたらこまるな。)と思った。ブッポウソウと鳴くのは、コノハズクにちがいないとわかっていたからである。しかし、まさしくこれがブッポウソウと鳴く鳥の正体であるという証をたしかめるまでは、うかつに発表することもできない。(なんとしても証このコノハズクをつかまえないくては……。)とさがし歩いたが、放送までには間に合わなかった。放送されたその声は、たしかにコノハ

ズクのものであつて、ブッポウソウの声ではなかつた。(自分が今まで研究してきたことを生かして事実を明らかにしよう。) 中村さんは、その時、固く心にちかつた。

それからの中村さんは、小さいころの少年にもどつたように、鳥の声を追い、鳥のすがたを求めて野山をかけめぐつた。昭和十年六月十二日の夕こく、御坂町(みさかちやう)(笛吹市御坂町)の松峰神社(ひみね)の森で、鳥かけをさがして野宿をしていたときであつた。日はすでにしずんでいき、その名ごりの明るさがほのかに大空にただよつていた。時計を見ると午後七時十五分である。とつ然、ブッポウソウの鳴き声が、百メートルはなれたかなたのトチの木から聞こえてきた。

(しめた。コノハズクにちがいない。) 中村さんは、静かに足音をしのばせ、大急ぎでトチの木の下にしのびよつた。鳴き声は、まだ続いている。トチの木の下に立って見上げると、枝をはったしげみは黒くろと空をおおい、鳥かけは全く見る事ができない。

(ああ、今夜もまただめか。) 中村さんは、相手が見えないもどかしさに力なくつぶやきながら、思わずトチの木をたたいた。そのかすかなしん動が鳥に伝わつたのであろうか。フワツと一羽の鳥かけがトチの木からはなれて、二メートルほどのかれ木の枝にとまつた。(なんと幸運なことだろう。) 中村さんは、すばやくじゆうを向けた。が、一しゅんためらつた。この鳥が鳴いてみなければ、たしかな証にならない。(早くうて。)とさいそくするはやる心をやつとおさえた。(ぐずぐずしていると鳥は飛んでいってしまうかも知れない。飛んでいってしまうえば、今までの苦勞が水のあわになつてしまう。) あせりながらも、じつと待つた。一、二分であつたらうか。ずいぶん長い時間のように思えた。

やがて、鳥は、「ブッポウソウ」と鳴き出したのである。終わりまで鳴かせるだけの余よゆうはなかつ

た。ついにうった。鳥は、バサバサと音を立ててかれ木にそうようにして落ちてきた。

それは、まさしくコノハズクであった。

「バンザイ。とうとうつかまえたぞ。」

と、中村さんは、あまりのうれしさに証このコノハズクをかた手にさし上げながら、その夜のうちに二里り（約八キロ）の山道を下っていった。

次の日、さっそくこのようすを鳥獸ちようじやう学者の内田清之助博士うちだせいのおすけはくしに報告した。博士は、上野の科学博物館において、この事実を学会に発表した。この日は、小さいころから足で歩いて事実をたしかめてきた中村さんにとって、生がい忘れることのできない記念の日となったのである。

中村さんは、このときどんな思いであったろうか。



藤原女医さん

山梨県の東北部、東京都の奥多摩町と接している山間地に小菅村があります。この村は、長年、村に医師がいない無医村でした。

「この村にもお医者さんがいてくれたら……。」

となり村の医者まで、急病人が村の若い人たちにかつがれていくのを見送るたびに、村の人たちは、そんな思いを強くするのです。

医者のない村でも、重病になると医者にかからないわけにはいきません。

そんな時には、となり村から往しんに來てもらっていました。しかし、そのころ村への道路は、けわしい山道で、道はばもせまく、自転車さえ乗って走ることのできないほどの悪路だったので、医者にみてもらうことは大変なことでした。

医者が来るのを待ってられないときは、急いで青竹でかごを作り、丸太を通してかついだり、むしろやかます、戸板などにねかせて、村の人が総出で運んだものでした。こんな状態だったので、重病人は、しんりようが手おくれとなつて、とうとい命をおとすことも多かつたのです。

そんな小菅村に、昭和二十二年、待ちに待った医者がやってきました。その人の名は『藤原くにゑ』えと言ひ、女医さんでした。藤原さんは、無医村で苦しんでいる村の様子を聞き、自分が手助けできるこ

とがあればと思い立って、この村にやって来たのです。

村の人たちは、大喜びし、藤原さんを温かくむかえ入れました。

藤原さんは、病人があればすぐにでも飛び出して行けるように、いつもうわっぱりを着ていました。村の人から、病気の知らせを受けると、どんなに夜おそくであろうと、またどんなにはげしく雨や雪がふつていようとも、病人のもとへかけつけました。

自転車に乗って走ることのできる場所は自転車で、それ以外の山道などは歩いてしん察に回りました。がいつももない暗い夜道を歩いていかなければならないこともあり、危険なこともしばしばでした。

こんな交通の不便さにおどろき、とまどいながらも、藤原さんは、村人たちのやさしさにふれ、この村でいつまでも医者としてすご



そうと固く決意したのです。

しかし、自分の体調が悪い時に病気の知らせを受けることもありました。熱が高く、ねこんでいる時などに知らせを受けると、気の重いこともあり、考えこんでしまうこともありました。そんな時でも、（わたしよりもっと苦しんでいる人がいる。その人は、わたしが行くのを待っているんだわ。）と、思い直し、急いでしたくをして飛び出して行きました。

このように、自分の体調が悪く、つらいときでもそんなことをわすれて何事もなかったかのように、つねに村の人たちの体を気づかう毎日でした。

しん察が終わると、まくら元で、いたみがおさまるまでつきそい、「がんばってごらん。きつとなおるよ。」

と、本人や家族をばげましながら、心のささえとなりました。

また、貧^{ます}しくてしんりよう代をお金ではらえない人々に対しても、

「お金のことなんか気にしないでいいのよ。」

と、かん者の心配を取りのぞくことにも心をそそぎました。

当時、藤原さんに世話になったというお年よりは、

「先生にみてもらって、主人が結核^{けっかく}にかかっていることが分かって、どうしたらよいかと方にくれてい
るわたしたちに『いつまでも家にいていいですよ。わたしがちゃんと面どうみてあげるからね。』と
やさしく、力強い言葉を投げかけてくださり、それからの十年間、ずっとみ続けてくださったんです。」
と、目を赤くうるませて話し、最後に、

「本当に生神様いきがみさまのような人でした。」

と、しみじみ語ってくれました。

そんな藤原さんは、少しでも長く村の人をみてあげられるようにと、自分の体も大事にしなから仕事を続けました。

しかし、昭和四十四年、藤原さんは不幸にも五十さいにも満たない年れいでガンにたおれ、その生がいを終えました。

りん終の場にかけて村の人たちは、「わたしたちの命をすくってくれた女医さんなのに、わたしたちは女医さんのために何もできなかった。」

と、冷たくなった藤原さんの手をにぎりしめ大つぶのなみだを流しました。

昭和五十四年におくられた「小菅村めいよ名誉村民第一号」のしょう号は、小菅村民の健康のために一生をささげた藤原女医さんに対する村民の深い思いが込められているのです。



富士ふじの日の出

「なあ、ゆみ子。今年こそ本当に登ってみないか。小学校生活最後の思い出に。」

「えっ。もしかして富士山のこと。」

おおさか大阪に住んでいたわたしは、小学校三年生のお正月に、家族旅行で初めて東京へ行きました。その新幹線かんから、富士山を見たのです。青い空にまっ白い雪。どっしりとしていてもきれいでした。そのときから、父に一度でいいから富士登山をしようとせがんでいたのです。

八月の上じゅんに三、七七六メートルの富士山ちようまで登山することになりました。

その日は、朝早く大阪をたち、かわぐちこはん河口湖畔に一ぱくして、次の日に登りました。

早めにお昼をすませ、ごうめ河口湖駅から五合目行きのバスに乗



りました。一時間ほどで五合目に着きました。

「いいお天気だ。」

バスからおりた人たちが、口々に話しています。本当にいい富士登山になりそうでよかつたなと思いましたが。六合目までは、思ったより広い登山道でした。

「ゆみ子、山中湖やまなかこが見えるよ。左は、忍野村おしの。大きな町が富士吉田市ふじよしだだ。」

わたしは、すばらしいながめにおどろきました。登っていくとどんな景色が見えるのだろうかと思ひになりました。

登るにしたがつて、岩と石だけのジグザグの道になってきました。つえをつきながら登っている人もいます。ときどき、石につまずいてころびそうになりました。少し息苦しくなり、休もうと思いましたが、ひと休みできるような木のかげも平らなところもありません。太陽がじりじりと体をせめてきます。七合目に着いたときには、せ中があせでべつとりとしていました。おまけに見えるものといえは岩と石だけです。もう、一歩も歩くのがいやでした。元氣のないわたしに、

「八合目まではすぐだよ。お姉ちゃんがんばれ。」

「ファイト。明日はすばらしい御来光ごらいこうが見られるよ。」

と、大勢の登山者が声をかけてくれました。八合目を目ざしてまた歩きました。登っても登っても、見えるものは、やっぱり岩と石のジグザグの道だけです。何回曲がっても小屋は遠く見えるばかりです。バスからおりてもう四時間。かかどがひりひりして、足はぼうのようです。途中、何回も何回も立ち止



まったり休んだりしながら、やっと八合目の小屋に着きました。時計の針は五時近くを指していました。

わたしは、小屋に着くなりしゃがみこんでしまいました。くつ下をぬいでみると、足にいくつもまめが出ていました。(もう登れない。帰りたい。仮^かみんしてちょう上まで登るなんて……) 父が手当てをしてくれましたが、夕食もあまりのどを通りません。横になるとすぐにねむってしまいました。

「ゆみ子、ゆみ子、起きなさい。」

父の声で起こされ、いたい足をひきずって外に出ました。まだうす暗く、風がふいていました。ほほをさすような冷たさに、ねむ気もどこかへふっ飛んでしまいました。

気がつくと、目の前一面に、わたのようなかたまりがいっぱい。

(これが雲海^{うんかい}なんだ。)

写真で見るとは大ちがい。わたしは雲の上に乗っているような気持ちになりました。



そのとき、

「わあ、出てくるぞ。」

と、大きな声。雲の間から明るい光がさつとさし、雲海がむらさき色からあかね色になってきました。だれも声をだす人はいません。じつと一点を見つめています。

赤い色はつきりしてきたかと思うと、みるみるうちに太陽が出てきて、辺りは黄金色こがねに包まれました。どの顔もかがやいています。

「ばんざあい、ばんざあい。」

「よかった、よかった。」

「きれだねえ。」

「すばらしい御来光だ。」

かん声とともに大きなはく手がわき起こりました。わたしは、父と手をつないで、何度も何度も「ばんざい、ばんざい。」をし続けました。

富士山には、こんなすばらしい自然の光景があったんだと思うと、何だか急に体に力がわいてきて、早くちよう上まで登ってみたくになりました。

御岳新道を切りひらく

—— 長田 円右衛門 ——

御岳昇仙峡のおく、仙娥滝をこえてすぐ左手の山ふところのしゃ面にあった猪狩村（甲府市）は、米は作れず、人々は麦、雑こくなどを作って細々とくらしていた。

猪狩、川窪、寒じごく
まして 黒平、おにが住む

と伝えられているくらいで、冬の寒さとともに、生活の不自由さにやりきれない思いが、数百年も続い

てきた。

村は、両側を山にはさまれた深いけい谷こくにあった。村人は、日用品を買うために、山からたきぎをせおい半日がかりで山をおりて甲府へ出た。たきぎを売っては、米やしょう油・塩や布などを求めて、家に帰り着くのは夕ぐれになってしまうほどの山おくの村だった。村の人たちは、

「こんなくらしはもうたくさんだ。」

「生活をたてていくには、甲府への近道がほしい。何とかならないものか。」

と、おりあるごとに、口にした。だれもが、長い間、心の



御岳昇仙峡の位置

底から望んでいたことであつた。

天保四年（一八三三年）、猪狩村の長田円右エ門は、新道を切りひらくきたい。力をかしてほしい。」

と、村人によびかけた。しかし、貧しい村だけに、工事費もかかり

「岩の重なつた荒川の岸を、いったいどのようにして切りひらくというのか。」

「そんなことができるわけがない。」

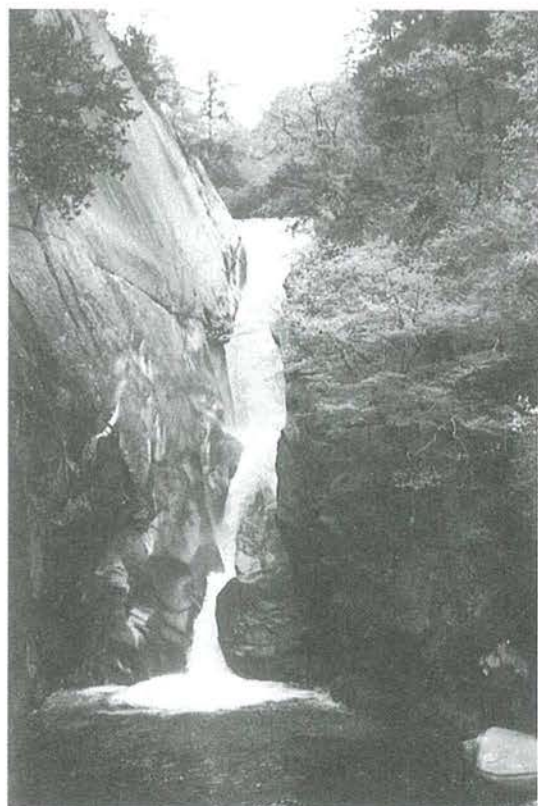
と、その計画の無ぼううさに反対する人が多かつた。

「いつときの損はあつても、新道がひらけば、くらしはずつと楽になる。」

「きつとうめ合わせはできる。」
と、熱心にたのんで回つた。

工事は始められたが、新道を切りひらくことは、なみたいていのことではなかつた。荒川がわん曲して、水がはげしく岸にあたるところは、うっかりしていると足をすくわれ、水に流されてしまうほどの危険なところであつた。今のように車も機械もなかつたと





仙娥滝

きで、道具といっても、おのやくわ、つるはしなどで、もっこをかついで体を使っての工事は、それは大変なものであった。一日中働いても思うように進まず、村人は苦労がかさみ、つかれはたまるばかりであった。

ところが、新道が仙娥滝を目の前にするくらみ岩の上に出たとき、思いがけない景勝が、まばゆいほど近くに展開したのである。

「わあっ。これはみごとだ。何とすばらしいながめだろう。」

「こんな景色は、見たこともない。」

村人は、工事のつかれも忘れたかのように、さげんだ。感じきの声が山々にこだました。それまでは、仙娥滝のま下のけい谷は、山ふところにあつて人目にふれることがなかった。生活のために切りひらいた道が、思いがけずも、天下の名勝地のまく開けとなったのである。

このよるこびもつかの間、何日もふり続いた雨がこう水となり、あっけなく新道をおし流してしまつた。

「ああっ。なんとということだ。」

「今までの苦労が水のあわになつてしまった。」

村人たちは、とほうにくれてしまった。大ききんと重なり、工事の再開は望むべくもなかった。

一年、二年と年月は過ぎていった。相変わらず村のくらしは、貧しかった。だが円右エ門は、なんとしても新道をひらきたいと工事の望みをすてていなかった。村人にもう一度やってみようとたのんだ。しかし、なかなか協力してもらえなかった。円右エ門は、くじけずにたのみ続けた。とうとう四年後の天保十一年（一八四〇年）工事が再開されることになった。工事を進めるには、お金がかかった。円右エ門は、すでに家ざいまで投げ出してしまったので、無一文であった。そこで、近くの村々を一けん一けんお金を出してほしいとたのんで歩いた。あまりの熱心さに、だんだん、村ごとの寄付が集まるようになったのである。

いよいよ工事が始められた。円右エ門は、村人とは別に、もっともなん所といわれた滝下から、なめ岩付近までの工事を引き受けた。（こんなみごとな景勝地をうもらせてなるものか。人々の行き来が増えれば、村のくらしはきつとよくなる。金桜神社かなざくらの参拝い者もこの道を通るにちがいない。新しい文化も入ってくる。）これからの村の変わり行く姿を想像し、円右エ門の夢はふくらむばかりであった。

来る日も来る日も、山を切り、岩をくだき続けた。身をけずるような苦労を重ねた結果、やっとのことで新道が完成した。円右エ門の目には、よろこびのなみだが光っていた。新道を切りひらこうとしてから、十年もの月日が流れていた。

現在、御岳昇仙峡は、日本でも有名なけい谷美こくびをほこる観光地として、多くの人々の心を楽しませている。

フットボールの父 ポール・ラッシュユ



現在のラッシュユボール

アメリカン・フットボールは、その名のとおり、アメリカで生まれたスポーツである。野球やバスケットボールもアメリカで生まれたスポーツであるが、フットボールは、それらをはるかに上回るファンをもつ、アメリカを代表する国技こくぎである。日本でも、年々愛好者やチームの数が増えている。

ところで、このフットボールを初めて日本にしようかいたしたのは、やまなし山梨県とつながりの深い、『清里きよさとの父』ポール・ラッシュユである。ポール・ラッシュユは、大正十四年（一九二五年）の春、関東大震災しんさいで大きな被害を受けて間もない東京へ初めてやってきた。二十八さいの時のことである。ポールは、教会や病院などの再建の仕事が終わるとすぐ

にアメリカへ帰る予定であったが、周りの人たちにひきとめられて、そのまま日本に残って教育の仕事を行うことになった。立教大学りつきやうの先生になったポールは、英語などを学生たちに教えた。こうして、日

*清里の父：ポール・ラッシュユは、戦前から清里の開発に取り組み、戦後は、モデル農村計画で酪農の導入を行い、現在の清里の基礎を築いた。現在キープ協会が彼の理念を引き継ぎ、国際交流や援助活動などを行っている。清里には、ポール・ラッシュユ記念館がある。

本を知る機会が増えるごとに、ボールの心はしだいに日本そのものを愛していくようになった。

日本とアメリカが、おたがいに理解し合い、さらに両国の交流が進むことを願っていたポールは、「アメリカの国技フットボールを日本にしようかいしよう。そうすれば、日本の若者にアメリカの心や文化を知ってもらおうよいきっかけになる。そして、日本人は、このスポーツをきつと好きになってくれるだろう。これは、ぜひ実行しなければ。」

と、フットボールによる交流会を心に決めた。ポールは、スポーツには、言葉のかべがなく、スポーツがもつルールや楽しみ方などは、そのスポーツを生んだ国の文化を一番よく表す、といつも考えていたからである。フットボールを日本にしようかいしようというポールの考えに、多くの日本人やアメリカ人も賛成し、力を合わせていくことになった。

そのころの日本には、当然フットボールの用具などなかったし、フットボールができる日本人もいなかった。そこで、実際に使う用具を取り寄せて、何とかまねして作ったり、ラグビーの選手にフットボールを教えたりするという苦心のすえに、やっと試合ができるまでにこぎつけたのである。このようにな多くの人たちの努力によって、昭和九年（一九三四年）十一月二十九日、日本で最初の記念すべき試合が東京で行われた。それも日本チーム対アメリカチームという形で。ポールは、試合を前に、苦勞を共にした人たちの手を取って喜んだ。

「今日は、日本とアメリカの本当の交流が始まる記念の日かも知れないね。」

その後、ポールのえん助もあって、日本チームは本場アメリカにまで行くようになり、フットボールは、順調に日本に広まっていくかと思えた。

しかし、昭和十六年になると、日本とアメリカの関係は、今にも戦争が始まるような悪い関係になっていった。ポールの友人たちも次々にアメリカに帰国していったが、ポールは、日本とアメリカの関係が良くなることを願い、日本にとどまっていた。十二月七日、ポールはアメリカに向けてのラジオ放送で、スポーツを通

じての日本とアメリカの今までの交流のことや、フットボールというスポーツの種が日本にまかれ、友情の芽が育ちつつあることなどを一生けん命に語った。何とか戦争にならないようにと一心いっしんであった。だが、何ということか、ラジオ放送の次の日、ポールの願いもむなしく、日本とアメリカの戦争がついに始まってしまった。ポールの心は、なまりのように重く、大きな悲しみに包まれた。

「わたしが、今までがんばって築きずいてきたものは何だったんだろう。」



日本初のフットボールの試合

なみだがとめどもなく流れ、くやしきでこぶしがふるえた。

ポールの教えたフットボールの選手たちは、戦場へ送られ、ポール自身も敵国人ということで、アメリカに帰されることになった。出発の日、ポールは悲しみをこらえ、見送りの人たちにこういった。

「わたしは、必ず日本にもどってくるよ。世の中が平和になったら、またフットボールをやるうじやないか。必ずね。」

昭和二十年、戦争が終わった。その年ポールは、再び日本に帰ってきた。そして、かれの言葉どおり、二年後にフットボールがよみがえったのである。ポールのまいたフットボールという種は、今、日本で大きく育っている。

ポールは、『フットボールの父』と呼ばれ、全日本*選手権せんしゅけん（ライスボウル）での最ゆうしゅう選手には、ポール・ラッシュはし杯はいがおくられている。さらに心から愛した清里にねむるポールを記念して、毎年ラッシュボウルも山梨県で行われている。『フットボールの父』ポール・ラッシュ。かれは、清里のおかで何を願ねがい、何を見つめているのだろうか。

*全日本選手権（ライスボウル）

…毎年正月に行われ、大学と社会人の代表チームによって、そのシーズンの日本一のチームが決められる。ライスとは米、ボウルとは競技場のことで、ライスボウルは、日本を代表するゲームの意味。

花のかおりに生きて

—— 望月春江 ——

県立美術館には、毎年の春の訪れにあわせて、展示されている日本画があります。八重ザクラが大画面いっばいに浮かび上がり、明るい春の気配がただよう花の美しさに、大勢の人たちが足をとめて見入っています。明治二十六年、甲府市で生まれた望月春江（本名 尚）の作品「惜春」です。

尚が少年時代を過ごした家には、庭に四季おりおりの花があふれていました。尚はそこに集まるチョウや虫たちと遊んだり、絵をかいたりすることを何よりも楽しみとして育ちました。あるとき、庭のツバキの美しさにひかれた尚は、姉から絵の具を借りて色をつけてみました。しかし、どうしてもつやつやした緑の葉の色が出せず、何とかしてその色を出そうと、あれこれ考えてみました。

(そうだ、空豆そらまめをしぼって見たらどうだろうか。いい色が出るかもしれない。)

それはきれいな緑色でした。ところが、紙の上でかわくにつれ、きたないしみへと変わってしまい、その色の違いには、大変がっかりしたものでした。

このころの、図画や美術の勉強といえば、墨すみでかかれた線や古い絵などをまねてかくことが、ほとんどでした。身の回りにあるいろいろなものを自由にかくことを楽しみとしていた尚には、何かもの足りなさが感じられてなりませんでした。

中学校を卒業すると、家族のすすめもあって、医者をめざして東京で生活することになりました。勉強にはげんでいたある日のことです。美術史の学者、中川忠順ちゅうじゅん先生が、中学生のときに尚のかいた人物画をぐう然に目にしました。先生は、尚の絵をみて感心し、

「きみには素晴らしい才能があるようだね……。どうだろう、医者になるのもよいが、この才能をみがいて、絵かきの道に進んでみる気はないか。」

といわれたのです。あまりにも突然の話でした。絵かきになるためには、医者への道をあきらめて美術学校へ進まなければならず、かんたんには返事ができません。何日もなやみしました。けれども尚は、ついに画家えいしやを志して勉強しようと決意しました。

尚は、必死で絵の勉強に打ち込みました。写生に出かけては、花の生き生きとした表情や、最も美しい瞬間しゆんを見のがすまいと、けん命に筆を走らせました。往復おうふくに、四、五時間もかけたり、寒い北風の中で、梅の花を見つめて朝から夕ぐれまでかき続けたりしました。その一方で、尚は、日本画のもとになっっている絵の勉強にもはげみました。中国の絵画の歴史と「墨すみ絵」の研究です。

こうした日ごろの努力のかいあって、少しずつ自信を深めることができるようになった尚は、画家としての名前を「春江^{しゅんこう}」とし、毎年大作にいどみ、多くの展覧会で作品を発表するようになりました。古い技法の研究の上に、新しい表現の方法を工夫した作品は、美術の世界で高い評価を受けるようになりました。

絵の道に進んで五十年ほどしたときのことです。美術学校を卒業したところに、郷里^{きょうり}の庭でかいたダリアの絵をみる機会^{きかい}がありました。それは、実にのびのびとしていたダリアでした。色の作りかたや筆の運びに欠点はありませんでしたが、とても楽しそうに見え、不思議と心が引き付けられたのです。みごとにダリアをみて、夢中になってかきあげた一枚でした。春江は画家としての大切なことは、いつも新鮮な^{せん}感動をもつて絵に取り組むことだと改めて思ったのです。このときほど、絵の道のけわしさを思い知らされたことはありませんでした。

春江は、花との対話を楽しむように、気に入った花や木を庭に植えては、花のにおいを心から味わったり、花の性質を植物学の本で調べては、スケッチブックにかき写したりしていました。そんなある日、静かに花と向き合い筆を運んでいると、花の色や形のなかから、その花の美しさともいえる輝^{かがや}きが、本当の姿として見えてくるような気がしました。

（そうだ、花をかくことは、何枚も写生を重ねたあとに、やっと自分の心の目で見つけ出すことができる本当の美しさを表すことだったんだ……）

こうして一番大切なことに気づいた春江は、それからも努力をおしまず、花々に自分の心を近づけながら写生を続けました。春江の作品に、墨を使った新しい表現の方法がみられるようになったのは、

ちょうどこのころからでした。

（いつかは、大画面へいっぱいにはサクラの花をかいてみたい。それも堂々と真つ正面から……。）

年をとり、春江はずっと以前から、ぜひかいてみたいと思っていた絵のことが頭から離れなくなりました。それは幼い日、特に好きだったふるさとの春、学校の窓からながめた忘れることのできないサクラの姿でした。あわい八重ざきの花の見ごとさは日本の美しさそのものでした。

病をおして、何枚もの下書きをねり直し、八重ザクラの大輪たいりんが二百号の大画面に満開にさきほこった「惜春」せきしゆんの完成は、望月春江、八十四さい、昭和五十三年、なくなる一年前のことでした。画面を引きしめる墨の使い方や、輝く金ばく地いっばいにえがかれた花の姿など、新しい技法が工夫されてサクラの花の美しさが、絵のすみずみにまで広がっています。六十数年の画家としての生活の中でみがきあげたもののすべてが、いっせいに花開かれたようなその作品は、多くの人々を感動させました。

自然教室でのできごと

七月の初め、八ヶ岳やつかがたけのふもとで一ぱく二日の自然教室が行われた。午前中は、植物園の草取りや花のなえ植えのお手伝いをしたり、おし花を使った工作をしたりしてすごした。午後は、宿はくするキャンプ場へ向かい、キャンプ場周辺の自然を散さくしてすごした。午前中はとてもよい天気だったのに、ぼくたちがキャンプ場へ帰ってくるころには、雨がふり始めていた。

夕ご飯は、飯ごうすいさんでカレーを作ることになっていた。それぞれの担当たんとうに分かれ、じゅんぴを始めた。

「かまど係は、火をおこしはじめるように。」

先生の声が聞こえた。ぼくは、となりのはんの信二君しんじといっしょにまきが置かれている小屋へ走って行き、火を付けるために必要な、よくもえそうな小えだをかき集め炊事場すいじばへもどろうとした。その時、

「そんなに持っていったら他のはんの分がなくなっちゃうよ。」
と、信二君に声をかけられた。

「だいじょうぶだよ。まだあるじゃないか。それに、まきに火がつかなかつたら、また持ちこなくちゃいけないだろ。」

「でも、『水やまきは、必要以上に使わないようにしましょう。』っ



て、炊事場にもはり紙がしてあつただろう。」

「小えだだから、だいじょうぶだよ。」

信二君は、なっとくのいかなない表情ひようじょうをうかべていたが、ほくはそのまま炊事場へもどった。

ぴかっ。ゴロゴロゴロ。

大きなかみなりがいきなり鳴ったかと思つたら、その直後に電気が消えてしまった。このキャンプ場は、水道の水を下の貯水池からモーターでくみ上げているようで、モーターが止まって水も出なくなつてしまった。こまっているとキャンプ場の管理人さんが、

「めいわくをかけてすみませんね。すぐにもとどおりになると思いますから、それまで、このポリタンクの水を使つていてください。」

と、伝えに来てくれた。ほくたちは、ひとまず安心してカレー作りを続けた。

「正君ただし、カレーをにこむ水と、道具をあらう水を持つてきてよ。」

と、同じはんの智子ともこさんに言われたので、なべを持ってポリタンクの所へ行つた。タンクの水は、だいぶ使われていて残りが少なくなつてきていた。(管理人さんもすぐにもとどおりになるつて言つていたからだいじょうぶだよな。それにだれも見えていないし……。)と思ひながら、ほくはまよつたが、少し多めになべに水を入れた。水を持ちながら、ほくは、だれかに見られているような気がして走つて自分のはんにもどつた。

その後、キャンプ場ではこまつたことが起きた。信二君と沙也加さやかさんのはんのカレーに入れる水が足りなくなつてしまつたのだ。

「こまったなあ。タンクに残っている水の量では、ぼくらのはんには足りないぞ。」

「まだ停電は続いているわね。本当に電気はくるのかしら。」

「ここに『水やまきは、必要以上に使わないようにしましょう。』って書いてあるのに。こんな時は一人一リットルまでとするなどでなければ不公平だよ・・・。」

そんな信二君と沙也加さんの声が聞こえてきた。(ぼくが入れた水の量は、自分のはんのカレーをにこむための量より少し多いだけだ。ぼくは、信二君と沙也加さんのはんが必要な水を、全部持ってきてしまったわけではない。きつとぼくのあとにも次から次へと水をくみに来たに違いない。信二君と沙也加さんのはんが作るのがおそいからいけないんだ。だから、ぼくは悪くない。) そんなことを思いながら、ぼくは自分のはんの仕事をやり続けた。

その後、信二君と沙也加さんはこまってしまい、先生に相談に行った。結局、先生が管理人さんをお願いして水をかくほしてもらえたことになった。管理人さんは雨の中、車で二十分くらいの所にある道の駅まで水をもらいに行ってくれた。そのため、信二君と沙也加さんのはんだけ、みんなが夕ご飯を食べ終わるころ、食べ始めることになった。夕ご飯のかた付けが始まるころになると電気はもとどおりになり、水道も使えるようになった。ぼくは、沙也加さんと信二君のはんが夕ご飯を食べている横は通らずに、遠回りして炊事場へと向かった。

次の日、ぼくたちは、八ヶ岳やつかがたけなんろく南麓にある三分一湧水さんぶんいちゆうすいへ立ちよった。朝からとても暑い日だったが、木もれ日がふり注ぐ遊歩道を歩いていると、とてもすずしく気持ちよかった。

「あれ、あそこ見てみるよ。水の中に三角の石がおいてあるぞ。」



三分一湧水

と、だれかがさげんだ。ぼくも四角く囲まれた池のような所に、三角の形の石が置かれているのに気がついた。

「よく気がついたね。」

そうじをしていたおじさんが、正たちに声をかけてきた。

「この地域の人たちは、昔からこの水を使って米作りをしていたんだよ。でもね、最初からこの湧水をみんなで平等に使っていたわけではないんだ。その昔、米作りのために、水を取り合う『水争い』みずあらしという争いごとが、何度となくくり返されていたんだよ。」

「何でそんなことしたの。」

「昔は、米が命と同じくらい大切だったから、どうしても自分たちの地いきへ水を引きたくて、他の地域のことも考えず、水を取り合うようになってしまったんだ。だけど、その『水争い』も地域の人たちの話し合いや代官所のちゅうさいによってまとめられて、東・中・西の分水口から三等分する今のようひがしなかにしな水利利用の仕方になってきたんだよ。この三角の石に水が当たって、三つの地域で平等に使えるようになったのも、長い間のため重なる『水争い』の結果生み出された、昔の人のちえなんだろうな。」

正は、三方向に流れる湧水をじっと見つめながら、昨日の飯ごうすいさんのことを思い出し、むねが少しいたむような気がした。

湖をわたる風

「あしたは、河口湖クリーンアップキャンペーンだからちこくしないように。」
帰りの会で先生が話されたとき、ぼくは、親友の悠人君と目が合った。

「悠人君は、行くの。」
と聞くと、

「めんどうくさいから行かない。それより、ぼくんちに遊びに来ないか。」
と遊びにさそってくれた。ぼくもなんだかめんどうになり、

「うん、いいよ。」
と答えた。

その夜、ぼくは好きなテレビ番組を見ていてねるのがおそくなってしまった。

「あした、雨になればいいなあ。」
そう思っふとんにもぐった。

よく朝、ぼくの願いとは反対にいい天気になった。
「お兄ちゃん、もう行くよ。」



妹のみかの声でした。ぼくは、

「悠人君と遊ぶ約束をしたから行かない。」

と言いつつ、ふとんの中でぐずぐずしていた。すると、

「特別な用がない人は行くように、先生が言っていたよ。」

と、ふたたび妹の声がした。

「さとし、あなた六年生なのに、小さい子のお手本にならなくちゃ。」

お母さんの声もした。ぼくは仕方なくふとんから出て、悠人君にことわりの電話をした。

「せっかくなので日曜日なのに——。」

そう思いながら、ぼくはしたくをした。

集合場所の広場に行くと、思ったよりも大勢おおぜいの人がいた。なぜか、みんな楽しそうにおしゃべりをしている。よく見ると、去年までいっしょに遊んだ中学生の徹君とあるのすうがたもあつた。

「なんでみんな、ここに来るんだらう。」

ぼくには、みんなが楽しそうにここに集まってくるのがよくわからない。

湖に行ってみると、遠くからは見えなかったごみがたく



さん落ちていた。

半分土にうまっているあきかんやペットボトル。つり糸。食べ残したまますてられたお弁当。

「きたないなあ。」

そう思いながら、ぼくはごみをひろっていった。

「さとし君、ごくろうさん。がんばっているみたいね。」

声をかけてきたのは、中学校の生徒会長のあけみさんだった。あけみさんは、小学校のころからぼくたちのリーダーとして児童会活動でも先頭に立って活やくしていた。仕方なくごみをひろっていたぼくは、ちょっとはずかしくなった。ぼくのふくろの中のごみを見て、あけみさんが何か言いそうな気がして、ぼくは思わずふくろをうしろにかくした。

「ごみはきたないし、においもあっていやよね。あつ、徹君がもどってきた。」

と言って、あけみさんは向こうを指さした。見ると、徹君が小さな子をつれてやってきた。

「お兄ちゃん、湖のお魚さんたち、喜んでるかな。」

「もちろん、喜んでるよ。湖がきれいになると、みんながうれしくなるね。」

二人の話し声が近づいてきた。

「さとし君、ごみは見つかったかい。」

徹君は、あまりごみが入っていないぼくのふくろをちらっと見て話しかけてきた。

「ぼくも、前はごみひろいなんかよりも遊んでいたと思うんだけど——」。



徹君の手には、ごみでいっぱいになったふくろがあった。

「つりばりを飲んでぐったりとしたカモを見つけたんだ。いつもつり糸をそのまますてていたぼくはどきっとしてね、このままじゃいけないと思ったんだ。」

と言って、ふくろをぼくに見せた。

「ここから見える富士山はいつ見てもきれいなね。徹君みたいな人がふえたら、もっともつと湖がきれいになるわ。」

あけみさんはそう言って、徹君の方を見て笑った。徹君は、小さくガッツポーズをした。自分がひろったふくろと徹君のふくろは、ずいぶん量がちがっていた。去年、ごみゼロ運動の時いっしょにふざけていた徹君が、今はなんだかっこよく見えた。

集合場所にもどると、予想以上のごみが集まっていた。

「がんばったね。」

と、お母さんが声をかけてくれた時、湖からふわっと風がふいてきた。

「あつ、いい風。」

お母さんは、湖の方を見た。ぼくもふりむくと、湖はきらきらと光り、富士山がどうどうとそびえていた。みんなの手できれいになった湖の上をさわやかに風が通りすぎていった。

その四 中学校下級学年用

地方病とのたたかい

「健造先生、お父を助けてください。腹がこんなにふくれてどうしたらいいんだか……。」

「頭が痛いし、体はだるくて草取りもできやしない。何とかならないですか。」

明治二十四年、杉浦健造（二十五歳）が中巨摩郡西条村（昭和町）の医院を継いだ時、診察に訪れる患者は毎日六十人は超え、そのほとんどは腸満（地方病）の症状を訴えていたが、効果的な治療法はなかった。

甲府盆地には、二・三百年くらい前から腸満という原因不明の恐ろしい病気があり、米づくりをする農民たちは苦しめられていた。この病気は、水田で仕事をしたり、川で水遊びをすると発病し、肝臓やすい臓が侵されて腹がふくれ、頭痛に苦しむ等の症状の末、死に至る病気である。牛や馬などの哺乳類も病気にかかり、一度発病すれば死ぬまで治ることのない病気である。どうしてこの地域だけ発病するのか、まったくわかっていなかった。

健造は、原因の解明のため、日中は患者の診察や往診、夜は地方病の研究に取り組み生活であった。屋敷には動物小屋を建て、牛や馬などの家畜を百頭以上も飼育し、実験や解剖を繰り返した。

明治三十七年、多くの研究者たちの努力が実り、日本住血吸虫（寄生虫）が原因であることが究明され、「日本住血吸虫病」と命名された。続いて、人体への侵入経路の研究が始まり、発病者の便と一緒に排出された卵がかえり、○二ミリほどのセルカリアに成長すると、皮膚を通じて体内に浸入し成虫になることがつきとめられた。そして、セルカリアは、水田や田で多数見られる七ミリほどの宮入貝みやいりがいの中で成長していくことが明確になるに及んで、地方病の姿が明らかになっていった。しかし、これで戦いが終わるのではなく、この時から治療法の開発と宮入貝の撲滅、という本当の戦いが始まった。

*セルカリア：尾を持った幼虫で、水中を泳ぎ、水に入った哺乳類の健康な皮膚から侵入する。

*宮入貝：別名「片山貝」。特に水流の停滞している水路や水田のあぜに住む巻貝、宮入慶之助教授によって発見、命名された。

健造は、宮入員の生息調査せいそくや、効果的な薬の開発に積極的に参加し、多くの研究者を自宅に招いての研究や援助、動物実験を繰り返した。そして、大正十二年、待ち望んでいた特効薬（スチブナール）が発表された。

健造はいち早くこの薬を取り寄せ、手にした時には涙が止まらなかった。今までの努力が報われた思いと、これから毎日患者を救うことができるうれしさでいっぱいであった。

「地方病は治らないとあきらめていた患者たちに、希望をもたせることができる。」
と思い、明日からの診療に期待をもった。

しかし、喜んでばかりはいられなかった。それは、強い薬であり、使用量や副作用など、解明されていない部分が残っていることであった。

夜の診察室で注射薬を手にとって健造はひとり悩んだ。

「患者は毎日の農作業で疲れている農民だ。そんな体に打つてもだいじょうぶだろうか。」

「こんな強い薬を使って、副作用が表われないか。心臓の負担は。」

心配の種はふくらむ一方であった。

「しかし、このままでは……。」

健造は、今までに診察した患者の病状や治療の記録を一枚一枚ていねいに読み返した。それは患者と一緒に病気と戦った記録でもあった。

「苦しい病状のなかでもみんながんばってきたんだ。今、使わなければ地方病の患者を救うことはできない。よし、使おう。」

読み終わった時に健造は決意した。

翌日から健造は、スチブナールを使い始めた。しかし、まだ手探り状態の診療であった。



昭和五年。杉浦三郎^{すぎうらみさぶろう}は父の医院を継ぎ、スチブナールの研究を続け、症状や検便の結果から使用量を割り出したり、体力に応じて栄養剤を混入したりするなどの効果的な治療法を見いだした。しかし、約一か月間、一日おきに十本から二十本の注射を続ける必要があり、患者の負担となった。しかも、注射を受けると、体がだるくて働けないような副作用が表われることもあり、途中で治療をやめてしまう患者もいた。まさに、三郎にとっても農民にとっても病気との戦いであった。

「今日が最後だ。よくがんばったな。」

最後の注射をする時に、三郎が患者たちにも笑顔で言うことばであった。

こうして、病気に対する治療は徐々に進んでいった。

しかし、宮入員の撲滅の動きはなかなか進まないために、二度、三度と病気にかかる農民もいた。^{*}有病地^{ゆうびんち}では五人にひとりの割合で発病する年もあった。そのため、杉浦医院には、毎日百人を越す患者が訪れた。

宮入員の撲滅方法は、石灰散布や火炎放射で焼き殺す方法が中心であったが、生息地域が水田、川、野原と広く、なかなか成果が上がらなかった。それは、農民の中には

*有病地：病気の発生している地域。

「地方病が怖くて百姓をしていられるか。」

「といって協力しない農民がいたことも原因であった。そんな時、三郎は

「病気になるったら働けないぞ。農作業で忙しいかもしれないが、みんなでがんばらねば。」

と、訴え続けるしかなかった。また、撲滅作業に参加している農民の多くは、子どものころから水田や川で両手ですくえるほどの宮入員を見ているので、作業の効果をあまり期待していなかった。そのため、

「病気になるたら三郎先生にスチブナールで治してもらえばいい。」

という声まで三郎には聞こえてきた。

「これではいつまでたっても病人はなくなるらない。」

と、三郎はつぶやいた。しかし、三郎は往診の帰り道など時間がある時は、農作業をしている農民に病気の恐ろしさや後遺症について話したり、予防方法を教えたり、村人の検便を実施し、早期発見にも努めた。

昭和二十八年。強力な殺菌剤（さつ菌ざい）が米軍の協力のもとで開発された。今までの石灰散布や火炎放射に加えた大がかりな作業になったが、撲滅させたいと願う農民の呼びかけが強まり、参加する農民の姿が日に日に増えていった。以後毎年、多くの村民が参加して殺菌作業は進められ、農民の予防意識も高まり発病率は低下した。

そして、感染した宮入員は昭和五十二年以後、新しい患者は昭和五十四年以降確認されていない。まさに杉浦健造・三郎親子をはじめ、多くの医療関係者、農民の百年がかりの地方病との戦いの結果であり、有病地の住民の悲願が達成されようとしている。この戦いの中で、杉浦三郎は地方病の研究の功績により日本医師会から県民として初めて、^{*}最高優功賞が贈られた。これは、地方病撲滅に取り組む県民にとって大きな支えになり、三郎ともども喜びあったの
はいうまでもない。

*最高優功賞：日本医師会の創立を記念して毎年十一月一日に、全国で研究や職責に功績のあった医師・団体を表彰。特に研究部門では三人以内の表彰である。

いのちの輝き

——ハンセン病救済に生涯をかけた女医——

「父ちゃん、父ちゃん、父チャーん。」

坂道を走り下る少年は、声を限りに叫びながら、父が乗るトラックを追って来る。いくら走ったとて、追いつくはずはないのに駆けおりてくるのだ。

「父ちゃんは病院へ行くからな。母ちゃんの言うことをよく聞くんだぞ。」

父親の涙声。妻は、ことばにならない声を詰まらせ、下くちびるをかみしめながら、下の子を抱きしめている。

父親が、ハンセン病（癩病）患者となったばかりに、親と子、そして夫婦が、こうした悲しい別れを迎えなければならぬ。

病院へ向かうトラックは、妻と子を残したまま、山すそのガタガタ道を走って行く。父親は、荷台の縁を両手でにぎりしめたまま、肩を震わせ号泣しつづける。次第に小さくなっていく少年の姿と、父親の背中とを見つめていた女医小川正子（生きながらにして、永遠に別れて住まねばならないこの病の悲劇。こんな不幸な目にある人が、一人でもあつてよいだろうか。）彼女は思わず目頭を押さえた。

また、ある日。桃の木畑に囲まれた丘の一軒家を訪ねたことがあつた。

「あかりをつけましょ ほんぼりに、お花をあげましょ、桃の花……。」

しわがれた歌声がかすかに漏れてくる。

「ごめんください。ごめんください。」

「……………」

*ハンセン病…癩病の別名。一八七四年、ノルウエーのハンセン氏がその菌を発見、伝染を確認した。

しばらくして、のそのそと出て来た中年の女性は、うつろな目を向けたままである。正子は、ふと部屋の奥を見た。南向きの壁に、欠けて古ぼけたひな人形が飾られてある。人里離れた小島の山陰^{やまかげ}で、独りでひな祭をしていたのだ。正子は、そっと手を差ししのべた。彼女は手袋をはめていた。よくよく見ると、足の先もくずれかかった重症患者である。

「愛生園^{*}から参りました。あなたのようなお気の毒な方たちがいる病院の者です。ねえ、あなた。」
すると、いきなり柱へもたれかかって、大声で泣き出してしまった。

「どうしたんです。」

「病院へ行く銭が、銭がありませんじゃあ。……でも、こんなに優しく言ってくれる人、今までになかったんじゃ。」
板の間に泣き伏してすすり泣く彼女の肩を、正子はしっかりと抱き支えた。

これらは、患者の収容とその家族の診断をするために、土佐（高知県）の山村巡りの任務を指示され、活動していたときの出来事である。

小川正子女史は、一九〇二年（明治三五年）東山梨郡春日居町、小川清貴氏の三女として生まれた。山梨県立甲府高等女学校（現甲府西校の前身）卒業後、東京女子医専（現東京女子医科大学）に学ぶ。当時、救癩運動に専念していた光田健輔博士に私淑[＊]していた。卒業と同時に、愛生園で働くことを決意し、光田園長に申し出た。

「家族とよく相談の上、是が非でもというのなら、二、三年大きな病院で、内科・小児科を十分にマスターし、開業医として通用する腕を磨いてからにしてほしい。」

との返事であった。

正子は、大久保病院で細菌学と内科を、賛育会^{さんいく}で小児科の勉強に励んだ。そして二年後、再び光田園長に願ひ出

*愛生園…光田博士が、一九二八年（昭和三年）苦心の末設立した隔離された救癩施設。岡山県の孤島、長島（瀬戸内海）にある。
*私淑…直接には教えを受けないが、ひそかに師として尊敬して学ぶこと。

たが、いっこうに返事はなかった。直接交渉をしなればと教えられ、不退転ふたいてんの決意で愛生園に向向いた。

一九三二年（昭和七年）六月、正子は三十歳であった。

（長島へ行けば、二度と家族と会うことはできない。しかし、ハンセン病絶滅のために役立ちたい。）

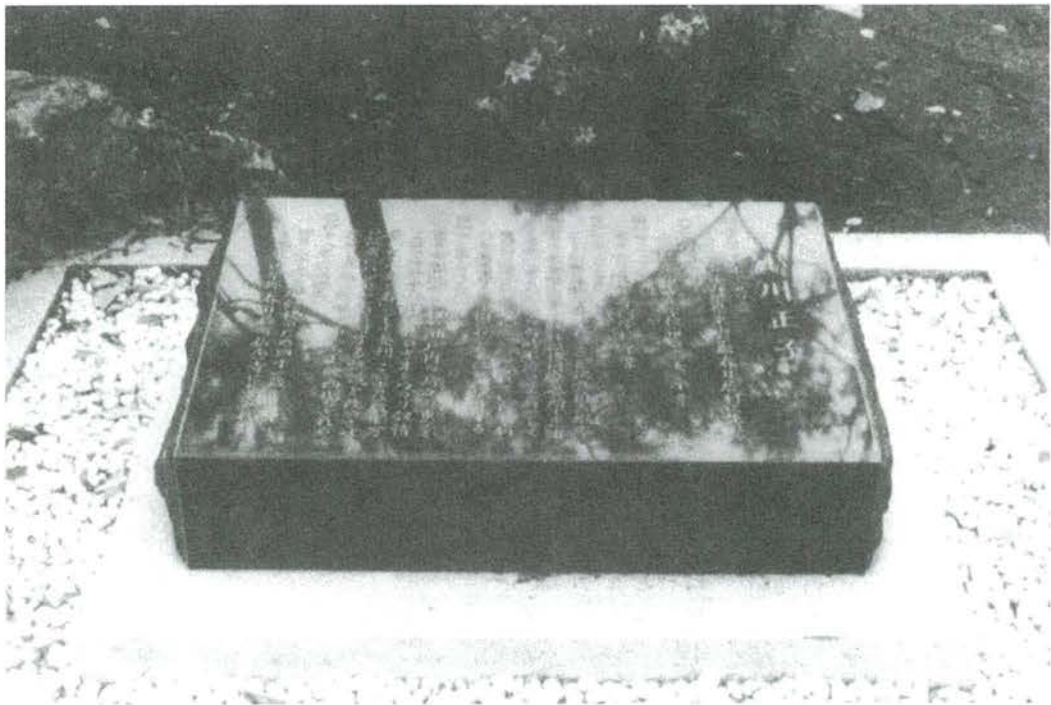
覚悟は決まっていた。家族の猛反対を押し切ったのだ。

ひとり長島へ渡る。瀬戸内の青い海原を、じつと見すえる。母をはじめ家族のことが、しきりに眼前に浮かんで消えた。

愛生園の医官は、満員だった。しかし、患者は定員を超えていた。人手が不足して困っているときとて、すぐに医局員として迎え入れられた。こうして、正子の願いはようやくかなえられたのであった。

正子が勤め始めて三年目、患者収容と家族の診断のため、土佐の山村巡りに乗り出すことになった。啓蒙けいもうのための映画やパンフレットをリュックに詰め、看護婦長、書記と同行。船、汽車そしてバスを乗り継ぐ。時には、長い道のりを徒歩で行ったときもあった。

*不退転：かたく決意して、心を変えないこと。



小川女史記念碑（県立甲府西高等学校中庭に建つ）

当時、一般には、ハンセン病は遺伝だと信じられていた。家族の中に患者が出れば、その患者はこっそりと旅に出るとか、家の中に隔離されるとかして生活をしてきたのだ。伝染病であることが知れ渡っていなかった。それで、患者は一般の人に混じって生活していた。

その日正子は、県立安芸高等女学校で講演をした。緊張して、初めての演壇に立ったのである。

「土佐の人々は巡礼者をよくいたわります。しかし、巡礼者の中には、ハンセン病患者もおります。それは、恐るべき伝染病です。野放しにしておく無知と因習は恐れなければなりません。隔離し、治療さえすれば必ず治るのです。

この日本から、ハンセン病を駆逐しようではありませんか。」
正子は、涙ながらに訴えたのだった。

夫と妻が親とその子が生き別る悲しき病世に無からしめ

トラックのふちにつかまりすすり上げすすり上げ泣く四十の男

思へ人離れ小島の山蔭に癩女がひとりする雛祭りを

正子が詠んだ悲痛きわまりないこれらの歌は、巡回の折に生まれた。そして「小島の春」に残されている。この書は、彼女の救癩の記録である。

愛生園での診療、患者収容のための巡回等、激務による過労のため、ついに胸を患い、二年間を愛生園で療養することになる。一九四二年（昭和一七年）四十一歳の若さで生涯を閉じた。

（正子の郷里春日居町（笛吹市）では、福祉の先駆者としての彼女の功績を賛え、名誉町民として推挙した。また、町の郷土館には、小川正子展示室があり、女子の遺徳をしのぶことができる。彼女は今、郷里春日居町の仏念寺に眠る。

*「小島の春」：小川正子著、一九三八年（昭和一三年）長崎書店出版。正子の「愛生園」での活動状況をつぶさにつづった手記である。

二人の力

——イチノセグワの発見と普及——

*あしがわ
芦川に続く傾斜地一面、見渡す限りの桑畑^{くわばたけ}。若葉の萌えたつ五月といつても、この、桑畑の明るい緑は、きくのととつて、ひとしお感慨深く、思い出深いながめであった。

夫、益吉^{ますきち}と結婚したのは、きくのが十五歳九か月のときであった。それから三十八年間。夫は、大正十年五月に亡くなり、ちょうど今日のように、桑の緑がつややかに光る畑中の道を送られて、葬^{ほうむ}られたのだった。一瀬益吉^{いちのせ}、行年五十七歳。妻きくの五十三歳のときのことであった。

葬列は、益吉の八人の子どもを囲むようにして、家族、親戚^{しんせき}の者が先に進んだ。会葬者が多く、葬列の先頭は、すでに菩提寺^{ぼだいじ}の市瀬山光勝寺^{いちのせざんこうしょうじ}の山門に入っているというのに、後尾は、まだ、緑の桑畑の中を、黒いひもになって、長く続いていた。

葬列の通つて行く道の両側は、見渡す限りイチノセグワの桑畑だった。そして、会葬者の多くが、一瀬益吉と、妻きくのもよつて、かつて発見され、世に広められたイチノセグワの栽培によって恩恵を受けた、養蚕関係の人たちだった。群馬、埼玉、長野といった、県外からの会葬者も多かった。

夫を送つてから、三十年近い年月が過ぎ去ろうとしていた。縁側の座布団^{ざぶとん}の上に小さく座るきくの髪は白く薄くなり、五月の風がやさしくなでた。

この二株の桑の葉のできは、どうも他の桑とは違う。きくのは、手につみ取つた二枚の葉を、別の桑の木のところへ持つて行き、さつきからしきりに比べていた。長野の上田から取り寄せて、家の前の畑二十二アールに植えた桑の

*芦

川…御坂山地の中を、旧芦川村、旧上九一色村、旧三珠町、旧市川大門町と流れ下り、やがて富士川に合流する川。

*イチノセグワ…発見者の姓がつけられた、桑の一品種。最優良品種で、現在では、全国各地で栽培されている。

苗木千本も、三年たった今では、それぞれ立派に成育していた。その中の二株が、どうも他の桑と、枝の張りも、葉の茂り方も違うことに、きくのは気づいていた。

きくのが野ら＊に出ると、十二歳になる長男ちようなんの長雄ながおも、一緒に出て手伝うことが多かった。

「長雄、お父さんに、この二枚の葉っぱを見てもらっておいで。お父さんが、いつも言っていた、新しい品種の桑かも知れないから。」

長雄に連れられて畑に下りて来た益吉は、役場から帰って来たばかりで、まだ洋服のままの姿だった。

「お母さん、どうも見かけない葉だね。こんな桑がうちの畑にあったのかね。どれ、どこに。」

「前から気になってはいたんですけど。葉が茂るにつれて、こことあそここの二株が、しだいにこんもりしてくるんで、もしかしたら、お父さんがいつも言っていた、たくさんある中の変わりだねで、新しい品種かも知れないと、しばらく見ていたんですよ。ね。これとあれ、他と違う茂り方でしょう……。」

この畑に植えた千本の桑は、ネズミガエシと呼ぶ品種だった。しかし、この二株は、木はだの色といい、葉の形、色つやをいい、それ以上に、一枝についている葉の数が、まわりの桑とは全く違っていた。ていねいに、時間をかけて、まわりの桑と見比べていた益吉は、やにわに妻の手を取ると、力をこめて握り、上下に振り、左右に振り、顔を見つめながら言った。

「お母さん、これはたいした見つけものかも知れないぞ。葉の色も、形も、厚さも、枝へのつき方も違う。一本の枝についている葉の数が断然多い。お母さん、これはでかしたな。」

何事かと、あつけにとられて見ている子ども前で、益吉は、妻を抱きかかえんばかりにした。

「あした、さっそく、甲府の蚕業試験場＊へ持って行って見てもらって来よう。役場は休みだ。お母さんも一緒に行こうな。」

＊野 ちよ田や畑。そこでの耕作の仕事。

＊養蚕試験場…県庁の組織の中にある役所の一つで、養蚕に関する仕事を専門に行うところ。



*^よ養蚕農家は、この桑を栽培することによって、春から秋までの間に、
然、農家の収入も増えることになったのだった。

何回も蚕をかうことが可能になったので、当

こうして、「イチノセグワ」は、一瀬益吉、
きくの夫妻によって発見されたのだった。
甲府の蚕業試験場から技官がすぐ来て、た
んねんに調べた。そのうえで、この二株のま
わりの桑を抜き取り、「代田苗」という、枝
を土にうめて根を出させるという増やし方
で、次々にこの桑を取り木にして増やして
いったのだった。

全国の蚕業試験場で取り組んでいる桑の品
種改良によって作り出された新しい桑は、試
作品では、約一千種類にも及んでいた。しか
し、それらの中でも、「イチノセグワ」と名
づけられた、一瀬益吉、きくの夫妻によって
発見された桑は、収量、葉質、収穫期の長さ、
まゆをつくり終わるまでに必要とする葉の使
用量の少なさ等において、断然すぐれていた
のだった。

*技 官…専門的な技能をもって勤めている公務員。
*取り木…幹についたままの枝をまげて土にうめ、根をはやさせて新しい木をつくる仕方。
*養蚕農家…かいこを飼って、まゆをとることを仕事としている農家。

益吉が村長であったこともあり、さまざま人が尋ねて来た。なかには山師やましのような人も来たりした。

「だんなさん。イチノセグワの権利を登録したらどうです。特許料というお金が、寝ていても入って来ますよ。ただで作らせるてはないでしょう。手続きは私にまかせてください。」

悪いことをしようというのではない、当然の権利なのだ、という言葉には、益吉の心も動かないことはなかった。おまけに、製糸工場の経営というもくろみももっていたので、大分心が動いたのだった。入って来る見込みの特許料を試算して示されたりすると、余計に心が動いた。ただ、そう話す男の声が、だんだん小声になっていくのと、何と言っても、笑っている表情の中にはめ込まれた二つの目の輝きが、鋭さを増していくのが、益吉にはいやに感じられ、思わず居ずまいを正したのだった。

益吉は、どんなことでもきくのに相談してきた。きくのも、夫に胸の内をつつみかくさず話し、相談しないことはなかった。そのようにして、二人は信頼し合い、尊敬し合い、互いを尊重し合ってきた。

この特許の話も、きくのは、夫から相談された時、だまって、静かにうなずきながら聞いていた。益吉は、白い柔にやう和なきくのの顔に向き合っていると、何か、観音様かんのんさまに見つめられているような気持ちにふつとなり、思わず言ったのだった。

「畑から、二人で見つけた宝物だ。この宝物を、お百姓に、ただで分けてやるというのは、今の自分の気持ちとして
は……。」

その時、きくのの目は消え入るように細く、うなずく表情は、かすみのようにやわらかく益吉には感じられ、その後、言葉にはならなかった。

きくのの目は、五月の桑の緑の上に泳ぎ、五月の桑畑の緑の上を渡ってくる風は、きくのを、夫とのやさしかった日々への追憶にいざなった。

*山師……ここではさぎ師、人をだます人。

今年も桜の花の季節になった。

はるゑは、散りかかる花びらに、そつと手を差し出しながら、童謡を口ずさむ。

甲州の鎌倉とも呼ばれる塩山市（甲州市）、その中に歴史の重みを感じさせて建つ向嶽寺。その境内に、花かげの碑がある。平成三年四月、花かげの切手が、ふるさと切手として発売された。

この詩のモデルは、鶴田はるゑさんである。大正十四年四月、千野々宮（山梨市牧丘町）から大藤（甲州市）に嫁いできた。

このころは現在のように自動車ではなく、人力車での嫁入りであった。生家から直接嫁ぎ先の家に行き、その家で夕方から夜にかけて、ご祝言をするのである。もちろん新婚旅行などではなく、生家にあいさつを終えた次の日から、畑仕事に出るのが普通であった。現在は、果樹地帯となっているが、当時は、桑や、こんにゃくの畑が広がり、その中に桜の樹に囲まれて向嶽寺は建っていた。

はるゑには、兄、朝雄と、弟、主計の兄弟があった。家は、手伝いの者を何人もおく、古くからの農家であった。養蚕を主としていたが、こんにゃくの畑もあった。三人は、とても仲が良く、歳の近い、はるゑと主計は特に気が合った。学校への行き帰りも、遊びも、宿題もいっしょにした。主計は、勉強が好きで、暗くなっても、本の読める明るい所を見つけては、座りこんでいた。桑の葉を運びながら、ふところから小さい本がころがり出し、大目玉をもらつたこともあった。ドキドキしながら屋根にも登った。蚕を飼っている上二階（わにけえ）からの美しい眺めも良かったが、屋根の上から見る富士山は、また格別であった。家の近くにある西の山の桑の実で口の中を紫色に染め、また秋には柿の実を食べながら、はるゑはいつも主計のそばにいて、彼の話の聞き役であった。

*上二階（わにけえ）…屋根と二階の間につくられた、天井のひくい部屋、蚕を飼うために、山梨県国中地方の農家にはよく見られる部屋。

たまに二人は、塩山に行くことがあった。今なら車で十五分ぐらいのところを、ゆっくり歩いて行くのである。石や道標を調べたり、風景を楽しんだり、すれちがう人の様子や、目につくもの、気がつくものを、メモして行ったりした。これは、子どもにとっては、かなりの冒険であった。家を出て、車屋の角を東に行き、中牧神社を右に折れ、畑の坂道を下り窪平に出る。笛吹川を渡ってすぐ放光寺になる。恵林寺を過ぎ、向嶽寺に着くころには、いささか疲れてくる。一番の楽しみにしている塩の山からの汽車の眺めを思って、足を速めた。勝沼から大きく曲がり、コトコトと、音を立てて近づいてくる汽車、東京の匂いを運んでくる汽車を遠くから見ただけで、二人は満足していた。薄暗くなった道をもどり、父母や、兄に、今日一日の冒険を、事細かに話して聞かせた。家の人は二人の話をよく聞いてくれた。

やがて主計は、南都留郡小立小学校の訓導として教育にたずさわることになった。教師としての毎日も充実したものであったが、幼い頃からの、本好きで知識欲があり、勉強好きは、しだいに文学への強いあこがれとなっていた。向学心に燃える主計は、大正十二年、東洋大学国文科に入学し、一人東京で、文学を志していく。

大正十四年、四月十日、桜の花が匂うように咲く日、はるゑは嫁入りの日を迎えた。

朝からあわただしく動きまわる家人の中に、主計の姿が見えない。東京からもどると、いつも自分のそばにいる弟がこの日はいっこうに見あたらない。

（何があったのだろうか。話がしたい、顔が見たい。私は明日からもうこの家の者ではなくなってしまう。今のうちに何か言っておかなくては、主計の話も聞いてあげたい……。）

見つけようとしても、なかなか見つからない。どうしたのだろうか。いよいよ出発しようとする時、はるゑは、納戸の物陰にたたずんでいる主計を見つけた。声を掛けようとするのだが、声が出ない。主計の肩が、細かく震えている。

*車屋：水車小屋のこと。

*訓導：子どもを教える小学校教育の昔の職名。

*納戸：ふだんは使わない衣類や道具などをしまっておくためのへや。

婚礼のためにはずされた襖かすまにもたれて泣いているのだ。

(一緒につれていきたい。)

姉の美しい晴れ姿を見ることより、見送る辛つらさに耐えている弟を見て、はるゑは心の底から思った。迎えを知らせる声がして、花嫁は体の向きを変えた。

(主計さん、がんばってね。いい詩をいっぱいつくってね。)

そんな思いを乗せて人力車は門を出て行った。胸が苦しく、身を切るような思いであった。この道は、いつもの道、窪平から恵林寺へ、そして向嶽寺へ……。数々の思い出があふれ出し、はるゑの目から涙がこぼれた。そんな二人の思いの上に、道端の桜の花びらが、ハラハラと散りかかってきた。

この美しい思い出と、光景は、二人にとって生涯忘れることのできないものとなった。

東京にもどった主計は、七年後、あの日の思い出を花かげの詩として発表した。この詩は、多くの人に歌われ、主計の名は、日本中に知れ渡っていった。数多くの童謡を作り、ふる里の学校の校歌をつくり、主計は、さまざま文化活動を行っていった。終生、故郷を愛し、友を大切にし、何度も山梨を訪れている。幼いころ遊んだ、山や川、友達や家族は、いつも彼の詩の源であった。

昭和五十六年十月十七日、主計は七十五歳の生涯を閉じた。

桜の花の頃になると、はるゑは花かげの詩を口ずさむ。

そして、あの日の花嫁にもどるのである。

情熱の人

— 近藤喜則 (きそく) —

山梨の南端に位置する南部は、富士川べりの兩岸を山々でふさがれた山村であったが、江戸時代より富士川舟運の中継地・宿場として行き交う旅人たちによつてにぎわいを見せる地でもあった。

里はまだ夜深し富士の朝日影

江戸末期の伊豆葎山代官、江川太郎左衛門の残したこの句は、喜則の心に深く印象づけられ、強い感銘と使命感を与えた。喜則の家は、代々名主であり、二十歳

になると父の代理として郡全体の納税や戸籍、土木などにかかわる立場になっており、その立場でこの地方を見ると、江戸末期の激動する世の動きが伝わってこず、村人たちは日々の生活に工夫や疑問も持たずに時が流れているように思われてならなかった。かたくなで世の中の動きにうとい民衆を教え導き、彼らの目を開いてやるためには、この地に文化を広めることが最も大切であることを強く感じていた。

明治二年、ある日の夜ふけ、一人の若者が人

*江川太郎左衛門：江戸後期、江戸幕府の海防係に任せられ、江戸で砲術学校を開く。



「蒙軒学舎ゆかりの地」碑

目をしのぶように訪ねてきた。

「甲府もすでに薩長の手にあり、私も各地で戦いましたが世の勢いには抗しがたく、このような情けない姿になってしまいました。……ぜひ、私をお助けくださいたく先生の門を叩いた次第です。」

喜則は、目の前の破れ衣に身を包んだ豊島住作と名乗る旧幕臣の話にとまどいながら聞き入っていた。一気に話す住作を見つめながら、喜則の心の中に今までほんやりとしていた明かりが形になってくるのを感じた。

「豊島君、すでに幕府の時代ではなく、世界に目を大きく開くべき時だろう。これからは何といつても学問が大切だ。

しかし、この地方の子弟は学問をする機会に恵まれていない。幸い、君は甲府の徽典館で学問を修めているというではないか。これも何かの縁でしょう。ぜひ、君の力でこの地域の子弟を教育してくれないだろうか。」

三十七歳の喜則は、少年のころから山峡のこの地に文化を広めたいという思いが、急に現実味を帯びてきたことに心地よい興奮を覚えた。新しい政治が始まったとはいえ、急に村人の生活が変わるわけでもなく、長い封建制度のもとでしいたげられてきた貧しい人々の生活が豊かになったわけでもない。このようなことを考えていた時期に豊島住作と出会ったのであった。

さっそく妙浄寺の一室を借り受けて教室とし、「聴水堂」と名づけた。ここに学ぶ近隣の少年たちの数はまだ少なかったが、喜則は少年たちが一心に学習している様子を見るにつけ、新しい時代をになう彼らのためになさねばならない仕事、特に教育の普及・産業の育成・病院の建設・通路の整備などに思いを巡らすのであった。

明治四年五月三日、喜則は新たに買い求めた学舎で生徒を前に、

「いよいよ念願の教場を持つことができた。本日から塾の名を蒙軒学舎と改める。切磋琢磨して国家が必要とする人材になりなさい。」

*豊島住作：江戸幕府の甲府勤番の同心で、戊辰戦争では榎本武場の部下となった。後、農商務省に勤務し、重役として住友銀行の設立に大きな力となった。喜則の臨終の際には、自分の犬歯を二本抜いて喜則の胸に置き、その死をいたんだ。

*徽典館：幕府の昌平坂学問所の分校で松平定信が命名した。現在の山梨大学教育人間科学部の前庭に学問所跡の石碑がある。

と説いた。緑薫るさわやかな風の中、第二の誕生、蒙軒^{*}学舎の始まりであった。この地域の経済的な貧しさと見聞のせまさや、ただ従来の習慣に従って生きている人々の姿から、常に喜則の胸中をよぎるものは、「急激に変わりゆく国家社会に雄飛し、役立ち、必要とされる人材の育成こそ急がなくてはならない。」とする焦りにも似た確信と使命感であった。

「できうるならば、今すぐにでも優秀なる人材を世に送り出したい。しかし、知識だけでは何にもならない。それを応用できる広い視野と行動力が必要であろう。そのためには、心を育てねば何の意味もない。」

豊島や、後、教授となる二人の息子に熱っぽく語るのであった。そのため、蒙軒学舎の理想を知識中心におちいることのないように、人間教育に力をそそぎ、学費のかからない教育、教育の自由、機会均等をうたい、勉学に励んだのち、それぞれ自己のめざす道に向け、自らの進路を切り開いていく力をつけさせることを目的としたのである。

学舎に学ぶ生徒は十二歳以上で、修業年限は四年間であった。普段の授業は上級生が下級生を指導する形をとったが、二年生になると頼ることは許されず、自力で解決するというのが大原則であった。月ごとに試験があり、英学、数学、漢学の時間が多く、一週二十〜三十三時間で年間二百四十日勉強した。また、週五日制をとり、土曜日には演説会、討論会、レクレーションなども行われ先進的であった。

ある日、喜則のもとに数人の生徒が真剣な面持ちでやってきた。

「先生、洋楽を学んでいますと、必ず、キリスト教にぶつかります。私たちは、ぜひ外国人から直接キリスト教の話やヨーロッパ文明の話を聞きたいのです。私たちの願いをどうか実現させて下さい。お願いします。」
生徒たちの願いに喜則は、胸に熱いものが込み上げ目頭が熱くなってしまった。

（自分が期待しているように、この子たちは成長している。この切なる期待や希望に応えなければ……。）
「よし、諸君の願いをかなえるべく努力しよう。」

*蒙軒学舎の出身者：岡田良平（文部大臣・貴族院議員）、北村透谷（文学者）、一木喜徳郎（宮内大臣・貴族院議員）、笠井信一（北海道長官・静岡県知事）、井口省吾（陸軍大将）、尾島真治（神学者・牧師）

喜則は、さまざまな人に外国人教師の紹介を依頼した結果、外国人宣教師が南部に来ることになった。

明治十年七月のある日の夕刻、カナダ人C・B・イビー博士一行が村人の好奇と驚きのなか、駕籠をつらねて南部の近藤家に到着した。その翌日から講義は始まり、

「世界中にはたくさんさんの国々があり、多くの民族がいます。これからは世界中の人々と交わり、お互いの文化を理解しあうことが大切です。」

という教えのもとに生徒ばかりでなく、近隣の村々を積極的に講演して歩いた。このことは、山梨における本格的な英語教育の草分けとなり、また、キリスト教伝道のきっかけとなった。

明治二十一年、この年の長男路太郎、二男麟次郎の相次ぐ病死。蒙軒学舎の教授、そして、最愛の理解者であり、支えであった息子を失ったことは、喜則にとってあまりに切なく手足をもがれる思いであった。そのような思いで秋色に染まる山々のふところをゆったりと流れる富士川のほとりにたたずんでいると、少年のころの長崎、江戸、伊豆葎山での見聞の日々、初代県議会議長としての日々、義立南部病院の設立、三極栽培の普及活動、県内外への講演などに思いを巡らしはじめた。

（思えば、五十七年間、時代というものに押されながら走りつづけてきたような気がする。……蒙軒学舎も新しい学校制度によってその使命も終わった。しかし、徒勞ではなかったはずだ。すでに自分の理想が新しい時代の中で芽吹いているのではないか。）

*C・B・イビー：一八四五年カナダ生まれ。三十一歳のとき、妻子と共に来日し、一八七七年南部で伝道活動をする。翌年、甲府において伝道活動をし、甲府教会を設立する。

*義立南部病院：喜則が中心となり村民の出資で明治八年に設立。後、公立睦合病院となり喜則の甥である近藤寛治が院長となる。

*三 極：枝が三本ずつに分かれる落葉低木。樹皮の繊維は紙の原料となる。

ワインにかけた二人

「フランスへ行ってぶどう酒醸造を学んで来てくれないか。」

明治十年、突然の話に高野正誠たかのまささだと土屋助次郎つちやすけじろう（後の名前を竜憲たつりという）は驚いていた。当時、正誠は二十五歳。若かったが、すでに父にかわって戸主であり、その年の五月七日の山梨県初の県会議員に選出されているほどの人物であった。土屋助次郎、十九歳。父の勝右衛門しょううゑもんは八月に設立されたぶどう酒醸造会社の一人であった。二人ともぶどう酒醸造の会社がつくられることは知ってはいたが、自分たちがフランス留学に選出されようとは思ってもみないことであった。

二人はじつと考え込んだ。フランスという国はいったいどんな国なのだろうか。フランス語がまったくわからない自分たちが行ってぶどう酒醸造の技術を一年で学んで帰って来られるだろうか。二人の心は大きな不安でいっぱいだった。

このぶどう酒醸造会社の設立には実に多くの人たちが出資していた。近在の村だけでなく、山梨県内の有力な豪商、豪農の人たちが株主となっていた。その出資金の四分の一近くに当たるお金が二人のフランス留学の費用としてあてられることになっていた。多くの人のこの事業に寄せる期待が感じられ、不安はますます大きくなるばかりであった。

出発の準備もあわただしく、高野正誠と土屋助次郎はその年の十月十日、横浜港を出港した。この時にフランスへ二人を連れていってくれたのは、当時の駐仏大使であった前田正名まえだせいめいという人であった。二人のフランス滞在中たいざい、良き相談相手になってくれた人だった。

四十五日間の長い船旅の末、二人は十一月二十四日にフランスのマルセイユに到着した。そこからパリに行き、

*前田正名：当時の官僚で外務省、内務省に勤務。明治十一年にパリで開かれる万国博覧会の事務官長として渡仏しようとしていた。

そこで一か月間フランス語を学んだ。フランス語を学ぶために二人がもっていったのは東京で買った木版の和仏辞典だけであった。そして、年の暮れも迫った十二月二十七日、パリから東南百五十キロメートルのところにあるトロワ市の農園で、二人の研修が始まった。

二人が抱いていた不安どおり、フランス語はほとんどわからなかった。しかし、二人は農園で働く技師や雇い人とともに働き、ぶどうの木の栽培方法や接木の技術を学んだ。

やがて、実習が始まって五か月が過ぎようとしていた。日本を出発する前に会社と約束した一年の期限が迫ってきていた。二人はしだいにあせりの気持ちをもつようになっていた。

「一年では短すぎる。私たちはかんじんのぶどう酒醸造の実際をまだ見ていない。」

「一年間でぶどう酒醸造の研修をしてこいというこの計画そのものに無理がありますよ。だって、私たちが帰らなくてはならない十月から今年のおぶどう酒醸造が始まるらしいですよ。」

いつもはお互いにぐちをこぼすことはなかったが、つい口にてでしまった。フランス語もまだよくわからなかった。農園の人たちがいっしょうけんめい教えてくれていることがわからない、こちらが聞きたいと思ってもうまく伝わらない、まったく私たちが豚のこどものようなものだ。そうやって二人はためいきをついた。

フランスへ来てからこれまでお互いに必死になってぶどう栽培の技術を学んできたが、このままでは中途半端な研修になってしまいそうで、二人にとって重苦しい日が何日か続いた。

正誠はぶどう酒醸造会社を設立した多くの人々の顔を、出発の日見送ってくれた村の人々の顔を、そしてその向こうに広がるなつかしい村の風景を思い出していた。それから、ただ広い海だけで他には何も見えない船の上で、ああ、もう引き返せないのだ、なんとかこのことをやりきるしかないのだ、と思った自分を思い出していた。

助次郎もまた遠くをみつめるように、じっと考え込んでいたが、やがて正誠の方へ顔を向けた。

「正誠さん、どうでしょうか。このまま帰国することはできないと思えますが……。」

「そうですね。このままでは私たちがここへ何をしに来たのかわからなくなってしまいますね。約束の一年という期限が守れなくても、とにかくぶどう酒醸造を見ていくために、なんとか留学の期限をあと少し延ばしてもらえないか、考えてもらいましょう。」

二人は、フランスへ来た時、連れてきてくれた前田正名に相談した。この人が会社との間に入って話をしてくれたおかげであと半年間の留学延長が認められた。ただし、あと半年間の留学の費用は二人が帰国してから会社に支払うというきびしい内容のものであった。

秋、ぶどうの収穫と醸造の研究が心おきなく続けられることになって、二人はいきいきと実習に取り組んだ。ぶどうの取り入れから醸造の過程をくいいるようにして見て、できるだけ細かく記録した。

帰国後、二人はさっそくぶどう酒醸造に取りかかった。日本で初めてのワインが作られるのである。この時に醸造されたワインが今も残っている。

その後、二人はそれぞれ醸造場の建設、醸造用のぶどうの栽培、醸造の研究に何年も取り組みまなければならなかった。フランスへ行ってぶどう酒醸造を見てきたとはいえ、まだ、醸造の基礎において研究不足であった。また、当時の日本ではぶどう酒が医薬用として利用されていただけで、現代のようにワインが一般では飲まれていなかった。そのため、販売市場を開拓していくことも必要だった。課題は多かったが、多くの人たちとともに二人はそれぞれの方法でぶどう酒醸造とその普及に取り組み続けた。

甲州市勝沼町のぶどうの丘センターに登るとそこから一面のぶどう畑が見える。ぶどう棚の葉が風にそよいでさらさらとゆれる様子は、まるで大海原のさざ波のように見える。そして、ここ甲州市勝沼町は今では日本でも有数のワインの産地となっている。

百二十年も前にここからフランスへと渡っていった高野正誠や土屋竜憲に、今ここから見える景色はどんなふうに映るだろうか。



当時の勝沼の醸造場の様子（ぶどうの搬入風景）

平和と友情の鐘

「目で見て、肌はだで感じて、五感をしっかり使って学んできてください。」

成田空港での団長先生の言葉だ。ぼくは、初めてのアメリカ訪問に胸を躍おどらせていた。

多くの住んでいる町では、アメリカ中西部にあるアイオワ州の州都と姉妹都市締結ていけつをしていて、一年おきにアイオワ州と山梨県を相互そうごに訪問することになっている。今年はアイオワ州に訪問する年で、ぼくは訪問団の一員となった。もちろん不安がなかったわけではない。語学力にも自信がないぼくが、短期間のホームステイとはいえ、家族と離れ習慣の違う国で生活できるか心配だった。しかし、参加しようと思ったのは、以前に参加した先ばいから楽しかったという話を聞いていたからだ。

アメリカでは、見るもの全てに感動した。特に地平線まで広がるとうもろこし畑には圧倒あつとろされ、改めてアメリカという国の大きさを実感した。そして、そこに住む人々の心の大きさも感じた。何に対しても welcome (ウェルカム・『ようこそ』の意味) の姿勢で、いつも「ありがとう。」の言葉を忘れない。バスを待っている間や、見学をしている間にも気軽に話しかけてくれる人がいて、心の温かさを感じた。ぼくが日本の山梨県から来たことを知ると、

「あの緑がきれいな所ね。」

と言ってくれる人もいた。中には、実際に山梨県を訪問したことがある人もいた。その誰だれもが、

「山梨はとてもいい所だった。また訪れたい。」

と話してくれた。山梨の素晴らしさを知ると同時に、ふるさとを誇ほこりに思うことができ、住み慣れた山梨を離れて初

めて気付くことがたくさんあった。

ホームステイ先にはグレイという同じ年の男の子がいて、ぼくたちは好きなゲームや本についてよく話をした。グレイは日本文化に興味があり、片言の日本語と英語で何とか話すことができた。数日後、お別れの日、グレイはぼくに一冊の本をプレゼントしてくれた。それは『海に向こうの特別な友達〜アイオワと山梨の物語〜』という本で、両県のつながりについて日本語と英語で書かれているようだったが、読むこともなくスーツケースのおくにしまい込んだ。そして、感謝の言葉も十分に言えないまま、ぼくはアイオワの地を後にした。

帰国後、ぼくは学校でアイオワ州訪問の報告をすることになった。写真を見せながら、現地の人々や中学校の様子を得意げに説明していたのだが、

「姉妹都市交流って言うけど、なぜ姉妹都市になったんだ。」

という友達の質問に言葉がつまり、きちんと説明することができなかった。放課後、ぼくはその質問の答えを探すために、図書室へ行った。すると、次のような物語があったことが分かった。

一九五九年、伊勢湾台風は西日本から東日本にかけて甚大な被害をもたらした。山梨県も大きな被害を受けた。第二次世界大戦後、アメリカ軍兵士として日本に駐在していたことのあるリチャード・トーマス氏は、山梨の人を助けてあげたいという強い思いで、アイオワ州の人々に何かできることがないだろうかと呼びかけた。特に畜産業界の被害が大きいという話を聞いたアイオワの人々は、自分たちの持っている



サイクリングを楽しむ アイオワ州民

ものの中で、山梨の人々は何を必要としているのか考えた。

「そうだ、アイオワの豚を贈ろう。」

ある青年が提案した。アイオワ州はトウモロコシや大豆の栽培と同様に豚の飼育が盛んな町でもある。

「畜産業の被害が大きいというから、きつと喜んでくれるだろう。」

と、みんなが賛成した。トーマス氏の呼びかけに賛同した人々が、アイオワ州のあちらこちらから三十五匹の豚を寄付し、山梨へ贈ることとなった。また、豚が山梨に慣れるまで同じえさを食べられるようにと、千五百トンものアメリカ産のトウモロコシも一緒に贈ることとなった。海外への豚の輸送方法が課題となったが、トーマス氏の働きかけにより、米軍の飛行機を使い輸送することとなった。豚は特別製の木箱に入れられ、途中いくつかの島を経由したり、豚が熱で死んでしまわないように水浴びをさせたりしながら、大切にあつかわれた。日本に着くと、まず横浜で検疫

を受け、その二週間後、ついに三十五匹の豚が山梨に到着した。遠い国からの贈り物に、甲府駅で待っていた人々は喜びにわいた。

翌年には当時の山梨県知事がアイオワ州を訪問し、日米間で初めて姉妹都市締結がされた。その翌年には感謝の印として、山梨から『平和と友情の鐘』がアイオワ州に贈られた。

一九九三年にアイオワ州の人々が^{だいこうずい}大洪水の被害にあつた際には、今度は山梨の人々がアイオワ州を助けようと見舞金を贈った。災害時に贈られた豚をきっかけに始まった両県の産業・文化・人々の交流は、半世紀経った今もなお続いている。



1959年の台風被害の際にアイオワ州から送られた種豚

出発前から「訪問団の一人として自覚をもとう。」と何度も言われたが、その言葉の意味が初めてわかったような

気がした。気軽な気持ちで訪問団に参加した自分が、何だかとてもはずかしくなった。

その夜、今日の出来事を父に話すと、

「今年は姉妹都市締結五十周年記念事業があり、山梨県知事がアイオワ州を訪問して、五十年前の支援に対するお礼を伝えたそうだ。五十年前に贈った『平和と友情の鐘』が老朽化したので、現地の人たちがお金を集めて修復してくれ、その再奉納式にも出席し、鐘を鳴らしたそうなんだ。そして、今後も良好な友好関係が続くようにと調印してきたそうだよ。」

と教えてくれた。父の話聞き、スーツケースにしまい込んだまま、まだ一度も読んでいなかったグレイがくれた本のことを思いだし、読み始めると最後の部分に、次のように書かれていた。

『恐ろしい台風から長い時がたった今、アイオワと山梨のきずなは、絹でできたリボンにたとえることができます。絹の糸の一本一本は、細くて弱くて、指でも簡単に切れてしまえるぐらいのものです。それが何本も集まり、重なり合ったとき、強くて美しいリボンになります。一九五九年、一本の絹の糸が、二つの土地を結びつけました。それは、一人の男の人の思いやりでした。今日、様々な美しい友情で織り上げられたリボンが、山梨とアイオワを、強く結びつけています。かつては、戦争で戦ったことのある人々の手から、その子ども、孫、ひ孫たちへと受け継がれながら・・・』

なぜこの本をほくにプレゼントしてくれたのが、今さらながら分かった気がした。その夜、ほくは海の向こうの特別な友達にメールを送った。



修復された 平和と友情の鐘

美しいふるまい

「明日のあいさつ運動は、このクラスの当番です。生活委員会の人は、忘れないようにお願いします。」
生活委員会では、毎週木曜日の朝、当番を決めて校門の所であいさつ運動を行っている。朝起きるのが苦手なぼくは、これがあるから生活委員にだけはなりたくなかったのだが、じゃんけんで負けて仕方なく委員になったのだ。

「あつ、そうだった。いつもより三十分も早く来なくっちゃ。面倒くさいなあ。」

ぼくが思わずつぶやくと、同じ生活委員の明日香^{あすか}さんや美由紀^{みゆき}さんにも聞こえたようで、

「いつも登校時刻ぎりぎりだもんね。明日は遅れないで来てよ。」
と言われてしまった。

次の日、やはりぼくは寝ぼろをしてしまい、あいさつ運動の開始時刻には間に合わなかった。少し遅れて、気まずい思いをしながら、学校に到着した。遅刻したことを謝りながら、他の生活委員と同様にあいさつ運動を始めた。登校してくる人に声をかけると、あいさつ運動をしているこちらが驚くような大きな声であいさつをする友達や、あいさつをしても、ちょっと頭を下げるだけで、何も言わない人がいることに気付いた。そんなときには、
「せっかく早く来てあいさつをしているのに、あいさつをしないで



通り過ぎるなんて。」

と、なんだか頭にくるような気がした。

そんなことを思いながらあいさつ運動を続けていると、校長先生も校門の少し離れたところであいさつをされていることに気付いた。校長先生は、あいさつ運動がない日にも、校門の付近でほくたちをむかえてくださる。あまり話したこともないのに、ほくの名前を呼びながらあいさつをされたときには、少しおどろいたことを覚えている。

校長先生の様子を見ると、生徒だけではなく、学校の前を通る人みんなにあいさつをされていることが分かった。

「おはようございます。今日はいい天気ですね。温かくなってきましたね。」

「おはようございます。いつてらっしゃい。」

保育園に向かう親子には、腰をかがめて、園児の目の高さに合わせて笑顔であいさつをされていた。ほくは、校長先生は、地域の人全員と知り合いのようだと感じる一方で、学校に直接関係のない人にまであいさつをしていることや、毎朝、ほくたちを迎えてくれることが不思議に思えた。

その日の午後、職場体験学習を来週にひかえ、礼ぎについて学ぶ授業が行われた。笑顔のさわやかな女性の講師の先生が、ほくたち全員を見たあと、丁寧にお辞儀をして授業が始まった。その様子に、会場の雰囲気も引きしまった感じがした。

「今日は、礼ぎについてお話をさせていただきましたが、礼ぎという言葉にみなさんはどんな印象をもっていますか。」
突然の質問に、ほくたちがすぐに答えられないでいると、

「では、礼ぎと言われると、きゅうくつだなあとかめんどうくさいなあとかいう感じをもっている人は、手を挙げて

ください。」

と言われた。周りをみながら、ばらばらと手が拳がったので、ほくもそれを見て手を挙げた。

講師の先生は、茶道の世界では有名な方のように、茶道の作法を例にいろいろな話をしてくれた。明日香さんが数回体験したことがあるようで、細かい作法があったことや足がしびれてつらかったことなどを話していた。それを聞いていた周りの友達が

「そう言えば、お茶を飲む前に、茶わんをまわすんだよな。何回まわすんだっけ。」
そんなことを話し始めた。



「茶道とは、一杯の茶を通して、客人にいかにお茶を美味しくあげていただくか、ただそのことだけのために、ひたすら心をこめてお茶を点てることであると言われます。そのため、茶道には、多くの決まりごとがありますが、実は一つ一つに意味があるのですよ。例えば、お茶を出す亭主は、お客様に合わせてお茶わんを選び、お茶を点でて出します。お茶わんには絵があることが多いですが、絵はどちらに向けて出したらいでしょうか。」

「お客様の方ですよ。」

と明日香さんが答えると、

「そうですね。では、客の方は、どんなことに気をつけていただくのがいいでしょうか。」

と先生はみんなに問いかけた。だれも答えられずにいると

「絵を正面にしてお茶をすすめられ、その絵がらの上に直接口をつけたのでは、せっかくの配慮を無視したことになってしまいます。それで、直接口が当たらないように正面の絵柄をすらし、茶わんを回します。お茶をいただき終わったら、自分のために選んでくれた茶わんをもう一度拝見し、亭主の心を受け止めようとすれば自然に茶わんを自分の正面に戻すでしょう。お茶わんをどのように回すかということよりも、大切なのは、お互いの心を通わせることで、それを形にするための取り決めが作法なのです。」

始めて聞く話だったが、最後のところがとても心に残った。講師の先生は学習の最後に、こんな話をされた。

「この山梨には、清和源氏の流れをくむ小笠原流礼法があります。もともとは武士の作法でしたが、時代を経て現代に受けつがれているようです。時・場所・場合に合わせてその場にふさわしい判断からなる自然なふるまいができることが、社会に生きる私たちに必要なことなのだと思います。」

ところで、今日、この会場に入ってくる時、私の前にいた生徒さんが、自分が入った後、『どうぞ。』と言って私のためにそのドアを押さえてくれました。礼ぎの根本にある大切なものをおもちの生徒さんだと感心いたしました。そのような思いを、これから大切にしたいと思っています。」

ほくは、講師の先生が入ってくる時のことを思い出し、自分のことを話されているのだと気付くと、なんだかはずかしい気持ちになった。その一方で、校長先生が毎朝ほくたちをむかえてくれることの意味が分かったような気がした。

次の木曜日、ほくは遅れずにあいさつ運動に行った。先週とは、少し違う気持ちであいさつをすることができた気がした。

その五 中学校上級学年用

貧しくとも心けだかく

今年も慈雲寺の糸桜が満開になった。

山梨県塩山市中萩原大藤にある、この寺の境内の一隅に、ひっそりと建つ一つの墓。この墓に、樋口一葉の父則義と母滝子が眠っている。この墓を遠くから見守るように、樋口なつ、のちの樋口一葉の丈高い文学碑が建っている。明治五年生まれの一葉は十七歳で父親と死別し、それから七年後の明治二十九年十一月二十三日、二十四歳という若さでこの世を去った。

「なつ、なつ、どこにいるの？」

母がなつを探している。針仕事を教えようとするのだが、なつはあまり好きではないらしい。肩が凝ってしまいうので、むしろ苦手だった。しかし、母は、生きていくために大切なことを、今のうちからひととおりしつけておかなければと考えていた。一方、父にはなつがどこにいるかおおよそ見当がついていた。なつが五歳のころから、こっそり土蔵に隠れて、かなり難しい本を読んでいたことを知っていたので、おそらく今日もまた、どこかで本など読んでいるに違いないと想像していた。父は、なつの文学好きをよく理解し、また文才のあることも見抜いていた。だから常々、できればその道に進ませてやりたいと心ひそかに思っていたのである。

ところが、なつは十一歳の春、やむをえない家庭の事情で私立青梅学校を退学する。

「なつ、聞いてもらいたい話があります。ちよつと来ておくれ。」

「……」

*文学碑…一葉女史碑のこと。高さ三メートル、幅一・五メートルの山崎石で、裏面の二百人の賛同者の名前の中に、幸田茂行（露伴）、森鷗外、与謝野晶子、田山花袋、島崎藤村ら、文化人がずらりと名を連ね、一葉文学に対する高い評価を物語っている。

「なつ、お前が青梅小学校高等科第四級を首席で卒業したことを、父さんは本当に誇らしく思っている。本当ならさらに、上級の学校へ進ませてやりたい。しかし、残念ながら今はそれをかなえてやれない。なつはもつと学問をしたかろうな。なつは本が好きだものな。わしも和歌が好きだ。……いつかきつと、お前を学問のできるところへ通わせてやるからな。しばらく辛抱しんぼうしてくれ。」

「なつ、わかってくれるね。これからは母さんを手伝って、仕立て仕事や洗い張りに精を出しておくれ。妹のくにといっしょにね。」

なつは黙ってうなずくと、そのままじつとうつぶいた。

それから三年、なつが十四歳のとき、父は約束したとおり小石川安藤坂こいしかわあんどうざかの、中島歌子の塾なかしまたこ「萩の舎はぎ」へ、なつを入塾させた。ここでなつは夢中で和歌を学んだ。また新進女流作家として活躍する田辺花圃たなべかほや伊東夏子いとうなつこらとの出会いは、なつに小説家への夢を抱かせた。

しかし、そうした勉学精進の日々も長くは続かず、父の病氣と事業の失敗とで月謝も滞り、いつしかなつは住み込みの女中のようなことを余儀よぎなくされるようになった。そして、学んでいる和歌の世界と、自らの現実の生活との間のあまりの隔たりを、しだいに意識するようになっていった。

「なつさん、お茶の用意をお願いね。」

「はい、ただいま。」

その時、客用に出された湯呑み茶わんに書かれた漢詩の一節を読む者があった。途中で終わっているその漢詩のつづきを、なつはすらすらと暗唱しおおせた。してやったりと、その顔は自信に満ちていた。

*田辺花圃：「藪の鶯やぶのうぐいす」という小説で、作家として名をあげた明治の女流文学者。一葉が作家になる決心をするのに影響を与えた人物。

萩の舎に通つて来る、高位高官の娘たちのふるまいをよそに、なつはいつも質素な身なりでひたすら勉学に励んでいた。しかし、口には出さなかつたが、和歌の世界と同様、この同世代の人たちと自分の境遇を比べてみて、その胸の内には、さまざまな思いがあつたのである。

(私は、この人たちに負けない。私は絶対に小説家として名をあげてみせる。そうだ、半井桃水先生なからいとうすいに小説の指導をお願いしよう。)

ある日のこと、萩の舎で歌会が催されることになつた。なつは、そのころ父がこっそり隠れるように質屋通いをしてゐることや、母も自分のために並々ならぬ苦勞をしていたことを知つていたので、たいていのことは我慢してきた。しかし、なつもうら若き乙女である。その夜も、母と妹は針仕事に精を出していた。なつは初めて歌会に着る着物のことを相談した。母はその手を休めて、なつの願いを何とかかなえてやりたいものだと考えていた。

なつは、筆一本、ふろしき一枚でさえ、それらがボロボロになるまで使い、古い着物を仕立直したものを大切に着ていた。十五歳のなつは、萩の舎に通う塾生たちが衣装くらべのようなことをするのが嫌でならなかつた。

「なつ、なつ。」

一枚の着物を手に、母が探している。

「ああ、なつ、ここへ来てごらん。この着物をなつに着てもらいたいと思つてね。」

「えっ、母さん、これは母さんの大切な……。」

「いいんだよ。ちよつと古いけど、昔父さんが買つてくれた反物を思い出して、夜なべをして仕立てたんだよ。さあ、袖そでを通してごらん。間に合つてよかつた。きつと似合うよ。」

*半井桃水：朝日新聞の小説記者で、一葉に小説の手ほどきをした。

あれから一週間、なつはもう着物のことはあきらめていた。明日は歌会の日。母が一針一針心をこめて縫いあげてくれた着物に袖を通すと、胸に熱いものがこみあげてきた。歌会に出席する者が皆、それぞれに着物を新調して着飾って、くることがなつにはわかっていた。

「ねえ、ご覧になって。なつさんの着物、ずいぶん古めかしいこと……。」

何と言われようと、なつの心は動じなかった。それどころか、他の誰だれよりも心の中に誇らしいものを感じていた。

それから数年して、なつは萩の舎を退いた。いよいよ窮乏きゅうぼうする家を、なつがたて直さなければならなかった。小説を書く夢もあきらめ、生きるために、食べるために、小さい商いを始めた。駄菓子や荒物*を売る店を開いたのだ。

こうした生活のなかで、人の世の裏表をいやというほど見せつけられ、あさましい人間の姿もまざまざと見ることとなった。こうした心の内の思いをすべて吐き出すかのように「たけくらべ」「にぎりえ」などの作品を次々と書き綴ったのである。

今年も、慈雲寺の糸桜が風にはらはらと舞い散る。その短い生涯の中で、自らを飾ることのなかった一葉の、その文学碑に、美しい淡い色の花びらが人知れず彩りいろどを添える。

*荒物…家庭用のほうき、ざるなどの雑貨類。

トンネルの向こうに

——新倉掘抜にかけた永島安竜——

「天上山の下に横穴を掘って、満ちあふれた河口湖の水を、からからに乾ききった丸尾まるびに流せば、一方は水害まぬがを免れ、広い丸尾の野っばらは田んぼや畑に生まれ変わり、米も野菜もとれるし、そうすれば新倉の衆も、木の実や草の根を食わんでも生きられる。」

と、村人を前にして、安竜は口に泡をとばし、指で絵図に穴のあくほど力を入れて話していた。

「石ノミ一つで、山のどてつ腹へ一里（約四キロメートル）もの穴を掘れるもんじゃあねえ。」

「百四十年前に、領主りようしゅの秋元但馬守あきもとたじまのかみ様が、十年以上かけてできなかった工事だ。とても無理だ。」

「運よく水が通ったって、ガシマルビ（小粒の焼石の積み重なった原っぱ）に吸い込まれて、水気みずけはちつとも残らん」
「や。」

「そんな事はねえ。土は新倉から背負子しよいこで少しづつ運べば畑になるだ。」

「むしろ、毎日の暮らしがやつとのことだ。運よく穴が開いたって、俺んとこの畑に水がくる保証はねえし、むだ働きしているひまはねえ、やりたい者だけがやればいい。」

「水呑百姓みずのみびやくしやうの分際で、金は一銭もねえよ。」

安竜は迷った。ほうっておいたら、村の人々の暮らしはいつまでたってもよくならない。そう思い直して、每晚遅くまであちこちの村を説いてまわり、断わられても、何度も何度も出かけていった。

「又次郎どん、名主のあんたが先頭に立ち、どうか私とともに、一肌脱いでくれんか。」

*丸尾：噴火で熔岩が流れ出し、やがて冷えて固まった原っぱのこと。

「むちやを言うない。そんな夢みてえな計画、絶対にできるわけがねえ。」

そのころ、国内で一番長いといわれる掘抜工事を、村人だけで取り組むことは、だれが考えても無理だと思われた。又次郎は、「できぬ、ぞんぜぬ」と断わり続けていたが、新倉村（富士吉田市）の人々のために、自分のことを忘れてお願いにくる安竜のひたむきな姿に心を打たれて、とうとう協力をすることにした。

永島安竜は、富士北麓ほくろくに数少ない医者の子として下吉田に生まれ、幼いころから友だち思いで、優しい心の持ち主だった。病気や栄養失調などで困っている貧しい人々を、無料で診察するという人柄であった。ときに弘化こうか四年（一八四七年）安竜四十七歳の秋であった。

「また青目石だ。」

岩石に前方をふさがれ、硬い熔岩ようがんは容赦ようしやなく村人の行く手をさえぎった。

「またか、しかたがねえ、よけて掘るべえ。」

苦しい仕事にも打ち勝ち、みんなで力を合わせたので、湖畔と丸尾は穴は細いけれどやっとながり、どうにか水が流れるようになった。嘉永かえい六年（一八五三年）いわゆる第一期工事の完成である。みんなのひたむきな努力により少しばかりの田は作られたが、水の量が少なく工事としては失敗であった。

「あれほど世間の人から反対され、失敗した掘抜だったが、穴は通じるようになった。もっと大きな穴さえあけば。」と、安竜は思った。

「あの山にもう一度掘抜を通そうなんて、大ばか者じゃ。」

「そうじゃ、そうじゃ、気が狂った安竜がまた来たぞ。」

と相手にされなかった。それどころか、

「大うそつきじゃ、できない事を、いかにもできるなどと偽って、金を集めようという、大うそつきじゃ。」

と、安竜に石を投げつけたり、迫害を加える者さえ出てきた。安竜は無口になり、暗い顔をして考え込んでしまった。以前のように村の中を歩くこともなくなった、ある夜ふけのことであった。トントン、トントンと、裏口の戸をひそかにたたく音がした。

「はて、急な病人でもでたか？」

と、裏口に立って安竜の目の前に現れたのは、新倉村の＊小作の作兵衛さくべえだった。

「作兵衛さん、こんな夜おそくに、いったいどうなすった。」

「安竜さん、これを掘抜のために。」

と、ずっしりと重い包みを安竜の胸元に押しつけるように渡すと、安竜の呼び止めるのも振り切って行ってしまった。包みを開いてみると、一文銭ばかりおよそ百枚、安竜はその小銭ばかりの包みをしっかりと抱き、長い間その場に立ち尽くしていた。その目からは涙がとめどなくあふれていた。

安竜は工事再開に向け、資金づくりに走りまわるようになった。近くの村だけではなく、遠く駿河すまがの三島、吉原、沼津方面にまで足を運び、寄付を求めた。命がけでかみお上かみにも直訴を行った。こうした安竜のひたむきな、涙ぐましい行為が、反対していた人々の心を少しずつ動かし、食うや食わずの貧しい生活の中、身を切るような思いで、一文、二文と資金を出し合っていた。

それから十年の歳月が流れた。文久二年（一八六二年）の秋のある日、安竜は村人の前で、

*小作：地主から土地を借り、小作料を払って農業を営むこと。

「みな衆、金がなくなつたので、しかたなくやめていた掘抜だったが、また、工事ができる運びとなつた。今度こそ大きい穴をあけ、水を通そう。」

真剣に語る安竜のまなざしに励まされた村人たちは、永島一家が、田畑や家財まで売つて三百両のお金をつくつたことに心を動かされた。二度目の工事は文久三年の春から、三千三百両の資金をもとに進められた。資金はあつても主な道具は「石ノミ。」冬でも、はだしにわら草履ぞうり。そのうえ寒さと暗闇くらやみとの闘い。くじけそうになる村人を励まし、工事の先頭にはいつも安竜がいた。言語に絶する苦しい辛い日々が続いた……。

そして三年後。

「やった、やったあ。水が流れた。」

「掘抜が、掘抜が通つたぞ。」

それはまるで雷雨のように激しく流れる水となつてあふれた。歓喜にわきかえる村人。安竜は、

「村の衆、ありがとう。本当にありがとう。みんなよく頑張つたな。」

と言いつつ、いつまでも、いつまでも掘抜を見つめていた。

安竜が掘抜の工事に取りかかつてから、二十一年ののち、慶応三年（一八六六年）春のことであつた。河口湖でほどよく温められて栄養を含んだ水は、新しく十一町歩ちやうぶ（約十一ヘクタール）あまりの開田を潤し、今も、うまい米を育てている。



消防の父 小宮山清三

「逃げろ！」

「助けて！ 火事だ、火事だあ。」

逃げる人々、泣き叫ぶ母と子。甲府市新柳町しんやなぎまち付近に大火事発生。

炎はあつという間に燃え広がりが、次々に町を焼き尽くしていく。

「この火事、おれたちに任せろ。男の度胸を見せてやろうじゃねえか。」

甲府の町火消しが現場にかけつける。

「水をかけろ！ 火を消せ！」

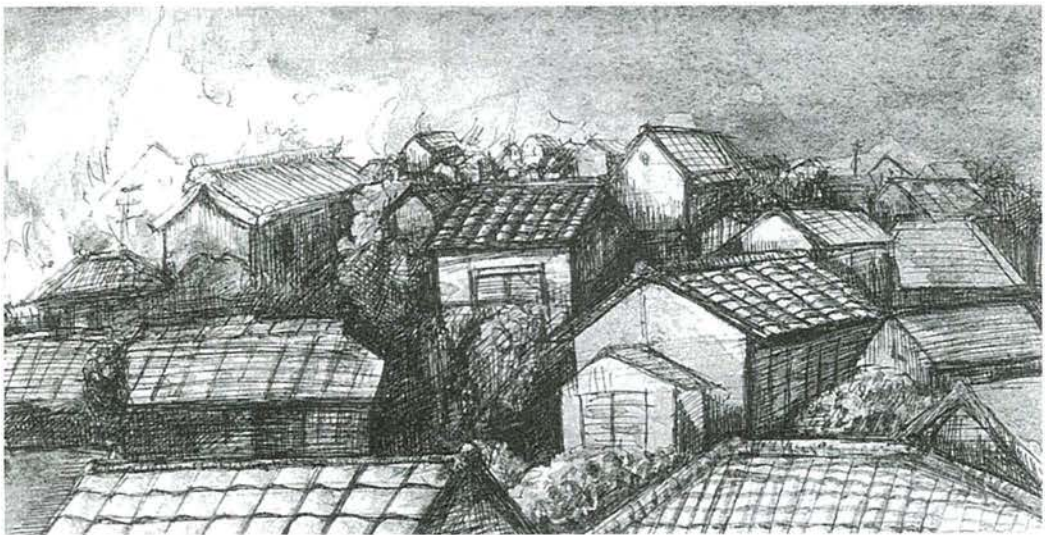
「だめだ、だめだ。火のまわりが早すぎる。」

「よし、壊せ。家を壊せ。周りの家を壊すんだ。火消しの男意気を見せてやれ！」

明治から大正にかけての消防は、主に破壊消防であった。建物を壊し、火が燃え移らないようにする方法だ。炎を完全に消すだけの大量の水をかけられる設備は当時はなかった。

炎はようやくやくおさまった。しかし三百四十七戸の家々が焼けてしまった。焼け落ちた家々からはまだ煙が上がっている。家や財産を一瞬のう

*新柳町：現在の甲府市武田三丁目、天神町付近のこと。



ちになくしてしまった人々は、これから生活していくあてもなく、荒れ果てた町の中をさまよい歩いていた。

小宮山清三はその様子を眺めながらつぶやいた。

「こんなに焼けてしまった。」

清三はその時はじめて火消したちから、当時の消防の技術では大火事が起きたら周りの建物を壊すことぐらいしかできないことを聞き、大きなショックを受けた。

(男の度胸、男意気で果たして火事は消せるのか。特別な訓練を受けた消火の専門家がもつとたくさん必要なんじゃないか。今より道具を揃えて、周りの建物を壊さなくてもすむような、たくさん水をはき出す性能のいいポンプや設備が必要なんじゃないか。このままでは自分たちの町を自分たちで守ることさえできないではないか。)

このような考えを持って、清三は、大正四年、甲府市池田村消防組頭くみがしらとなり、県内の消防を視察したり、多くの文献を読んだりしながら独自の消防研究を進めていった。そして、消防のあるべき姿について、北海道から九州まで日本全土を講演して回った。それにより多くの人々が新しい消防のあり方について理解を深めていった。愛媛県明治村めいじむら小学校で講演したときなどは、片道四十キロの道のりを七十名の消防組員が歩いて参加し、また歩いて夜中に帰るといふほどだった。さらに日本消防協会の設立にも力を尽くし、文字通り、消防における、山梨県や日本全体の中心的人物となっていた。

このように、清三は新しい考え方で日本の消防を改革していったが、これに対して昔ながらの甲府の町火消したちは相談をはじめた。

「おい、これからは新しい消防組ができるらしいぞ。」

「本当か、そりゃ。」

「ああ、火消しの特別な訓練を受けた専門家の集まりつつゆう話だ。そいつらが火事ばっかじゃなくて地震やいろんな災害が起こったときに活躍することになるらしい。新しいポンプを仕入れたり、今までとは違ったことをしてい

*池田村：甲府市西部を流れる荒川の右岸で、現在の荒川、下飯田などの一帯。

るらしい。」

「それじゃあ、俺たちはどうなるだ。昔ながらの火消しなんかいらねえっちゅうこんなのか。」

ある夜、火消したちは消防の会合から帰る清三を待ち伏せした。手には棒などを持ち、声をひそめて待っていた。すると清三が現れた。

「よし、やっちまえ。」

だれかが叫ぶと、みんな一斉に清三に襲いかかっていった。数回殴られながらも襲撃をやつとの思いでかわし、家に戻った清三だったが、火消したちのこうした不満を知り、悩むようになった。

（私は、地域の人たちが安心して生活できるよう、自分なりに勉強し、研究して、今の消防を少しでも発展させていきたいらいいと思つてがんばつてきたつもりだ。でも、そのことがこんなにも反感をかっていたとは考えてもみなかった。わかつてもらえないのならこのままやめてしまったほうが楽だ。）

また、こういう気持ちもあった。

（ここまでやってきたのにどうしてやめるのか。何のためにこれまでやってきたんだ。全国講演をしたりしているろな苦労をしてきたのは何のためだ。）

周囲の人たちの意見もさまざまだった。

「もう十分やったじゃないか。火消したちがまたいつ襲つてくるとも限らないぞ。火事のことには火消しに任せておいたらいいじゃないか。体もこわしてしまふぞ。」

と言う人がいれば、

「やつとこまできたんじゃないか。君に期待してる人たちがいるんだぞ。君が努力することによって火事など災害が起こつた時にたくさんの人たちが助かるんだ。」

と言う人もいた。

くる日もくる日も清三は悩んだ。ある日、新柳町の火事の中を泣き叫びながら逃げまわる母と子の姿を思い出し



た。そして清三は決心した。

（そうだ、私はあんな悲しい思いを人々にさせてはならないと考えてこれまでやってきたんだ。ここでやめてはいけない、やめてはいけないんだ！）

その後、巨摩高等女学校（現巨摩高校）の校庭では、数千人の観衆の中、県下消防連合大演習が行われた。各町村消防団の整然たる行進やきびきびとした消防動作・訓練に大きな拍手が寄せられた。総指揮官小宮山清三の自信に満ちた指揮をとおして、全国から集まった消防関係者は「消防とはこういうものか」と感動し、「消防山梨」の名は全国にさらに広まった。この光景を収めたフィルムが県内各映画館で上映されたが、さらに外国からも注文がきて、ドイツ、スイス、イタリア、イギリスなどへも送られた。

現在、一一九番のダイヤル一つですぐに消防車がやって来る。近代的な最新設備で様々な災害に対応してくれる。無駄のない動作で、数多くの隊員が協力し合いながら、私たちの安全を守ってくれる。私たちが当たり前だと思っている、これらの基礎となるものを築いてきた人が、小宮山清三、その人である。

内藤清右衛門と『甲斐国志』

「そちを『甲斐国志』の編さん委員に委嘱する。」

文化二年（一八〇五年）、内藤清右衛門は、幕府より国志編さんの内命を帯びて着任した甲府勤番支配松平定能より突然の委嘱を受けた。「国志」とは「その国の地誌」のことである。地域の自然・社会・文化等の特色を記したもので、この時代、諸国で競って編さんされていた。村役人、寺社、その他多くの人々を動員した大事業となり莫大な人力と財力を必要とした。

「お待ち下さい。恐れ入りますが……しばらく考えさせていただけませんか……」

すでに五五歳、当時としては高齢である。幕府にとつても自分たちにとつても地誌が必要であることは分かる。武田家滅亡後二二〇余年。人々は誇りを失い、古文書等の散逸が著しい。「国誌」の編さんがいかに困難であるかも承知している。名主としての仕事もおろそかには出来ない。清右衛門は迷った。

「うむ、無理もない。しかしそれはならぬ。これはおそれ多くも幕府の内命をいただいております仕事じゃ。なんとしてもちに、一肌脱いでもらわねばならぬ。そちのことは前任者からよく聞いておる。史学に詳しく打って付けの人物とのことじゃ。頼む、清右衛門。」

そうまで言われては断れない。清右衛門は都留の森島弥十郎、甲府の村松弾正左衛門と共に編さん委員に委嘱され、その主席に選ばれた。編さんとは資料を集めて整理・考証・校正し書物を作成することである。

内藤清右衛門は、宝暦元年（一七五一年）中巨摩郡西花輪村（中央市）に生まれた。先祖は武田家の家臣であった

*甲府勤番支配：老中所管の重職。勤番士を統率し甲府城を守り、訴訟の決裁等をした。

が、滅亡後、農民となり釜無川の氾濫原はんらんげんを開拓し代々名主をつとめていた。清右衛門は若くして和漢の学を修め特に史学に秀でていた。高度な和算にも通じている。また、忙しい仕事の合間をぬって自邸に私塾「時習館じしゅうかん」を開き近郷子弟の教育にも力を注いでいた。さらに、近郷きつての豪農であり、大事業を遂行するには誠に適任の人物であった。編さん総裁は松平定能。実務を担当する編さん委員は内藤清右衛門主席以下前述ぜんじゆつの三名。それに助手として定能の家臣等十数名。甲府勤番支配の役宅を編さん所として事業を開始した。

翌、文化三年二月、甲斐国すべての村の名主、長百姓、それに神社や寺院に、古文書や系図・古図・寺社の縁起・珍しい草木・古画・石碑・史跡・名所・言い伝え等を書き出して提出するようお触れが出された。しかし、このお触れを徹底させることは容易ではなかった。古文書の所蔵者の中には没収を恐れ提出を渋る者がいた。また、言い伝え等についてはたびたび調べられては面倒めんどうなのか、隠しておく者も多かった。人々の不信感意外に深く、資料収集は思うようにはかどらなかつた。そこで、編さん関係者が村々に出向いて収集した。彼らは粘り強く誠実に調査を続けた。毎日、夕方遅くまで資料を収集し、宿に着くとすぐに翌日の調査予定の村の役人に連絡するという精励ぶりであった。書き写した資料は確実に持ち主に返した。宿舎の手配も自分たちで行い、荷物運びの人足の賃金もきちんと支払った。予算が少ないので身銭をきって調査に当たることもしばしばであった。直接の聞き取り調査は定能の家臣等が当たることも多かった。彼らは甲斐の事情に精通していないので、集まった資料を厳密に考証・校正する必要がある。清右衛門等の考証は厳しく、公正中立、客観的事実に反するもの、信すべき文書や記録のないものは一切採用しないという徹底ぶりであった。

事業が軌道に乗りかけた文化四年、新たな疑問が起こった。総裁の定能だに能が西の丸小姓組頭こしょうくみがしらに榮転となり江戸に戻るることになってしまった。「国志」編さんは内命があったとはいえ、表向きは定能個人の事業である。彼がいなくなっ

た以上、勤番支配の役宅を使うことは出来ない。定能自身は事業の継続を強く望んでいたが、このままでは「国志」編さんは挫折ざせつしてしまいかねない。委員等は悩んだ。

「完成させたいのはやまやまだが、残された事が多すぎる。それに、資金も不足している。」

「総裁が江戸に帰った以上、編さんは無理なのは……。」

「編さんも引き払わなくてはならない。しかし、…それにしても……。」

重苦しい時間が過ぎた。しばらくして、じっと目を閉じていた清右衛門が口を開いた。

「私の家を編さん所にしましょう。せつかくここまでできたのです。武田家滅なき後、人々は誇りを失っています。幕府の領地となり勤番支配もたびたび替わり、甲斐の文化が忘れ去られようとしています。「国志」は幕府にとっても必要ですが本当は私たち、それに私たちの子孫のためにこそ必要なのです。」

この一言で事業は前にも増して真剣に進められた。一つのことを考証するのに何日も資料の山に埋もれることもあった。甲斐国中から集められた資料は数千点にのぼる。読むだけでも大変である。書物にするためには内容だけでなく形式の統一等細々こまごましたことも留意りゆういしなくてはならない。江戸の総裁との連絡もおろそかにできない。交通の未発達みだたのこの時代、江戸と内藤宅の距離は想像以上に遠い。数年の歳月がたちまちに過ぎた。諸国の地誌がしきりに幕府に献上けんじやうされている。江戸の定能は焦あせった。

「いつまで待たせるつもりじゃ。ある程度の調査で打ち切り、不明の分は追加補正でも良いではないか。時を失してはならぬ。清右衛門に急ぎ督促とくそくせよ。」

江戸から厳しく催促そくそくされることもしばしばであったが、清右衛門の態度はあくまでも慎重であった。

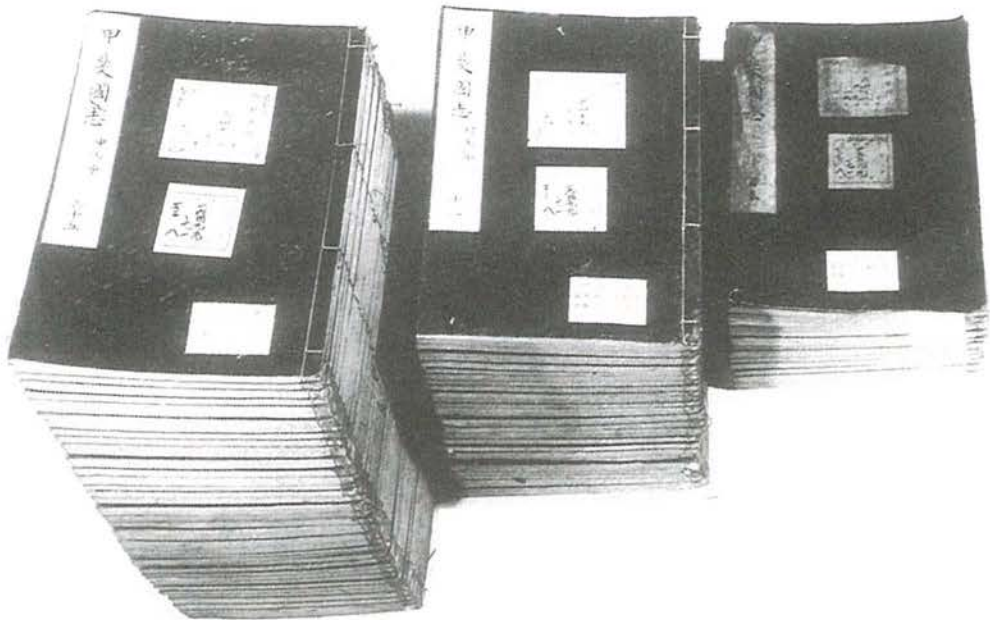
(これは私たちの「国志」だ。中途半端ちゆうはんぱなことは許されない。ふるさと甲斐の誇りがかかっているのだ)

清右衛門は六十歳をとうに越えていた。実は清右衛門は委員を委嘱された時「大変な仕事を引き受けました。どうか私にあと十年の寿命をお与え下さい」と菩提寺長徳院ぼだいじちやうとくいんに日参し先祖の靈に祈願していたのだった。

苦節十年、文化十一年（一八一四年）十二月十六日、ついに『甲斐国志』は完成した。計百二十四巻が白木の篋筒たんすに入れられ総裁松平定能によって幕府へ献上された。『甲斐国志』は各国地誌の中でもとりわけ優れたものとされ將軍家齊等に賞賛された。その正本は現在「内閣文庫」に保管されている。

しかし、その『甲斐国志』に清右衛門等の名はない。當時にあつてはやむを得なかつたとはいえ、関係者の心中には複雑なものがあつたであろう。

大正十三年（一九二四年）、山梨県は清右衛門等の功績をたたえその墓域を史跡に指定した。また、西花輪の内藤家には今も『甲斐国志』の草稿等三二五二点の資料が残され、県文化財に指定されている。



『甲斐国志』献上本（「内閣文庫」所蔵）

種まく人

巧たくみが列車に腰かけていると、軍服姿の日本人が乗りこんできて、横柄にあごをしゃくった。

「おいヨボ、そこどけ。」

ヨボとはかつて日本人が、朝鮮民族を蔑さげすんで呼んだ言葉である。ふだん巧は朝鮮の民族服を着ているので、うわべだけでは国籍の見分けがつかない。彼は逆らわず、すなおに席を譲った。わたしは日本人だ、とひとこと言えば、立たなくてもよかったはずである。ほかにも空席はあったのだから。

浅川巧は一八九一年（明治二十四年）一月十五日、北巨摩郡甲村かほとむら（北杜市）に生まれた。山梨県立農林学校（現農林高等学校）を卒業し秋田県の営林署に数年勤めたあと、日本人学校の教師をしている兄伯教のりたかを頼って朝鮮へ渡る。一九一四年、二十三歳のときである。着くとすぐ彼は朝鮮語を学びはじめ、ほどなく日常会話はもとより、読み書きも自由にこなせるようになった。

「おじさんは、どうして朝鮮語を勉強するの。」

姪めいの恵美子（兄伯教の二女）の問いに、

「この国で暮らすには、この国の言葉を知らなきゃ。キリスト教の宣教師は、外国へ行くと、まずその国の言葉を覚えるんだよ。」

にこやかに巧は答えた。彼は熱心なクリスチャンであった。

一九一〇年（明治四十三年）日本は大韓帝国を武力で制圧し、朝鮮半島を自国に併合した。以来この国の人々を劣



浅川巧功德之碑

等民族と蔑み、彼らの土地や財産を奪い、強制的に日本語を学ばせ、名前まで日本風に改めさせた。人々は日本人を憎み恐れた。逆らえば死が待っていた。

屈辱的な植民地支配に抵抗して一九一九年（大正八年）三月一日、朝鮮独立運動が起こった。このとき、独立宣言文を持っていた十五歳の少女柳寛順ユウカンジュンが逮捕され、拷問ゴウモンのすえ殺された。運動は失敗におわり、朝鮮民族にたいする日本の、厳しい弾圧がはじまった。巧が朝鮮に渡ってから五年目のことである。

巧はこの国の服装や食べ物を好み、朝鮮式の家に住み、朝鮮の言葉話を話し、貧しい家庭の子には学費を援助し、朝鮮の人々とわけ隔てなくつきあった。たいていの日本人が嫌われるなかで、彼の家には野菜を届ける人、夜おとずれて歓談していく人と、巧を慕う隣人が絶えなかった。

朝鮮の国土は当時、ほとんどがはげ山であった。巧は朝鮮総督府の山林課*に就職し、この山に緑をとりもどす仕事に従事した。しかしこれは容易な作業ではなかった。土に栄養分が乏しく土質がもろく、これまで種を根づかせることに成功した人はいない。

巧は助手を連れ、この国の山をくまなく調べて歩いた。彼はいつもの民族服であった。日本人にやとわれている助

*朝鮮総督府：日本が朝鮮半島を治めるために設けた政治機関。（一九一〇～一九四五年）

手は洋服であった。二人が朝鮮語で話していると、助手のほうが逆に、朝鮮語のじょうずな日本人とみられた。その飾らぬ人柄と語学力が、世界的な発見につながる。

ある村で巧が松の話をすると、村びとは彼を日本人とは思わず、気軽に会話にのってきた。

「松のかたい種は、春まいてもすぐには芽が出ないよ。」

「でも山に落ちた種は、自然に発芽するぞ。」

巧は、はっとした。その秋、種を自然の状態のまま埋め、春に掘り出してまいたところ、芽が出た。

『露天埋藏法』と呼ばれるこの方法は、世界的な功績といまに評価されている。

兄伯教はそのころ、朝鮮の陶磁器の研究に没頭していた。独立運動が起こったその年、なぜか教師をやめて芸術の道へ進む。世間の朝鮮の人々を蔑視する傾向に逆らうように、翌年彼は朝鮮民族をテーマに、朝鮮の木ぐつを履いた彫刻『木履の人』を帝展^{*}に出品、みごと入選する。そのとき新聞記者のインタビュに、こう語っている。

「朝鮮人と内地人（日本人）との親善は、政治や政略ではだめだ。芸術で心を通わせるべきだ。」

以後伯教は、木喰^{もくじき}仏を世に出した民芸家の柳宗悦^{りゅうしゆえつ}らと親交を結び、朝鮮民族美術館の設立にかかわるなど、その一生を朝鮮美術の発掘と紹介、保存に尽くすことになる。

彼はすぐれた弟子も育てた。伯教によって自国の文化のすばらしさを教えられ、失われた朝鮮古陶器^{ことうき}高麗青磁^{こうらいせいじ}を復元した。現代韓国陶芸界の巨匠といわれる池順鐸^{チ・スンタク}氏は、その一人である。

巧ははげ山を緑によみがえらせる仕事のかたわら、兄の影響で青磁、白磁など朝鮮陶器の美しさに心を奪われてい

*帝 展：帝国美術展覧会、現在の日本美術展覧会（日展）。

*木喰 仏：下部町（現身延町）出身の明満上人（一七一八〜一八一〇）が刻んだ微笑佛像。

*高麗青磁：表面が青みがかった色の高麗時代（九一八〜一三九二）の陶器。 柳宗悦：民芸運動の創始者（一八八九〜一九六一）

く。各地を歩きながら、古い陶磁器のかけらを集めては兄に届け、伯教の研究を助けると同時に、日常使われているお膳ぜんや座り机、お椀わん、箸はしなど、これまで特別に顧みられることのなかった生活用品に深い愛着をもち、その収集にのりだしていた。物の形を模写し、古老を訪ねて昔からの名称、用途、各部の呼称を聞き出し、朝鮮文字と日本語訳を記していく。

一九二九年に出版された『朝鮮の膳』は、この国の民芸品に光を当てた最初の労作であり、内外で高い評価をえた。すでに朝鮮半島では忘れさられている固有名詞を、正確にいまに伝えている。この書物に巧は、次のように記す。

「疲れた朝鮮よ、他人の真似まねをするより、持っている大事な物を失わなかったなら、やがて自信のつく日が来るであろう。このことは又また工芸の道ばかりではない。」

彼の絶筆となった『朝鮮陶磁名考』は、死後（一九三一年）出版された。百八十四枚の図に朝鮮語とその訳をつけたものである。これらの著作で巧は、わたしたちに何を訴えたかったのであろう。

一九三一年四月二日、巧は急性肺炎のため四十歳の若さで急死した。告別式には、巧の死を悲しむ隣人がぞくぞくとつめかけ、柩ひつぎを運ぶことを申し出た。おりから降り出した雨の中を、民族服をまとった四十八人の男たちにかわがわるかつがれ、巧の柩は里門里イムンリの朝鮮人墓地に運ばれた。日本の植民地政策に対する反発が強まるなかで、彼のように土地の人に慕われて葬られた日本人はまれであった。

彼の死を悼いたむ声は内外にあふれた。その人柄と業績は、のちに文部大臣となる安倍能成あべのよしげほか、日本の知識人にも広く影響をおよぼした。

彼の没後三十六年たった昭和四十二年、巧の徳をしのぶ有志により、ソウル郊外にある忘憂里ワウイリの墓地に『浅川巧功徳之碑』が建てられ、春秋の清掃が今もつづけられている。

*安倍能成…評論家、哲学者、教育者。（一八八三―一九六六）

*忘憂里の墓地…巧の墓はソウル北東部の里門里の朝鮮人墓地から、後年郊外の忘憂里に移された。

秋のほたる

——生命を見つめて生きた文人

飯田蛇笏——

蛇笏は、後山うしろやまに建てた山口素堂やまぐちそどうの句碑のところへ上り、近ごろとみにおぼつかなくなつた足をそろそろ運びながら、くしゃみを一つした。つえを左手に持ちかえ、右手で口もとをぬぐつた。「咳せきをしても一人」尾崎放哉おざきほうさいの句がふと浮かんだが、それに心を乱されることはなかつた。

ここに足を運ぶのは、今さら改めて秋を觀照しようなどといった、そうぞうしい気持ちからではなかつた。言つてみれば、胸につかえているものがあつて、それが、ここに来ると引き出され、決着がつくように思えてのことだつた。あれこれ、胸に去来するものを、ありのままにふるまわせる。それでいて、どこか空虚であり、満たされることはなかつた。大地が冷えていくのにも似て、体力の衰えは静かに、確実に、自覺の外で進んでいた。後山への登り道より、帰りの下り道でそれを感じることも多くなつた。つえが体の一部になるのは、坂道を下るときであつた。気持ちと足の運びが不ぞろいになり、くぐつのように、ひざと腰が、がくがくした。そういうとき、老いの自覺は清明であり、未練をとどめるものは、これほど無かつた。

何から来る胸のつかえであるか、あえてたぐろうとも思わなかつた。それでいて、霧の荒野をさまようような思いがあり、蛇笏はしだいに無口になつていった。家を出る時も、帰つて来て家に入る時も、黙つている自分がそこにいた。「旅に病んで夢は枯野をかけ廻めぐ」松尾芭蕉まつおばしやうの句がふつと胸に浮かんだ。家を出るとき、龍太りゅうたの嫁が、紙にひねつたかりんとうを手握らせてくれた。それをふところの中でまさぐりながら、素堂の句碑に真向かつていた。この句碑は、先年蛇笏自身が建てたのだつた。

山の匂いがある。草が茂つている。木の枝が風を受けてゆれている。天つ光はあまぬく、足下のおおばこの葉が光つ

*山口素堂：江戸時代の俳人。甲州（山梨県）出身。尾崎放哉：大正時代の俳人。自由律無季俳句の人。
*龍太：飯田龍太。俳人、蛇笏の子。松尾芭蕉：江戸時代の俳人。俳聖と言われている。紀行文「奥の細道」を著す。

ている。そう思ったとき、「自尊じそん」という言葉が不意に、天啓てんけいのように訪れた。そして、さも当然なことであるといったふうに、この言葉が蛇笏の胸にすわった。万物ごとごとく所を得て、それぞれが、それぞれに存在している。そう実感した。頭のとっぺんから足のつま先まで、蛇笏は、たしかに生命体としてそこに立っている自分を自覚した。そして、ごく自然に、「一天いつてん自尊の秋」ということばのかたまりが生まれていた。

蛇笏は、ふところから紙と鉛筆を取り出し、素堂の句碑の前でこのことばを書きとめた。そして、ごく自然に、句碑に向かつてぺこりとおじぎをした。つきものがおりたように気分が明るくなっていた。

「この分だと、明日は好よい天気でしょうな。」

畑で仕事をしている人に蛇笏は大きい声で声をかけた。かけられた方では、何事がおこったのかとたまげて、「はあ……はい。」と言ったまま、山を下りて行く蛇笏を見送った。

夜、床についてからの蛇笏の胸に浮かぶものは、こんとんこんとんの海からつむがれるように、次から次へと現れた。そして、あの人、この人のことを思った。「死病しびょう得て爪つめうつくしき火桶ひおけかな」の句を得たのは大正四年であった。火鉢ひばちにかざす手の爪が、透すけるように白い人は、死病と言われた肺結核にとりつかれた人であった。その白い手の爪に、生命の尊さを実感したのだった。

その前の年、大正三年には、「芋いもの露連山影つゆれんざんかげを正しうす」を成していた。里芋の葉に朝露がころころとこごっている。土の下には、芋がいくつもその生命をふくらませていることであろう。雨後の清浄せいじょうな自然が、存在するものの生命をきわ立たせていることを実感させられたのだった。

小説家芥川龍之介あぐたがわりゅうのすけの死に真向かったのは、昭和二年のことであった。このときは、たましひのたとへば秋のほたるかな

とうたつて、その死を惜しんだのだった。蛇笏の心の中には、秋まで生き残った螢が、生命あかの証しを弱々しく光らせ

*天啓……神の恵み。

るように、一度も顔を合わせることはなかったが、互いに意識し合い、認め合った文人の生命が、その死後も、胸中に光を放っているのだった。

今、一天自尊の秋ということばを得て、山廬さんろの夜を覚めていると、たしかに、生命への開眼の道程を歩んできたように思えるのだった。たしかに、いくつもの死に真向かい、いくつもの死を看取みとって来たのだった。今思い返してみると、肉親の死ばかりが多かった。

心に期してたのむところのあった長男を、戦争で失い、戦死公報せんじこうほうを手にした当時のことは、その思いまで今に鮮明である。

戦死報秋の日くれてきたりけり

葬も了おへてなほ靴音をまつ秋夜

冬の葬いちいち土をふみゆけり

ゆめみたる三十余年秋の風

これらは、しほり出す黙もだしの叫びであった。

父の死に対面したときは、「冬灯死ふゆとうしは容顔ようがんにとほからず」の一句を成したのだった。そこには、死者の平安と、それを見つめる己おのれの心の状態とが、穏おだやかに折り合い、父の死を冷静に受け入れたのだった。

しかし、長男鵬生ほうせいの戦死という現実は、山廬全体を押しつぶし、生命への決別を容易に納得することはできなかつた。口の上せることはなかつたが、長男の死は、蛇笏の詩に濃く影を落としたのだった。

遺児の手のかくもやはらか秋の風

遺児と寝て一と問森ましんたる冬座敷

雪山にこもりて孫を愛す情

おもかげを児こにみる露の日夜かな

瀧尻たきしりの渦うずしづかにて雪の中

の渦は、山廬で見つめて来た死と、死を死たらしめた生命の軌跡きせきといつてもよかつた。

二男数馬の死のときは、「夏真昼死なつまひるしは半眼はんがんに人を見る」であり、三男麗三れいぞうが戦病死したときは、「春雪に子の死あひ

*山 廬：蛇笏の生家、作句活動の拠点。

*鵬 生：蛇笏の長男聡一郎の俳号。

*戦病死：戦地で病死すること。

*戦死公報：戦争で死んだことを知らせる公の通知。

*生命の軌跡：生きてきたあかしとしてきざみつけたあと。

つぐ朝の燭」と書きとめたのだった。

こうたどつてくると、肉親の死が契機となつて、生命の尊厳へ自分の目を開かせたことがわかるのだった。黒く光るおび戸から天井に目を移すと、蛇笏の胸に、鮮かに浮かび上がってくる句があった。

大つぶの寒卵かんたまごおくお縷縷ぼろの上
乳ちを滴たりて母牛の歩む冬日かな

くろがねの秋の風鈴ふうりん鳴りにけり
わらんべの溺おほるるばかり初湯かな

をりとりてはらりと重きすすきかな
なまなまと枝もがれたる柘榴ざざろかな

山柿かや五六顆かおもき枝の先
秋風あきかぜや磊らいかい磈たいとして父子ふしの情

山国の虚空こくう日わたる冬至とうじかな
ある夜月に富士大杉の寒さかな

炭売りの娘このあつき手に触さわりけり

死によつて浮かび上がる生もあれば、これらは、生きているもの、一人一人、一つ一つがたしかに息づき存在している生命への共感であつた。

そう考えてきたとき、突然「誰たれ彼かれもあらず」という句が、当然のごとく、昼の「一天自尊の秋」の上におさまるのがわかつた。胸にそらんじてみたときは、もう何年も前から、それは一つの作品として完成していたようにそこにあつた。

「寝つかれませんか。」

ふすまを隔くわてて、暗闇くらやみから龍太が声をかけてきた。

「明朝、お前に……君に、目を通してもらいたいものを……得たんだがね。」

蛇笏は、ふすまの向こうに、居ずまいを正してかしまっているであろう龍太に、そうこたえた。

*おび戸…部屋と部屋とをしきるおびさんのついた板戸。

*磊たい磈たい…高く大きいようす。

*虚こ空くう…大空。

ややたつて、龍太が改めて声をかけようとしたときには、蛇笏は、すでに軽い寝息をたてていた。

明治生まれの文人、飯田蛇笏の生涯の句集をまとめた「新編飯田蛇笏全句集」（昭和六十年四月初版、角川書店）には何と六千二百五十六句が収められている。

この全句集の一番最後に載っている句、すなわち、

六千二百五十六句めの作品が、

誰たれか彼もあらず一天自尊の秋いってんじそん

であり、辞世しぜいの句と言われている。

自らが主宰した俳誌「雲母」の、昭和三十七年十月号にこの作品は発表された。

飯田蛇笏は、昭和三十七年十月三日、生涯、ここに住むことにこだわり、愛着をもって住み、見つめ続けた甲府盆地の空の下、境川村（笛吹市）の自宅山廬で、七十八年の生涯を閉じたのだった。

蛇笏は、生命への共感を追い求め続けた詩人であった。

* 辞世の句：死に臨んで、この世に別れを告げる気持ちで成した句。

Be Gentleman (グー ジェントルマン)

『日に三度我が身を省みよ』と、両親は我が子に「省三」と命名した。この省三とは、後に、山梨県出身で初めての総理大臣となった石橋湛山いしばし たんざんのことである。

湛山は、一八八四年（明治十七年）東京に生まれ、生後まもなく、父親が郷里の増穂村（南巨摩郡富士川町）呂福寺りよふくじの住職になるため、一家で山梨にもどってきたのだった。そして、十歳のとき、両親は省三を鏡中条村（南アルプス市）の長遠寺じょうおんじの望月日謙もちづき かげんに預けた。湛山は、厳格な実父と温かな養父に育てられ、小・中学校時代を山梨で過ごすこととなる。そして、山梨県尋常じんじょう中学校（現 甲府第一高等学校）に十一歳で合格した湛山は、そこで、大島正健校長おおしままさたけとの運命とも言うべき出会いをもつこととなった。

後に湛山は、その大島正健校長のことに^{*}ついて、次のように語っている。

「私は、この中学校で二度落第した。落第したと言うことは、生徒としてはとても不名誉なことで、だれも人前で言いたくはない。けれども、自分はそう思っていない。そのわけは、普通の勉強家であったなら、明治三十二年か三十三年には卒業しなければならなかった。そうだとすると、私は、大島校長の顔も知らず声も聞かず、あの先生の教育方針の根本となったクラーク博士の遺訓いくんなるものも知らなかったであろう。私は、落第のために大島先生

* 「石橋湛山 写真譜」東洋経済新報社

* 「偉大なる言論人 石橋湛山」浅川保著 山田ライブラリー

にお会いでき、先生の教えを受けることができた。中学の卒業は遅れたが、大島先生に出会って、ものの見方や考え方、そして、自分の生き方が変わった。不思議なことです。実に、不思議というよりほかはない。」

大島校長は、それまでの些末な規則を廃止して、「ビー ジェントルマン……」と先生方や生徒たちに語った。この考えは、北海道の札幌農学校で大島校長が薫陶を受けたクラーク博士の言葉「Boys be Ambitious (少年よ大志を抱け)」に由来し、「すべての言動は、自分自身に責任があることを教え、自らの良心に従って生きる」ように諭すものだった。この考え方が、後の湛山の生き方に大きな影響を与えたのである。

大島校長の教えに影響を受けた湛山は、早稲田大学を卒業し、一九二一年(明治四十四年)東洋経済新報社に入社した。記者、言論人としての湛山のスタートである。二十八才で結婚し、東京に住んでいたが、その後、一才になる子どもが肺炎になりかけ、りょう養のために医師のすすめで、鎌倉に移り住んだ。

それから三年後の、一九二三年(大正十二年)九月一日、午前十一時五十八分、鎌倉の家の二階の書さいで仕事をしていた湛山は、ぐらぐらと最初の揺れが来たときに、この地震は尋常ではないと直感した。この関東地震(関東大震災)による鎌倉の被害状況は、鎌倉町役場の震災誌によると、「戸数、四一八三戸の内、全壊が一四五五戸、半壊が一四五九戸、埋没八戸、全焼四四三戸、半焼二戸、流失一一三戸、死者四一二名、負傷者三四一名に達した。」とある。およそ八十五%の家が被害を受けたというすさまじい状況であった。海岸には、最大十メートル近い津波が押し寄せ、人家や船舶が流出した。

湛山は、揺れがおさまって、家の外に飛び出して一層驚いた。土台を支えていたコンクリートから家全体がずれて、海に向かっておよそ二尺(約六十センチメートル)も飛び出していることに気づいたのだ。しかし、幸いにも湛山の

* 「Boys be Ambitious (ボーイズ ビー アンビシヤス!)」

札幌農学校(現北海道大学)にいたクラーク博士の言葉「少年よ、大志を抱け。」

* 「東洋経済新報社」…経済専門の雑誌を編集する会社

家は、崩壊ほうかいを免れ、下じきになることもなく、家族も無事であった。

このとき、湛山は、呆然ぼうぜんとする間もなく、直ちに行動を起こした。

湛山の頭の中に「己の良心に従って生きよ。」・・あの言葉が頭をよぎった。日頃より考えていた心づもりがあったからだ。その心づもりとは、もし何かあったときには隣接りんせつする御用邸ごようていを使おうという考えである。湛山は、人々を御用邸に避難ひなんさせ、そこを避難所に使おうと即座そくざに決めて行動を起こしたのである。

地震があつたその日のうちに、家にあつた刀を持ち出して、その御用邸の生け垣を切り、穴を開けて近所の人たちを避難させた。傾いた自宅かたむから寝台などを運び込んで、バラックの仮住宅をつくりあげた。余震が続く中、その夜までに、約五〇〇世帯以上の被災家族が集まった。このとき湛山は不法侵入同然の行為で中に入り込み、御用邸の留守番からやかましく退去を要求されても動ずることなく、いかなる制止も聞き入れることはなかった。

「非常事態ではないか。」

湛山はこのひとことで突っぱねて、避難してくる被災者を迎え入れたのだった。

その日のうちに三十ほどのテントを張り、町内の役員さんと手分けして、一けん一けんを回って人々を助け出し、救い出しては御用邸に招き入れた。

その夜、湛山を含む七、八人が集まって、各自事情が違うが、御用邸にお世話になっているのだから秩序ちつじょだけは守って、勝手なことをしないようにしなければならぬと話し合いを重ねたり、町のお医者さんには、けが人や病人の世話をお願いしたりと、自治的な組織を作りあげ、御用邸内に避難した人たちのとりまとめ役をかってでた。

余震が続く中、十日間ほどの生活を共にした湛山は、医師を確保し、町役場と協力して、衛生・医療に配慮するだ

*御用邸：皇室の別邸

*バラック：間に合わせに建てた粗末な家屋

けでなく、食物の配給品の分配など細かな部分まで手配した。こうして、臨時避難所を見事に立ち上げていった。その結果、鎌倉町内のどの避難所よりも大きな避難所となった。このあとも湛山は、被災者救済のリーダーとなって、奔走^{ほんそう}していった。

震災後の短い時間に、これだけのことをした湛山の行動力、組織力は、並々ならぬ力といえよう。

避難所が解散した後、湛山は、東洋経済新報社にもどって、震災関連の特集を組み、震災後の緊急^{きんきゅう}対策や復興の方向について休むことなく社説など多くの記事文を書いたのだった。

そして、この大震災のときの細かな記録を後世に残そうと必死になったという。

湛山は、中学校時代に受けた教えを原点に、自らの言動を決めていったのである。

「Be Gentleman 〓紳士たれ」と大島校長先生から、自らの良心に従って生きることの尊さを学び、「学問は、社会に出て、役に立たなければ意味がない。」

ということを胸に刻んでいった湛山であった。

以来、湛山は、いつの日も、人のためになるように生きることを信念として、生涯を貫き、生き抜いたのである。



地雷のない世界から実りの大地へ

東南アジア、インドシナ半島にカンボジアという国があります。カンボジアは雨期には気温三〇度、乾期には四〇度を超えるモンスーン気候です。広大な農地では金色の稲穂が実り、人々は収穫の喜びに胸を躍らせています。小学校では子どもたちが元気に勉強し、ときおり明るい笑い声が聞こえてきます。

しかし、数年前までは、そこは人々が近寄ることすらできない危険地帯でした。カンボジアでは、約二十年間内戦が続き、一九九一年（平成三年）に内戦は終わったものの、土の中にはたくさんの地雷が埋められたままになっていたからです。

「地雷」とは、「地中に埋められた爆弾」で、兵器の一つです。人々

はこの地雷にとっても苦しめられていました。地雷があると気付かずに、その上を歩いたり、チョウチョ型地雷をおもちやと勘違いかんちがしてつかんでしまったりして、その瞬間しゆんかんに爆発ばくはつして子どもたちの足や手首がうばわれてしまったのです。人々は住み慣れた地を離れることもできず、常に危険と隣り合わせの生活を強いられていました。内戦後のカンボジアには茫茫ぼうぼうとたくさんの木が生い茂り、ジャングル化してしまい、地雷原けんげんを元に戻すためには、まずこの木を伐採さいし、そして一つ一つ人間の手作業で、地雷を除去しなければなりません。まさに命がけの作業です。見渡す限りの原野、その中に埋まっている無数の地雷を前に、カンボジアの人々は立ち尽くしかありませんでした。

*地雷が広範囲に埋設された地帯のこと



地雷除去活動の様子

内戦が終わって九年、二〇〇〇年（平成一二年）、その地雷原の前に立つ日本人技術者たちの姿がありました。彼らは、山梨県南アルプス市にある会社の社員で、現地にいる多くの青年に、対人地雷除去機の操縦方法及び技術指導を行っていたのです。青年たちは厳しい基礎訓練に、真剣な眼差^{まなざ}しで取り組んでいました。

その会社と地雷との出会いは一九九四年（平成六年）、社長の雨宮清さんがカンボジアを訪れたときのことでした。訪れた理由は、内戦後の復興には建設機械が役に立ち、需要も多いだろうと考えたからです。雨宮さんは町を歩き、あることが気になりました。町のいたるところに、手や足のない人がたくさんいることです。なぜだろうと思い、雨宮さんがある年老いた女性に尋ねると、

「地雷でひざから下を失いました。私たちは、カンボジアをいい国にしたいと思っています。でも地雷があつては、一向によくありません。あなたは日本人ですよ？どうか私たちを助けてください。この国を助けてください。お願いします。」

女性は、切々と訴えかけてきました。

雨宮さんはその時、ふと亡くなったお母さんの言葉を思い出しました。

「人のためになるような人間になりなさい。」

彼は幼いときから母によくこう言われてきました。

雨宮さんは決意しました。

「地雷を除去する機械を作ろう。」

この時から地雷との戦いは始まったのです。地雷にはどんな種類があるのか、爆弾を除去するためにはどんな技術が

必要なのか、地雷についての知識は全く無く、まさにゼロからのスタートでした。地雷の専門家や関係機関を尋ね歩き、カンボジアに何回も足を運びました。実際に地雷原に行き、現地の人と生活を共にして、地雷について学びました。

「地雷と戦わせてほしい。」

こんな雨宮さんの強い思いが社員の心に響いたのでしよう。一九九五年（平成七年）、社員六名からなる地雷除去機開発プロジェクトチームが結成されました。日中は本業の仕事があるため、除去機の開発は、平日の早朝や深夜、休日に行くしかありませんでした。それでも、雨宮さんの思いに胸を打たれたメンバーたちは、不満も言わず、開発を目指して力を合わせました。

しかし、地雷はとても手強い相手でした。爆発時の温度は八〇〇〜一〇〇〇℃にも及び、何回かその衝撃に合うと除去機のカッターの歯はくだかれてしまうのです。「もう一度、もう一度……」何度も何度も設計図をかき直しては、改良を重ねました。それでも、失敗の連続でした。同時に制作費用は日に日にふくれあがっていききました。

「もうやめよう。これ以上、みんなに迷惑をかけるわけにはいかない。」

雨宮さんは機械の開発を断念しようと考えました。しかし、肩を落とす雨宮さんにみんなの声が聞こえました。

「やめないでください。」社員の声が近くから聞こえる……。

「助けてください。」カンボジアの人たちの声が遠くから聞こえる……。

雨宮さんははっとしました。

「今自分がやらなかったら、だれがカンボジアを救うのだろう。続けなければ……。」

開発に取り組んでから五年という長い月日が経ちました。二〇〇〇年（平成十二年）、ついにカンボジアに对人地雷除去機が搬入され、除去作業が始まりました。まずは信用を得るために、雨宮さん自らが機械を操作し、その安全性を証明することから始めました。それから、現地の青年たちが自分たちの手で機械を操縦できるように指導を行い

ました。機械は次々と木々を伐採していきます。そして手作業の何倍もの早さで、しかも人を傷つけることなく地雷を除去していきます。また、機械は土を耕す機能も果たし、地雷で荒れ果てた土地を農地によりみがえらせていきます。機械の開発には、地雷を取り除くだけではなく、除去後の土地を再生したいという熱い思いも込められていたのです。

こうしてカンボジアの土地は生まれ変わり、そこには学校や病院が建ち、農作物の収穫までできるようになりました。

「オックン！ みなさんはこの地から地雷を取り除いてくれました。そして大地に恵みをもたらしてくれました。私たちの生活を救ってくれた日本のみなさんに感謝します。オックン！ オックン！・・・」

カンボジアの人々の喜びの声があちらこちらから聞こえてきました。

雨宮さんは語ります。

「日本の技術は今、海外にたくさん進出しています。その中で大事なことは、モノづくりは人づくりであるということです。」

「もう離れられませんね。地雷をなくし、人々が笑顔でいられる世界をつくっていくことがわたしの使命ですね。つえについても地雷原へ向かうでしょう。」

地雷のない世界から実りの大地へ……。地雷への挑戦はまだまだ続いています。

*オックン：ありがとう



雨宮清さんとカンボジアの子どもたち

第二章

郷土資料活用例

うちおりの おてだま

(小学校低学年 2-2)

一 ねらい

身近にいる小さい子やお年寄りに温かい心で接し、親切にしようとする心を育てる。

二 資料の特質

・親切は、人と人との温かい結びつきをつくるうえで大切なことであり、円満な社会生活をするうえで、欠くことのできない要素である。また、思いやりは、温かく共感をもつて接しようとする気持ちである。低学年においては、小さな親切は多くみられる。しかし、気分によっては、しなかつたり、友人など特定の人に対しての親切だったりする傾向が多い。そこで、どんな人にも、自然な行為としての思いやりをもつて、親切に接することができるよう意識させたいと考える。

・本資料の中の主人公「わたし」は、足の不自由なおばあさんにおつかりそうになりながらも、隙間から先にバスに乗ってしまう。そして、次の日、お年寄りのお手玉作りの会が、学校で開かれた。そこで、「わたし」は、そのおばあさんと再会するのである。「わたし」は、バスの中の出来事が気になりながらも、おばあさんから、お手玉の作り方や遊び方を教えてもらう。おばあさんは、自分が大

事にしてきた内織りの布で、やさしくお手玉を作ってくれ
る。そんな、おばあさんの心に接することで、「わたし」
は、おばあさんに対して、心から親切な行為をしていくの
である。

・お手玉作りでの「わたし」とおばあさんとの心のふれあい
を通して、ねらいにせまれるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・毎日の生活の中で、小さな親切がどのようになされている
か調べておく。
・お年寄りとの交流が、どのようなときに、どのような形で
行われているか調べておく。

四 展開例

1 おじいちゃんやおばあちゃんといっしょに遊んだり、仕
事をしたたりしたことを話し合う。

2 資料「うちおりの おてだま」を読んで、話し合う。

(1) 待ちきれなくて、おばあちゃんの腕の下から、サッと
バスに乗ってしまった「わたし」は、どんな気持ちだっ
たでしょう。

・ おばあさん、乗るのが遅いなあ。

・ ぐずぐずしていて、いやだなあ。早く乗りたいのに。

(2) お手玉作りのとき、再びおばあさんに出会った「わた
し」は、どんな気持ちだったのでしょうか。

・ わたしがしたことを怒っているかもしれないなあ。

・ いっしょに作るなんて、いやだなあ。教えてくれない

かもしれないな。

・きのう、足は大丈夫だったかな。

(3) 内織りの布を丁寧に出し、その布を使って、お手玉を作っているおばあちゃんを、「わたし」は、どんな気持ちで見ているのでしょうか。

・この布は、おばあちゃんにとって大事なものなんだろうな。

・おばあちゃんって、すごいなあ。

(4) おばあちゃんといっしょに、お手玉をする「わたし」は、どんなことを考えていたでしょう。

・なんて、やさしいおばあちゃんなんだろう。私たちのために、大事にしていた内織りの布を持ってきてくれるなんて。

・こんな、素晴らしい物を作って、すごいなあ。

・おばあちゃんの心は、とても温い感じがするな。それなのに、きのう、わたしがしてしまったことは……。

・おばあちゃんに、きのうのことをあやまらなくてはいけないな。なにか、してあげられることは、ないかな。

(5) 「わたし」は、どんな気持ちでおばあちゃんの手をとってあげたのでしょうか。

・おばあちゃん、ごめんね。足、大丈夫。

・ゆっくり、階段を下りてね。わたしが手をとってあげるから。本当にありがとう。楽しかったよ。

3 お年寄りに親切にしてあげたことがあるか話し合う。

4 教師の体験談や、良寛さんと子供たちとの毬遊び歌の紹介を聞くことよって、親切についてまとめる。

五 指導上の留意点

・ペープサート、一枚絵などを用いて、話を進めるようにする。

・自分のことしか考えていない「わたし」の気持ちを把握させる。

・内織りの布は、おばあさんにとって、大事な宝であることに気付くとともに、尊敬の気持ちが芽生えてくることを押さえる。

・おばあさんのやさしさを通して、「わたし」の気持ちが変わっていくことに気付かせていく。

六 評価の観点

・資料の中から、お年寄りに対する温かい心や思いやりが大切であると感じている。

七 事後指導の工夫

・家族や地域社会とも連携を図りながら、お年寄りや小さな子を思いやり、親切にすることの素晴らしさに気付かせていくとともに、老人など社会人との共同学習のよさにも気付かせていく。

ぶどうの つぶさん こんにちは

(小学校低学年 2-1)

一 ねらい

恥ずかしがらずに、どんなときにも進んで気持ちよいあいさつをしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ はきはきとした気持ちのよい返事やあいさつは、人と人をつなぎ付け、お互いの心を明るくさせてくれる。それは、人間生活の基本的な行為であり、できるだけ早い時期に身に付けさせたい習慣である。家庭や学校という小さな枠にとどまらずに、広く地域の人々とのあいさつも大切にしたい。さらに、初めて出会う人にも気持ちのよいあいさつができるように、具体的な生活の場を設定して時に応じたあいさつや言葉遣いについて考えさせるなかで人と人とのあたたかい心のつながりをつくっていききたい。

・ 本資料は、「あや」が主人公である。ぶどう狩りの季節、ぶどう園には大勢の観光客が訪れる。郷土色あふれる朝露に光るぶどうのイメージは、子どもの心を豊かにさせるだろう。「あや」は、初めてのお手伝いでぶどうのとり入れと販売を体験する。そして、大勢のお客さんにあいさつができるかどうか不安そうなあやが描かれている。しかし、思いきって「こんにちは。」のあいさつをすると、「ぶどう

も元気にみえるわ。」とほめられる。こうしたあいさつをしたときの気持ちやあいさつをされたときの気持ちを考えることを通して、あいさつをするときわやかな気持ちになることや、自分から進んであいさつをすることで、あいさつの輪が広がっていくことに気付かせようとする内容である。

・ 恥ずかしがりやの「あや」が、初めてぶどう園でのお手伝いをし、父親に励まされ、思いきってお客さんにあいさつをした後どんな気持ちになったかを考えることによつて、ねらいにせまれるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・ 家庭とも連携をとりながら、あいさつの体験を多くもたせる。

・ あいさつにはどのようなものがあるか、毎日どのようなあいさつを、いつ、どんなときに、しているかを調べてみるなどして、あいさつに対して関心を高めておく。

四 展開例

1 今までに、どんなあいさつをしたことがあるかを発表する。

2 資料「ぶどうの つぶさん こんにちは」を読んで話し合う。

(1) お父さんのお手伝いをしている「あやちゃん」は、どんな気持ちだったでしょう。

・ 初めてのお手伝いだからがんばろう。

(2) お父さんに恥ずかしがりやと言われた「あやちゃん」は、どんな気持ちになったでしょう。

・恥ずかしくて嫌だな。

・恥ずかしいけれどがんばろう。

(3) 観光バスからおりてくるお客さんの顔を見たあやちゃん、どんな気持ちになったでしょう。

・大勢の人がいて恥ずかしい。 ・胸がどきどきする。

・嫌だな。 ・元気よくあいさつができるか心配。

(4) 「こんにちは。いらっしやいませ。」と言ったとき、

「あやちゃん」は、どんな気持ちになったでしょう。

・気持ちがつつきりする。

・恥ずかしいけれどもうれしい。

・思いきって言ってよかった。

(5) 「こんにちは」とぶどうにあいさつしたのは、「あやちゃん」がどんな気持ちになっていたからでしょう。

・元気なあいさつができてうれしい。

・いい気持ちになる。

3 あいさつをしたりあいさつをされたりして、気持ちよくなった体験について話し合う。

4 元気よく気持ちのよいあいさつをしている児童の話をする。

五 指導上の留意点及び工夫

- ・場面絵やペープサートを使ってぶどう園の様子やぶどうの取入れ、登場人物について話を進める。

・児童が観光客と「あや」になって役割演技をし、進んであいさつをすることの気持ちよさを感じとれるようにする。

・展開例2の(5)では、お客さんが喜んでる様子から、あいさつの輪の広がりを感じていることをとらえられるようにする。

・自分たちのくらしの中でも、あいさつの輪がひろがるように意識付けをしていくとともに、あいさつがよくできている児童を紹介し賞賛する。

六 評価の観点

・資料の主人公「あや」の気持ちを探る中で、恥ずかしがらずに、どんな時にもあいさつをすることの気持ちよさに共感している。

七 事後指導の工夫

・授業を通して子供のよさを見直し、学級活動の指導計画などを振り返って、時と場に応じたあいさつの仕方の指導を行う。

・家庭や地域とも連携を取りながら学校全体としてのあいさつ運動の中で、あいさつをすることの気持ちよさをしっかりと体得させる。

つみかさねの たちゅうさん

(小学校低学年 1—1)

一 ねらい

身の回りを整え、物を大切に使うとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 整理整とんをすると気持ちがよいが、ただきれいに片付ければよいということではない。物を大切に扱う心が根底にあつて、それらの物が必要ときにすぐ取り出して活用できるようにしておくことが必要である。特に情報化社会、物の豊富な現代社会において整理整とんを習慣付けることは重要である。子供たちは、学校生活に慣れるに従って交友関係が深まり、日常の行動が活発になるにつれて身の回りの乱雑さに気が付かなかつたり、学習用具の扱い方が入学当初と比べて乱れがちである。そこで、低学年のうち自立の基本的なこととして、自分の身の回りの物を大切に持ち物や使ったものは、自分でしっかりと整理整とんしていく態度を養いたい。

・ 本資料の主人公「わたし」は、電車で東京タワーに行く途中、おばあちゃんから鶴の折り方を教えてもらうが、上手にできなくてくしゃくしゃに丸めてしまう。しかし、東京タワーを設計した人が、「世界の内藤」とまで言われるようになった山梨県の出身者であることを聞いて驚く。そし

て、「わたし」は、内藤多仲が日頃から物を大切にし、きちんと整とんをしていた人であることを知って、電車の中で自分がした行為を反省するという内容である。
・ 物を大切に扱う内藤多仲の生活態度に共感することを通して、日常生活を振り返り、ねらいにせまれるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・ 家庭と連絡を取りながら、持ち物には全て名前を書くようをお願いする。

・ 自分の生活を振り返って、整理整とんができていたり物を大切に使用していることについて作文に書かせてみる。

四 展開例

1 整理整とんについて、日常生活の様子を発表する。

2 資料「つみかさねの たちゅうさん」を読んで話し合う。

(1) 折紙をくしゃくしゃに丸めたのは、どんな気持ちがあつたからでしょう。

・ つるの形が上手に作れなかったから。

・ いつもそうしているから。

(2) 東京タワーを設計した人が山梨県の人だと聞いて、

「わたし」は、どんな気持ちになったでしょう。

・ 山梨県の人が設計したなんてすごいな。

・ びっくりした。

(3) 内藤多仲さんの物の扱い方を私はどんな気持ちで聞いていたでしょう。

・ 広告やカレンダーの裏に字を書いて覚えてたなんて知らないな。

・ 広告でノートを作り、きちんと積み重ねておいて使うのは、すごいおもいつきだ。

・ きちんと整とんをしていてえらい。

(4) 多仲さんの胸像を見ながら恥ずかしくなった「わたし」は何を考えたでしょう。

・ 折り紙をくしゃくしゃにして悪かったな。これからは大切にしよう。

・ 多仲さんは広告をノートにしてえらいな。

3 身の回りをきちんとした経験やその時の気持ち、改めてみたいと思ったことを発表する。

4 物を大切にしたり、整とんがよくできている児童の話をする。

五 指導上の留意点及び工夫

・ 東京タワーについて説明してから資料の提示をする。

・ 「紙を丸めて捨てる」という行為を動作化させ、ふだん何気なくしているごみ捨てるの様子を振り返らせる。また、紙を丸めた「わたし」の気持ちと日ごろの子供たちの様子を重ね合わせるような話し合いをさせて、ふだんの生活の中の無自覚な行動に気付かせる。

・ 「世界の内藤」といわれるまでになった人の日ごろの心づかいについて知り、尊敬の念とともに基本的な生活習慣定着へのはずみとしたい。

・ 多仲さんの物の扱い方を通して自分のことを反省させるだけでなく、子供たちが整理整とんできている場面を見つけ、一人一人に賞賛の手紙を渡すのもよい。または、家庭で整とんができている児童の家族からの手紙を紹介してもよい。

よい。

六 評価の観点

・ 資料の登場人物の様子を見ていく中で、物を大切にし、身の回りを整えて生活しようという思いを深めている。

・ 毎日の生活の中で、自分の持ち物について反省することができたか。

七 事後指導の工夫

・ 家庭とも連携を取りながら、日々の生活の中で整とんをしたときの気持ちよさを体得させる。

・ 朝の会や帰りの会で、物を大切にしたり整とんをしたりしたことを発表し合う。

八 その他

・ 次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第6集』（青少年のための山梨県民会議）

清太いも

(小学校低学年 3-1(1))

一 ねらい

動植物すべてのものに生命があることに気付かせ、命あるものを大切に育てる。

二 資料の特質

・生命を尊ぶ心とは、かけがえない命をいとおしみ、自らも、多くの生命によって生かされていることに素直にこたえる心ととらえることができる。低学年においては、どんな小さい生き物や植物にも、生きようとするとする営みがあることに気付かせ、そこから、自分の生命を大切にすることを教えていきたいと考える。

・本資料は、代官であった中井清太夫により、山梨の地へ取り入れられたイモが、飢饉を救ったという話を中心に展開される。どんな小さいジャガイモ一つにも生命があり、そのイモによつて、多くの人々が飢えから救われた。そのような話を、おじいちゃんから聞くことで、命あるものを大切にしていかなければいけないと、主人公の「ひろくん」は気付いていくのである。

・中井清太夫が、人々を飢えから守るために取り入れたジャガイモの話をもとに、どんな植物にも生命があることに気付かせ、それが、自分たちの生命を大切にすることにもつ

三 事前指導の工夫

ながっていくのだということにせまっていきたい。
・植物の世話をうまく育てることができたり、失敗してしまったりしたことなどを思い出させておく。
・命あるものの大切さについて気付かせておく。

四 展開例

1 植物を育てて、どのように世話をすることができたかを話し合う。

(1) うまく育てることができたのはどんなことですか。
(2) 失敗して、うまく育てられなかったことがありますか。

2 資料「清太いも」を読んで話し合う。

(1) ゴルフ遊びをしている「ひろくん」は、どんな気持ちでしょう。

・わあ、楽しいな。ゴルフボールでなくてもおもしろいぞ。

・はいった。はいった。イモボールは楽しいぞ。

・たくさんあるから、どんどんしよう。

(2) 「まった。いもは生きている。」と言ったときのおじいちゃんの気持ちはどんなでしょう。

・食べられるものを粗末にするでないぞ。

・イモがかわいそうだろう。

・イモにも命があるんだぞ。

(3) 「ひろくん」は、清太夫さんのよろこぶ様子をどんな

気持ちで書いていたでしょう。

- ・ やったあ。甲斐の国でも、イモがとれたぞ。
- ・ あつ、ついでたぞ。これが、ジャガイモか。
- ・ 大切に育ててきたかいがあつたぞ。

(4) おじいちゃんから、話を聞き終わった後、イモを片付けながら、「ひろくん」は、どんなことを考えていたのでしょうか。

- ・ ジャガイモ一つにも命があるんだな。
- ・ ジャガイモは、人々の命を救ってくれた大切なものだったんだ。遊びになんか絶対使えないや。
- ・ 一つ一つが、ほくたちの体にはいり、栄養となつていく大切なものだ。

3 今までに、動植物にどのように接してきたかを振り返り、生き物を大事にしてきたことを発表する。

4 教師の体験談をもとに、命を大切にしようとする心についてまとめる。

五 指導上の留意点及び工夫

- ・ ペープサート、一枚絵などを用いて、話を進めるようにする。
- ・ 清太夫さんが、苦勞して世話をした結果から、甲斐の国でジャガイモが作れるようになり、そのことが、飢えて苦しむ人々を救ったという点をしっかりと把握させる。
- ・ 身近な植物の栽培、世話などの体験を思い出させ、価値への導入を図る。

六 評価の観点

- ・ 資料を通して、植物にも生命があることに気づき、大切にしていこうとする心情を深めている。

七 事後指導の工夫

- ・ 学級活動や生活科の時間とも関連付け、動植物に対し、温かい気持ちで接し世話をしていくことができるような指導を行う。

八 その他

- ・ 自分や友達の命を大切にしていこうような指導を行う。
- ・ 次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第11集』（青少年のための山梨県民会議）

よさぶろうさんの みどり

小学校低学年 〇 4―(1)

3―(2)

一 ねらい

みんなが使っているものには、大勢の人の努力があることを知り、進んで大切に使用おうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・みんなで使うものを大切にし、人に迷惑をかけないようにすることは、社会生活をしていく上で基本的な生活態度である。子供たちは、公共物や公共の場を大切にしなければならぬことは知っている。しかし、公共物が、みんなの力によって維持されていることなどに気付いていない子供が多い。そこで、公共物や公共の場の多くは、先人たちの努力によって、支えられてきていることに気付かせ、進んで大切にしようとする態度を育てていきたい。

・主人公は、奥山にハイキングに行き、一緒に行った父から望月与三郎さんについての話を聞く。荒れ果てた奥山に村の人たちと協力して苗木を植え、緑の山に変えた与三郎さんの業績に感動し、無意識に引き抜いた幼い木を心を込めて植え直すという話である。公共への関心の薄かった主人公が、村の人たちのために献身的に尽くす与三郎さんの話を聞き、「みんなのため」ということに目覚め、進んで奥

三 事前指導の工夫

山を大切にしようと考えようになったという話である。
・村のために半生を捧げた与三郎さんの話に感動し、みんなの奥山を大切にしようと考えようになった主人公に共感させることによってねらいにせまりたい。

・みんなで使う場所には、どんなところがあるか、どんな使い方をしているかなどについて話し合い、公共物や公共の場所に対する関心を高めておく。

・地域の先人たちの業績について調べさせるなどして、みんなのために尽くした人々を思う心を耕しておく。

四 展開例

1 みんなで使う場所には、どんな所があり、どんな使い方をしているか発表し合う。

2 資料「よさぶろうさんのみどり」を読んで話し合う。

(1) 「ぼく」は、お父さんが与三郎さんの話を始めたばかりのころ、与三郎さんの話をどんな気持ちで聞いていたでしょう。

・なあんだ、そんな話か。つまらないな。

・聞いても、聞かなくても、どっちでもいい話だ。

(2) 木を植えることに反対の人が多かったことを知った

「ぼく」は、どんな気持ちだったでしょう。

・たいへんだ。どうなったかな。

・みんな自分のことばかり考えているんだ。

・与三郎さんは、みんなのことを考えて一生懸命なの

に、みんな何を言っているんだ。

(3) 紙くずも落ちていないきれいな草原を見て、「ぼく」はどんなことを思ったでしょう。

・きれいだ。気持ちがいいな。

・与三郎さんたちのプレゼントだ。みんなで大事にしているんだ。

・ぼくもずっとこの山を大切にしていこう。

(4) 小さな木を植え直したのは、どんな気持ちからでしょう。

・みんなの山だ。ただ一本の木も大切にしよう。

・与三郎さんがプレゼントしてくれた山の緑をぼくも大切にしよう。

(5) 「ぼく」は、村のために役立っている木のことを与三郎さんにどう教えてあげるだろうと思いますか。

・山が緑で気持ちいいですよ。公園になって、ぼくたちも使っているんですよ。

・とても良い材木になって、学校を建てるのに使ったり、公民館を建てるのに使ったんですよ。

3 みんなで使う場所は、どういう気持ちで使うか発表する。

4 教師の体験談を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・登場人物や時代的背景を説明してから、資料の提示をする。

・与三郎さんの社会的奉仕精神に心打たれ、「みんなのために」と考えて山の緑を大切にしようとする主人公の変容に

気付けさせる。

六 評価の観点

・みんなで使っているものには、大勢の人の努力があることに気付くとともに、大切に使うとする気持ちをもつていく。

七 事後指導の工夫

・日々の生活の中でみんなで使う物や使う場所を大切に使うときの心地よさを体得させる。

・すんでいる町や村に、どんな公共施設があるか関心をもつ。

・朝の会や帰りの会で、公共物や公共の場所を大切にしようという体験を発表し合う。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第6集』(青少年のための山梨県民会議)

おかあさんの なみだ

(小学校低学年 4—3)

一 ねらい

家族は、温かい心で結ばれていることに気付き、仲良く楽しい家庭をつくろうとする心を育てる。

二 資料の特質

- ・日々の生活は、人々の支え合いや助け合いで成り立っている。家庭における家族の生活も同様である。互いの立場を認め、思いやりのある行動によって、楽しい家庭は築かれる。優しい行為が人の心を育て、温かい家庭の雰囲気をつくり出すのである。子供たちは、家庭の中で自分が可愛がられるのは、当たり前と考えている場合が多い。そこで、家庭の中での家族の役割や協力する姿、苦労の様子などに目を向けさせ、自分の毎日を見直させることが望まれる。
- ・本資料は、主人公である幼い「きみよ」の心に染みた母の愛情が、やがて自分の家族の支えとなることが、基底に流れている。ある日、「きみよ」の母は、病気で倒れる。母のおなかには、赤ちゃんがいる。父と「きみよ」の看病のお陰で、翌朝母は元気を取り戻す。母の目には、涙が光っていた。大人になって、自分のおなかに子どものできた「きみよ」は、母の流した涙の真意が分かるのであった。
- ・母が病気になる時の家族の様子や気持ちを考えることを

通して、また母の涙の意味を考えることによって、ねらいにせまりたい。

三 事前指導の工夫

- ・家族のことをテーマにした本を読み聞かせるなどして、家庭や家族を思う心を耕しておく。
- ・家族っていいなと思ったことはないか、それはどんな時か話し合うなどして、家族に対する関心を高めておく。

四 展開例

- 1 お父さんやお母さんのことをどう思うか発表し合う。
- 2 資料「おかあさんの なみだ」を読んで話し合う。
 - (1) お母さんのおなかに触りながら、きみよさんはどんなことを考えたでしょう。
 - ・妹かな、弟かな。生まれてくるのが待ちどおしいな。
 - ・生まれてきたら、仲良くしよう。
 - ・赤ちゃん、元気かな。もう、どのくらい大きいのかな。
 - ・早く生まれてこないかな。
 - (2) 「きみよさん」は、どんな気持ちでお父さんを手伝ったり、お医者様を迎えに行ったお父さんの帰りを待っていたでしょうか。
 - ・お父さん、早く帰ってきてくるといいな。
 - ・お父さん疲れているのにたいへんだ。わたしも手伝おう。
 - ・疲れているのに、よく頑張ってくれる。ありがたい。
 - ・お父さん、頼りになるな。

・「きみよさん」やお母さんのことを大切に思っているんだ。

・家族を愛しているんだ。

・家族だから、助け合っているんだ。

(3) お母さんが、「ありがとう。」と言って、目に浮かべていた涙を、「きみよさん」は、どんな気持ちで見つめていたでしょう。

・お母さん、まだ具合が悪いの。

・お母さん、嬉しくて涙が出たの。

・お母さんが早く元気になってよかったな。一生懸命看病してあげたので嬉しかったんだ。

(4) ずっと前、お母さんの涙を見たときには、気付かなかったけれども、自分に赤ちゃんができてから気が付いたことは、どんなことでしょう。

・おなかの赤ちゃんが元気だったので、嬉しくてお母さんは、涙を出したんだ。

・お母さんは、心配していたおなかの赤ちゃんが元気だったので、ほっと安心して涙を流したんだ。

3 家族の人たちとどんなふうに助け合っているか発表しよう。

4 教師の話聞く。

・家族の一員として、よく努力している子どもの事例を話す。

五 指導上の留意点及び工夫

・「きみよ」の子供のころと大人になってからの話とが合わせてあり、場面設定が複雑なので、そのことを理解させてから、資料の内容を考えさせるようにする。場面絵などを有効に使う。

・児童の家族構成には、十分配慮する。

・自分や周囲の人が、どんな時に涙を流したかを思い出させることによって、「きみよ」の母の涙の意味を考えさせる。

六 評価の観点

・家族は、お互いに支え合ったり、助け合ったりしていることに気付くとともに、家族みんなと仲良くして、楽しい家庭をつくろうという気持ちを深めている。

七 事後指導の工夫

・国語科の作文で、父母や祖父母に感謝の手紙を書く。

・図書館で、家庭の温かさをテーマにした話の本を集める。

八 その他

・資料の授業中での補説には、『愛育のあゆみ』（山梨県白根町母子愛育会）が参考になる。

のうぞういけの あかうし

(小学校低学年 4—1)

一 ねらい

みんなで使うものを大切にし、約束やきまりを進んで守ろうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・本資料は、貧しい暮らしをしていた村人たちを助けてくれた「赤牛」が、心ない一人の村人が約束を守らなかったために、どこかに行ってしまう、村人たちは大変がっかりしたという、南アルプス市に伝わる民話をもとにした話である。

・みんなが互いに約束を守っていたのに、たろうが「自分一人ぐらい」という思いで約束を破ったことで、村人たちに迷惑をかけてしまった。たろうの行動や心情を考えることよって、ねらいに迫ることができる。

・低学年の時期には、自分の都合を優先するあまり、集団や社会の秩序を維持することへの関心が薄れがちである。きまりを守ることに窮屈さを感じることさえある。きまりを守るためには、周りの人に対する思いやりの心も必要である。みんなで使うものを大切にし、約束や決まりを守ることとの大切さに気付かせていきたい。

三 展開例

1 資料について興味をもてるようにする。

・能蔵池の写真を大きくしたものを提示する。

2 資料「のうぞういけのあかうし」を読んで考える。

(1) 結婚式の朝、きれいな食器を貸してもらったさつきは、どんな気持ちだったでしょう。

・昨日私が困ったと言っていたのを、誰か聞いていたのかなあ。

・立派な食器でお客さんにご飯を出せてうれしい。
・誰がこんなきれいな食器を貸してくれたのかな。
・使い終わったら、きれいに洗って返さなければ。

(2) たろうが食器を返さなかったのは、どんな気持ちだったからでしょう。

・自分一人ぐらい返さなくて大丈夫だ。
・いちいち返すのは面倒だ。
・いいちゃわんだから返したくないな。

(3) 赤牛様はどうして能蔵池から返さなくなってしまったのでしょうか。

・約束を守らないから、怒ってしまった。
・食器を返さないから、いやになってしまった。
・もうこの池にはいたくないと思った。

(4) たろうにどんなことを言っておげますか。
・みんなが借りるものだから、返さないとだめだよ。
・返さないから、みんなが困っているんだよ。

・面倒だからって、借りたものを返さないのはいけないよ。

・これからは、一緒にきまりを守っていこう。

3 ころのノート「みんなで楽しく気もちよく」(72〜75ページ)をもとに、自分たちみんなで使うものや場所の約束や決まりについてふりかえる。

4 きまりを守って、みんなのためにも、自分のためにもよかつたと思うことを発表する。

四 指導上の留意点及び工夫

・困った時にいつも食器を貸してくれる赤牛様に対する気持ちを考えさせる。

・展開例2―(3)は、中心発問であるので、期待する児童の姿が見られなかった場合には「なぜ、食器を貸してくれなくなったのでしょうか。」などと問いかけ、ねらいに迫れるようにする。

・展開例の4では、子どもたちが考える「きまり」とは、自分が注意されている個人的なこと(忘れ物・整とん・けんかなど)であることが予想されるので、集団生活にかかわるきまりや秩序を維持することについても考えさせたい。

・本文中では「きまり」「約束」といった言葉は使っていないが、公德心を育てるような話し合いになるようにしたい。

・たろうへの声かけの場面では、説論する内容が予想されるが、共感しながらともに生きていこうとする意見があれば、取り上げて前者と比較しながら違いを考えさせたい。

五 評価の観点

・みんなで使うものを大切にし、約束やきまりを進んで守ろうとする思いを深めている。

・日ごろの自分の生活を振り返り、きまりを守って生活することの大切さを感じている。

六 事後指導の工夫

・自分のわがままな行動は、秩序を乱すことや、集団の中でみんなのことを考えながら行動できるようにすることの大切さがわかるような指導を継続的に行う。

・どんな些細な行動でも、約束やきまりを守っていると思われる場面があれば認めるようにする。

七 その他

・次の資料を参考にした。

八田村の昔ばなし『能蔵池の赤牛』

八田村(現南アルプス市)教育委員会

がつこうの たんじょうび

（小学校低学年 〇 4 | (4)
4 | (5)

一 ねらい

郷土に親しみ、学校について知り、学級や学校の生活を大切にしようとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

・富士川町立増穂小学校の敷地内に立つ「太鼓堂（富士川町民俗資料館）」は、明治九年増穂村春米に「春米学校」として開校した。山梨県令藤村紫朗が奨励した「藤村式建築」である。最上階の六角の部分に、授業の開始や終了を伝えた太鼓をつるしたことから、太鼓堂と呼ばれるようになった。その後、現在の地へ移設され「増穂尋常小学校」として明治二十一年五月一日に開校する。その五月一日が増穂小学校の創立記念日である。

・人にはみんな誕生日があるように、学校にも創立記念日という誕生日がある。本資料は、学校創立記念日をまえに、増穂小学校の校庭に建つ民俗資料館（建物は旧春米学校および旧増穂尋常小学校）館長（たいこどうのおじさん）が、学校の創立について語るのを聞き、学校に興味と愛着をもつ様子を資料化したものである。

・学校がなかったころ、未来を担う子どもたちに教育の機会

を念願し学校の設立に努力した地域の人々や、学びたいと願った子どもたちの思いに目を向けることを通して、郷土の人々が大切にしてきた学校を、自分もまた大切になりたいという思いが培われることを願っている。

三 展開例

1 自分や家族の誕生日の楽しい経験について話し合う。

2 資料「がつこうのたんじょうび」を読んで話し合う。

(1) 学校に行けない子どもたちはどんな気もちだったでしょう。

・学校に行って、勉強をしたいなあ。

・休み時間になったら、みんなと遊びたいなあ。

・遠足に行って、みんなと遊んだりお弁当を食べたりしたいなあ。

・給食も食べたいなあ。

(2) お寺をかりて勉強をしていた時、村の人たちは、どんなことを考えていたでしょう。

・いつまでもお寺を借りているのは悪いなあ。

・もっと広いところで、勉強をさせたい。

・新しい学校で、新しい勉強をさせたい。

・うちの仕事がたくさんあるから、子どもにも手伝ってもらわないと困るけど、学校があったら、勉強させたい。

(3) 新しい学校ができて、子どもたちはどんな気もちになりましたか。

・新しい学校ができて、うれしいなあ。

・みんなと一緒に勉強ができてうれしいなあ。
・休み時間にはみんなと遊びたいな。

・いろいろなことを覚えたいな。

(4) 休みの次の朝、あやさんは、先生に、どんなことを話したと思いますか。

・昨日、夢で太鼓堂に「おめでとう。」と「ありがとう。」と言ってあげたよ。

・太鼓堂も子どもたちが、お掃除していたんだって。

・太鼓堂を大切にしてくれて嬉しかったって。

・昔の子どもも、勉強をがんばっていたんだって。

・昔の子どもたちは、どんな遊びをしたのかなあ。遊具があったのかなあ。

・わたしも、学校のお掃除をがんばろう。

3 自分の学校生活の中で楽しかったことや、学校の好きなところを発表する。

4 教師や保護者の子どもたちの学校の学校生活や学校にまつわる思い出を紹介し、子どもたちの学校への愛着や学校生活を大切にしようとする気持ちへつなげる。

四 指導上の留意点及び工夫

・展開例2―(1)では、当時、学校に行けたのは一部の子どもで、ほとんどの子どもたちは家庭での労働力として働き、学校へは行けなかったことに触れる。そして貧しい生活の中でも、子どもたちに教育を受けさせたいと願った地域の人々の思いにつなげる。

・展開例2―(4)では、夢の中で太鼓堂に語りかけたかったこ

とを、考えさせたい。担任の教師に語る設定であるので、今の学校への思いも含めて発言させたい。

4では、学校にかかわった人たちの学校に関する温かい思い出や、大切に守られてきたことなどを紹介し、どの学校も先人の努力で守られてきたということに気付かせるようにする。

五 評価の観点

・自分の学校のことを知り、学級や学校の生活を大切にしようとする気持ちを深めている。

六 事後指導の工夫

・生活科などの学習活動を通して、学校の施設や設備、かわる人々に関心をもたせる。

・毎日の生活や清掃活動などを通して、学校の施設や設備を大切に扱うようにする。

七 その他

・次の資料を参考にした。

富士川町民俗資料館パンフレット

・「藤村式建築」は、春米学校のほか、藤村記念館(旧睦沢学校・甲府市)、牧丘郷土文化館(旧室伏学校・山梨市)、須玉町歴史資料館(旧津金学校・北杜市)、尾県郷土資料館(旧尾県学校・都留市)がある。

・学校の建設にあたっては、県からの費用の負担はなく、全てが地元の資金でまかなわれた。春米学校の場合は、土地も含めて、小林小太郎氏が多くの私財を投じた。

五平どんのなみだ

(小学校中学年 1―(4))

一 ねらい

よく考えて行動し、あやまちは素直に改めようとする心情を育てる。

二 資料の特質

- ・人間はあやまちに気付いても、なかなか改めることは出来ない。そこで、あやまちは改めた後のさわやかな心情に着目し、あやまちはすなおに改めることを考えさせたい。
- ・本資料では、五平どんの立場に立つよう工夫した。そして、自分本意の心情や、自分のあやまちに気付くことや、あやまちはすなおに改めようとする心情の高まりについて、郷土の民話の明るい調子のさわやかさを活用していきたい。
- ・五平どんの心情のゆれ、そして高まりへと追体験をさせる方策として、心情マーク、ふき出し絵のワークシート、役割演技等を活用すれば、一層心に深くとどめられるであろう。

三 事前指導の工夫

- ・水不足で苦労した話などを紹介したり、読むことをすすめてたりしておく。
- ・自分本位の行いをした内容の作文・記事などを用意しておく。

- ・自分のあやまちは改め、さわやかな心情になった内容の作文や記事などを用意しておく。

四 展開例

- 1 自分さえよければと思つてしまったことはないか考える。
- 2 資料「五平どんのなみだ」を読んで話し合う。
 - (1) 五平どんは、月のない夜、水の番をしているうちに、心の中にどのような考えが浮かんできて、心の中でなんとつぶやいたでしょう。
 - ・自分の田にだけ水を入れたい。
 - ・少しだけならよいだろう。
- (2) となりの田に入る水を止め、自分の田にだけ水を入れた時、五平どんはなんと云つたでしょう。
 - ・自分の田のいねがよく実るぞ。(ワークシートに書く)
 - ・食べ物心配しなくてよくなる。
- (3) 五平どんはなんと云いながら男の子をくわでなぐりつけたでしょう。
 - ・じゃまするな。
- (4) お地ぞう様の鼻が欠けているのを見た五平どんは、お地ぞう様になんと云つたでしょう。
 - ・お地ぞうさまでしたか。私は自分勝手でした。
- (5) お地ぞう様がいつものやさしい目に変つた時、五平どんはお地ぞう様になんと云つたでしょう。
 - ・私は自分のことばかり考えていました。(ワークシートに書く)

3 村人にあやまった五平どんについて話し合う。

(1) 村人は、五平どんに言ったでしよう。

・よくあやまちを改めたね。(役割演技を取り入れる)

4 あやまちを改め、さわやかな気持ちになった内容の話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)では、心の迷いに視点を当てる。そして両方の心にゆれ動くようすを、心情マークを使用してみる。

・展開例2の(2)では、人間の心の奥底にひそむ、自分本位の心情に視点を当てる。それに気付かせる方策として、ワークシートのふき出しに書く方法を試みる。

・展開例2の(5)では、あやまちに気付き改めようとする心情に視点を当てる。その方策として、ワークシートに書く方法を試みる。

・展開例4では、教師の体験や記事などを活用する。また、一人か二人に感想を聞き、教師も共感していることを伝えて終末としたい。

・さし絵を利用し、紙しばいをつくり、授業に使うのもよい。

六 評価の観点

・あやまちを改めた後のさわやかな気持ちに気付くとともに、自分に素直に生活しようとする思いを深めている。

七 事後指導の工夫

・五平どんの絵をしおりに作り、児童にあげる。そのしおり

を家族で見ながら、学習のようすを話し合うようにすすめる。

・学級だよりで、体験例を紹介する。

・学級会でも時々話題とする。

・水資源や節水について認識を深めるようにする。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『鼻かけ地ぞう』(豊富小学校の資料)

電車の中のじやういふ

小学校中学年 〇 2 | (2)

1 | (3)

一 ねらい

思いやりの心をもって生活し、困っている人には親切にしようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・現代社会をみてみると、相手が困っていても気付かない、または何もしようとしない状況がしばしばある。児童の生活の中にも、自分さえよければよいという考えが見受けられることがある。自分が困ったときのことを考えさせたり、なるべく身近な問題から考えさせたりすることによる、児童に思いやりの心について実感させたい。

・本資料の「わたし」は、富士山の近くに住み富士山を誇りに思っている。ある日電車の中で富士登山帰りの外国人に出会う。とても疲れているようなので席をかわってあげたいが、なかなか言いだせない。しかしその人が足元をふらつかせ倒れかけたとき、「わたし」はとっさに席を立っていた。嬉しそうなその人を見て、「わたし」には電車の窓から見える富士山がいつもより美しく見えた。ここに視点をあてて活用したい。

・主人公の心の変容に焦点をあてていくと共に、外国人の心

情にも気付かせることによってねらいに迫ることができると考える。

三 事前指導の工夫

・自分が困ったとき誰かに親切にしてもらった経験をどのくらいの子供がもっているか、調べておく。
・父母や地域の人たちの中に、児童の思いやりのある行動にふれた人がいたら、内容等詳しくきいておく。

四 展開例

1 困っていたときに、親切にしてもらった経験を発表し合う。

2 資料「電車の中の できごと」を読んで話し合う。

(1) 富士山にあいさつした「わたし」の気持ちについて、考えましよう。

(2) 「わたし」がなかなか席をゆずれなかったのは、どんな気持ちがあったからでしょう。

・ はずかしいから。

・ 英語が話せないから。

・ 勇気がないから。

(3) 席をゆずれない私はどんな気持ちでまわりの人を見ていたでしょう。

・ 話ができなくて困っているのかな。

・ 私と同じようにはずかしいのかな。

・ だれかゆずればいいのに。

(4) グラッと倒れかけたのを見て、とっさに席を立ったの

はどんな気持ちになったからでしょう。

・見ていられなくなつたから。

・かわいそうになつたから。

・危いから。

(5) 富士山がいつもより大きく見えたのは私がどんな気持ちだつたからでしょう。

3 自分の体験から、困っている人を助けてあげたことを出し合い、話し合う。

4 地域の人々から寄せられた友達の思いやりのある行動について、話をきく。

五 指導上の留意点及び工夫

・思いやりをもって親切にする行動を、話としてとらえるだけでなく、身近なこととしてとらえさせることが大切である。

・展開例2の(3)では正しいことを行うには勇気が必要なこともふれたい。

・展開例2の(5)では、ゆずられた方にとつてもよい気持ちのものであることもおさえない。

・外国の方との交流にかかわる話題は積極的にとり上げていく。

六 評価の観点

・困っている人に対して思いやりをもって接し、みんなが気持ちよく過ごせるようにしようとする気持ちが深まっている。

七 事後指導の工夫

・日常生活の中で、思いやりのある行動がみられた場合、帰りの会や学級会で発表し、認め合う場をつくる。

・家庭や地域社会とも連携を図りながら、思いやりのある行動を奨励していく。

二人のそう吉

(小学校 中学年 2―3)

一 ねらい

友達の大切さを知り、互いに理解し、信頼し、助け合っ
ていこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・友達関係は人間生活において欠くことのできない大切なものである。特に児童は友達との関わり合いの中から、人との関わり方、相手を理解しようとする心情を体得していく。しかしともすると友達との間は、不安定で希薄なものになりがちである。これからさまざまな人間関係を体験していく児童に、互いを認め合い、仲間はずれやいじめをなくし、信頼し合い、助け合っ
て友情を育てていくことの大切さを感じとらせたい。中学年では身近にいる友達と仲よく活動し、助け合うことの大切さを自覚できるようにしたい。

・本資料は、ホッチ峠の茶店と里にそう吉という仲のよい二人がいる。二人は笛を習うのが楽しみで、ほめられると道祖神にダンゴをそなえた。十歳になり、里のそう吉が奉公に出ることになる。二人は、正月の道祖神の祭りには一緒に笛を吹くことを約束し、石をそなえた。ところが祭りになつても里のそう吉は戻らず、峠のそう吉は待ちくたびれ

て約束の石をやぶにたたきつけてしまう。しかしその後、里のそう吉がけがをして戻れなかったことを知り、あわてて投げ捨てた石を捜すのだった。石は見つからなかったが、次の祭りには二人の息の合った笛がきこえたという話である。

・峠のそう吉の心の変容に焦点をあてていくことにより、ねらいに迫ることができると考える。

三 事前指導の工夫

・休み時間の会話等の中から、学級内の友達関係について大まかに実態を把握しておく。

・友達とけんかしたことはあるか。またそのときの原因などについて、調査しておく。

四 展開例

1 仲の良い友達について発表する。

○ どういう友達か、簡単にきく。

2 資料「二人の そう吉」を読んで話し合う。

(1) 二人は笛を習ったり、遊んだりしながら相手をどのよう
に思っていたでしょう。

・ 大切に思っていた。

(2) 再び会う約束をしたとき、二人はどんな気持ちだった
でしょう。

・ 会えることを楽しみにしていた。

(3) 峠のそう吉は三年間をどのような気持ちで過ごしたで
しょう。

・早く祭りになればいい。

・そう吉は上手になったかな。

・また二人で吹きたいな。

(4) 「とうとうそう吉は来なかった」そのときの時のそう

吉の気持ちを考えましょう。

(5) 里のそう吉が帰ってこれられなかったわけを知ったとき

のそう吉の気持ちを考えましょう。

(6) 仲よく笛を吹きながら、二人はどんな気持ちになった
でしょう。

3 友達っていいなと思った経験を発表し合う。

4 教師の話聞く。

○友達を信頼し、助け合っていくことの大切さを話す。

五 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(1)で、互いに相手のことを仲の良い友達だと
思っていることをとらえておく。

・展開例1では、友達を疑ったことなどは話しにくいと思わ
れるので、あらかじめワークシートを用意し、それに書か
せるなどの工夫をするとよい。

・全体をいくつかの場面に区切り、場面ごとに考えを深めさ
せていってもよい。

六 評価の観点

・友達の良さを知り、これからも友達を大切にしていこうと
する気持ちをもっている。

七 事後指導の工夫

・学級活動や日常の学校生活の中での友達関係から、時に応
じて理解し信頼し合っていくことの大切さを指導してい
く。

・「友達にしてもらってうれしかったこと」を発表する機会
を設け、よりよい友達関係を育てていけるよう意識化させ
ていく。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『二人のそう吉』（学習研究社・文教書院）

キタダケソウのこえ

(小学校中学年 3―(2))

一 ねらい

自然のすばらしさや不思議さを知り、自然や動植物を大切にしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・自然は生命を育み、動植物はひたむきに生命の営みを展開している。その命を生かすために自然は、神秘的で不思議な力を生み出している。人間もこの自然に生かされる存在であるが、自分本位に考えがちである。思いがけず、自然の不思議さを知り、動植物が懸命に生きようとする光景に出会うと、命の存在を実感し、いとおしむ気持ちをもつ。その気持ちが、自然を大切にしようとする態度へ結び付く。

・本資料は、自然の美しさを実感しながら安易に貴重な高山植物を痛めつけてしまう主人公が、植物の神秘的な生命の営みを知って、自分の行為を見つめ直すという内容である。

・たくさんある花の一本や二本取ってもかまわないと考える主人公に対して、世界中でここにしかない花は、おまえの命と同じだと父親に語らせている。植物と自分を置きかえて考えさせ、植物一つ一つに生命があることに気づかせる

ことでねらいに迫らせたい。

三 事前指導の工夫

・日常生活の中で、動物を飼ったり植物を栽培したりする経験を積んでいるが、むやみに動植物を痛めつけ、無頓着でいることもある。動植物を大切にできたことできなかったことの実態を把握し、児童に想起できるようにしておく。
・自然に親しむ機会や、自然のすばらしさや不思議さを感じた経験について、語ったり書いたり描いたりして表現する機会を、日常的に多く取るようにさせたい。

四 展開例

1 自然のすばらしさや不思議さを発見したり、心を動かされたりした経験を思い出して発表し合う。

2 資料「キタダケソウのこえ」を読んで話し合う。

(1) 岩の間に咲く美しい花を見た時「わたし」はどんな気持ちになったでしょう。

・なんてきれいなんだろう。初めて見る花だ。

・高い山にこんなきれいな花が咲くんだな。

・よくこんな岩の間に花が咲くなあ。

(2) 夢中でキタダケソウに手をのばした時、「わたし」はどんな気持ちになったでしょう。

・きれいなあ。取ってみたいなあ。

・持って帰って、みんなに見せてあげたいなあ。

・たくさん咲いているから、一本ぐらい取ってもいいだろう。

(3) お父さんの話を聞いて、「わたし」はどんなことを思ったでしょう。

・世界中でここにしかない花だなんて知らなかった。

・長く生きてきた花を取ったらかわいそう。

・花の命のことを考えなかった。

・たくさんあるからとかきれいだからといって取ったりしないようにしよう。

・これからは、いのちあるものを大切にしていこう。

(4) 「わたし」にはキタダケソウのどんな声が聞こえてきた気がしたでしょう。

・折ったり採ったりしたら、なかまがへってしまいます。

・取らないでください。花にも人間と同じ命があるので。

・もつと生きたいのです。

3 自然のすばらしさを見つけた体験や動植物を大切にできた経験はないか、自分にはどんなことができそうかなどを話し合う。

4 教師の説話を聞く。

○自然や動植物を愛護する人々の活動を紹介し、教師の経験から動植物を大切にした時の気持ちについて話をする。

五 指導上の留意点及び工夫

・資料では、読み物だけでなく写真を提示し、自然の美しい姿を実感できるようにしたい。

・展開例2の(2)の発問では、児童の経験を想起させ、自分本位のかわいがり方が多いことや、安易に手を出すだけで簡単に痛めてしまうことに共感させる。

・展開例2の(3)では、書く作業を取り入れ、自分の生命に触れて語る父の思いに気づかせ、植物の命を大切に思う気持ちを深めたい。

・展開例2の(4)では、植物の側に立って考えることで、痛めつけられたキタダケソウの気持ちに共感させる。

六 評価の観点

・自然のすばらしさや不思議さを知り、大切にする方法について考えている。

七 事後指導の工夫

・自然保護や動植物愛護にかかわる新聞記事や諸資料を集めるなどの活動をとおして、日常的に意識の高揚を図る。

・教科指導と一体化させ、家庭との連携を図りながら、自分たちにできることを話し合い実践化を図る。

美じゅつ館のおみやげ

(小学校中学年 4―1)

一 ねらい

決まりや規則について考え、進んで守ろうとする態度を育てる。

二 資料の特質

・ 社会生活を行う上で決まりや規則は大切である。それを守って守ろうとする態度を育てるとともに規則や決まりがどのような意味を持っているかを理解することも必要である。特に公共的な施設を子どもたちだけで利用する機会が多くなる学年において、自ら施設を利用するにふさわしいマナーに気付き、これを守っていこうとする態度を養っていくことが重要となる。

・ 本資料は郷土を代表する山梨県立美術館を舞台に主人公たかしとだいすけの行動や心情に共感させることを通して公共施設を利用するときの約束ごとや決まりについて考えさせる構成になっている。

・ 県外から来た観光客の立場に立つことにより自分たちがどのようにしなければならぬかを考えられるように構成してある。

三 事前指導の工夫

・ 公共的な施設にはどんなところがあるか、また、そこには

どんな約束ごとや決まりがあるかについて調べておく。
・ 公共施設を利用したときに「いやだなあ」と感じたことについてメモしておく。

・ ミレールの絵について事前に模写などを準備しておく。

四 展開例

1 美術館に行ったことについて話し合う。

2 資料「美じゅつ館のおみやげ」を読んで話し合う。

(1) 美術館の中はどんな様子だったでしょう。

・ 大勢の人がいる。

・ 静かで落ち着いた感じ。

(2) 美術館の係の人に「しずかに見てくださいね。」と言われたとき「ぼく」はどんなことを考えたでしょう。

・ あまり真剣に考えていなかった。

(3) 絵を真剣に見ているおじさんを見て、「ぼく」はどんな気持ちになったのでしょうか。

・ 迷惑をかけてしまった。これから気をつけよう

(4) おじさんに「ありがとう」と言われて「ぼく」の心にどんな思いがわいてきたでしょう。

・ どうして「ありがとう」と言ったんだろう。

・ 「ぼくたち」は何もしなかったのに。

・ おじさんに気づいて静かに見たからだ。

(5) 「ぼく」はどんな気持ちから土産話にしようと考えたのでしょうか。

・ 「ありがとう」と言われてまごついたから。

- ・めいわくをかけてしつぱいしたから。
- ・お礼を言われたのでなく、おしえられたから。

3 きまりを守るためには、どのようなことに気をつけたらいいだろう。

4 作文や説話でまとめる。

五 指導上の留意点及び工夫

- ・県立美術館の挿絵やミレーの絵など事前に準備しておく。

- ・公共の場所では自分たちだけでなく多くの人が気持ち良く利用できるよう、走ったり、大きな声を出したりせず、他の人に迷惑がからないように利用することが大切であることをおさえない。

- ・県立美術館はミレーの絵が展示してあるということで、県外からの観光客も多く、また、公共の施設としての利用も多いので自分の体験を授業の中に生かすように工夫する。

- ・主人公のたかしの心情に共感させることにより、ねらいに迫らせたい。

六 評価の観点

- ・公共の場所を利用するときには、守らなければならない決まりや約束ごとがあることに気付き、きまりを守るために気をつけることについて考えている。

七 事後指導の工夫

- ・社会科見学や校外学習とも関連をもたせ、体験を通しての実践指導を行う。

- ・学校や社会で、約束や決まりを守っていくことの大切さを

兵左衛門の水

(小学校中学年 4―5)

一 ねらい

郷土のために、尽くした先人の業績と苦勞を知り、郷土を大切にしようとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

・自分の育った郷土は、自己の形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたって大きな支えとなるものである。そこで郷土を支えてきた先人の業績を理解させながら、自分の生活が多くの人々の苦勞や努力の上に成り立っていることに気付かせ、感謝の気持ちと共に郷土を愛する気持ちを育てる。

・本資料は徳島せぎ（葦崎市から南アルプス市までの総延長十七キロメートルの用水路）づくりにかけた徳島兵左衛門の話素材にしている。兵左衛門ははじめ自分の商売のための用水路づくりと考えていたが、村人のせぎづくりに対する熱意や協力によりしだいに村人のために働くことを決意する。村人の郷土の発展を願う姿に共感させながら、兵左衛門の業績と苦勞を理解させ、ねらいに迫るようにする。

・社会科学習の歴史を知る資料とならないように道徳的価値を確実に捉え、徳島兵左衛門や村人の心情に共感させるよ

うに指導する。

三 事前指導の工夫

・社会科学の学習と関連付け、徳島せぎの歴史的背景や地理的な学習を事前にする方法もある。
・校外学習などで実際に見学したり、ビデオや写真などを利用したりして徳島せぎを身近に感じさせることにより、その業績の大きさを実感できる。

・徳島せぎ沿いの農産物や農業生産高など調べる。

四 展開例

1 水不足で作物がとれなかった報道などで知っていることを発表する。

2 資料「兵左衛門の水」を読んで話し合う。

(1) 徳島兵左衛門は初めどんな気持ちからせぎをつくろうとしたか話し合う。

・初めは自分の商売のために水路をつくろうとした。

(2) 村人と苦勞をともにするようになった兵左衛門はどんな気持ちになっていたでしょう。

・水がもつとほしい。

・暮しが楽になるだろう。

・水田をたくさんつくれるだろう。

・豊かな土地になるだろう。

(3) 工事にゆきづまり、村人の苦しみを知った兵左衛門の気持ちを考えよう。

・せっかくなこここまでやったんだから何かいい方法を考え

よう。

- ・自分の財産がなくなってしまうからやめてしまおう。
- ・自分の財産や商売より、村人の苦しみを何とかしよう。

(4) 村人はせぎが完成したときどんな気持ちでしたか考える。

- ・たくさんの作物がとれる。
- ・生活が楽になる。
- ・非常に喜んだ。

(5) 村人はせぎが完成した時、そのよろこびをどのように兵左衛門に伝えたでしょう。

- ・兵左衛門さんありがとう。
- ・今こんなに豊かになりました。

3 自分たち郷土のために尽くした人について教師の説話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫
・身近な人について話す。(事前に調べておく。)

- ・徳島兵左衛門のせぎづくりの目的だけに視点を当てて指導すると社会科の学習になるので、村人にとつての徳島せぎの果たした役割を充分捉え、指導することが大切である。
- ・今日の豊かな生活に馴れてしまい、それが当り前のようになっている児童に、先人の業績を理解させながら現在の自分たちの生活が多く先人の苦労や努力の上になり立っていることに気付き、感謝の心がもてるようにする。

・徳島せぎだけでなく、自分たちの身近な所にも用水路があり、それを作った先人がいることに気付かせる。

六 評価の観点

- ・現在の豊かな生活が先人の苦労や努力のおかげであることに気付き、郷土を見直し、郷土を大切にしようとする気持ちを深めている。

七 事後指導の工夫

- ・自分たちの身近にいる郷土のために尽くしてくれた先人の業績にも触れるよう資料を整えたり、教科や特別活動などの時間を利用したりして郷土のために尽くした人について理解させる。

・学校図書館や地域の図書館などにもせぎづくりについての書物があるので活用する。

八 その他

- ・次の資料を参考にした。

『山梨百科辞典』(山梨日日新聞社)

『ふるさと山梨の歴史』(山梨県教育委員会)

二千年のいのち 山高神代桜

小学校 中学年 〇 3—1

3—(3)

一 ねらい

生命の尊さを感じとり、大切な生命を守ろうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・植物の生命が芽生え躍動する季節、春。春になると、心も体も弾み、命の始まりを感じる。そして、その春を感じさせてくれる代表的な花が桜である。桜の木には、樹齢百年以上の木が多く、中には千年以上経っている古木もある。古木からは、生命力の強さが感じられる。古木を見るだけで生きる力がわいてくるといふ話も聞く。古木の生命力から学ぶことは多い。しかし、その命を大切に思い、守り育てている人々がいることはあまり知られていない。桜の古木から「生命」について考え、その生命を尊重し、守ろうとしている人々の活動に目を向け、命を大切にしようとする心情を育てていきたい。

・本資料は、主人公の春菜が、母に連れられて、北杜市武川町にある山高神代桜と出会うところから話が始まる。樹齢二千年と言われている日本三大桜の一つである。大勢の人々を魅了し、毎年多くの人が神代桜を見に訪れる。太く

でどっしりした姿に、二千年の命の重さを感じる。しかし、気高く美しい花を咲かせていた神代桜の古木も、それを取り巻く環境の変化に伴い、生命が危ぶまれた時期があったことを知る。地域の人々は古木の命を心配し、何とか木の命を守ろうと立ち上がり、樹木医や大勢の人々の協力のもと、木を再生したことを知らされる。

・美しい花を咲かせようと多くの人々が努力し、見守り続けてきた神代桜を通して、生命の尊さについて考えさせたい。また、人間の命も同じように、多くの人々に守られ、命がつながっていることにも気付かせていきたい。

三 展開例

1 心のノート「植物も動物もともに生きている」(60ページ)を見て、植物も人間と同じような力をもって生きているんだと感じたことがあるか振り返る。

2 資料「二千年のいのち 山高神代桜」を読んで話し合う。

(1) 村人たちは、弱っていく桜の木を見て、何を心配したのでしょうか。

・花の数が少ないことや葉に勢いがいないこと。

・古木だから枯れてしまうかもしれない。

・長年続いてきた木の命がなくなってしまう。

(2) 村人たちは、どんな思いで桜のために活動をしたのでしょうか。

・桜の命を守ろう。木の命をこれからもつなげたい。

・早く元気になってほしい。

・長生きしている桜をもっと長生きさせたい。

・自分たちが守ってやらなければ。

(3) 村人たちが、満開の桜を見て、自分のことのように喜んだのはなぜでしょう。

・長い時間がかかったが、神代桜が元気になってよかった。

・二千年続いた命を守ることができた。

・また、人々がこの美しい桜を見に来ることができると。

(4) 春菜が、神代桜に、今まで見た桜とはちがう美しさを感じたのはなぜでしょう。

・古木である神代桜の命はみんなに守られていることに気付いたから。

・二千年も生きてきた神代桜には人々の願いや思いが入っていることを知ったから。

・みんなに愛されている桜に、花の命を感じたから。

・支えている人たちのためにも、木はきれいな花を咲かせ、人々を元気付けているのかもしれないと思ったから。

3 学校や地域など、自分や自分の周りに目を向け、命が守られていると感じることを発表し合う。

4 ゲストティーチャーや教師の話聞き、身近にも命を守っている人たちがいることを知る。

四 指導上の留意点及び工夫

・心のノートを読み、植物にも動物にも命があることを確認

することに、価値への方向付けを行う。

・ワークシートを活用し、村人たちの思いや行動を知ることにより「守られている命」「つながる命」を意識させる。

・自分や自分の身の周りに目を向けることにより、身近なところにも同様なできごとがあることに気付く。

・ゲストティーチャーには、活動のきっかけや活動している時の気持ち、活動への思いなどを三分程度で話してもらう。

五 評価の観点

・資料を通して、人々の古木への思いを感じ取り、命を守りつなげることの大切さに気付いている。

・生命の尊さを感じとり、大切な生命を守ろうとする心情を高めている。

六 事後指導の工夫

・愛情をもって動植物を育てたり、観察したりできるように、関連的な指導を心がける。

・日常生活、教科・総合・特別活動などと関連した中で、道徳的実践活動ができるように、意識の継続を図る。

・自分や友だちの命を大切にしていくなかで、具体的な方法について折にふれ指導を行う。

七 その他

・次の資料を参考にした。

山梨県・実相寺ホームページ

わたしたちのまちのおたから

(小学校中学年 4―5)

一 ねらい

地域の伝統・文化についての関心を深め、郷土を愛する心を育てるとともに、地域のために進んで貢献しようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・小学生も中学年になると活動範囲が広がり、友だちと連れだつて地域で活動するようになる。子どもたちの視野は、それまでの学校や家庭といった限られた世界から地域社会へと広がり、新しい発見やそれに伴う新鮮な驚きが増えてくる。そのような時期に郷土の伝統や文化にふれ、それらを培ってきた先人の思いや業績について知ることは、郷土を愛する心をはぐくむ上で大変効果的であると考えられる。

・本資料は、郷土の伝統や文化にほとんど関心がなかった主人公の小学生二人が、社会科の授業をきっかけに、自分たちが住んでいる町に「甲州印伝」という長い歴史と伝統をもつ工芸品があるということを知る。興味をもった二人は、甲州印伝の工場を訪問して、そこで働く人から、甲州印伝についての話を聞く。印伝の歴史や、伝統技術を絶やさないうための苦労や工夫、また、それらを将来に伝えてい

くための取組などについて話を聞いていくうちに、甲州印伝が、わがまちの「家宝」であると二人は確信する。

・普段何気なく見ている物や風習、何気なく訪れる場所でも、よくよく調べてみると、そこにはそれらを後の世に残そうとする先人たちの並々な努力と工夫がある。伝統や文化というものはそうした先人の努力や工夫の上に成立しているということについて理解を深めるとともに、それらの伝統や文化をはぐくんできた郷土に深い愛着を感じるができる資料である。

三 展開例

1 自分が住んでいるまちが誇らしいと思つたことがあるか、それはほんなどきかについて発表する。

2 資料「わたしたちのまちのおたから」を読んで考える。

(1) 印伝細工所の人たちが、懸命に印伝を守ろうとしたのはなぜだろう。

・昔から作り続けられている印伝がなくなってしまうのは悲しい。

・印伝がなくなってしまうたら、これまで印伝を作ってきた人たちに申し訳ない。

・印伝がなくなってしまうたら、これから後の人たちに印伝のよさを知ってもらえなくなる

(2) 健二のお父さんが見せてくれたさいふが特別なものように感じられたのはなぜだろう。

・このさいふの色やデザインは、長い時間をかけて多く

の人々の工夫や努力によってつくられてきたものだと
気づいたから。

・さいふ一つにも、長い歴史と多くの人たちの苦労や工
夫がまつていることを知ったから。

(3) 絵里がちよっと誇らしい気持ちになったのはなぜだろ
う。

・自分のまちで作られているものが、遠いまちにすむ人
に使われていたから。

・印伝が多くの人に愛されていることを知ったから。

・多くの人に好んで使われるような物を作っているわた
したちのまちってすごいと思ったから。

3 自分が暮らすまちの「おたから」を守るために自分たち
にできることは何かを考え発表する。

4 ゲストティーチャー（地域に伝わる伝統行事や工芸品の
技術を受け継ぐ人）の話聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・社会科の学習で行った町探検で調べたことをもとに、心の
ノートの「とっておきの場所」（90～91ページ）「とってお
きの（ ）」に記入させておき、導入部分で発表させるよ
うにする。

・ワークシートを用意し、授業中に記入させるなど、書くこ
とに重点を置いた言語活動を積極的に取り入れ、学習内容
の深化を図る。

・地域在住の、伝統行事や伝統技術の伝承者等をゲスト

ティーチャーとして招き、伝統・文化を継承することにつ
いての苦労や努力または工夫について、授業の終末部分で
三分程度の話をしてもらい、授業のまとめとする。

（ゲストティーチャーが来校できない場合は、伝えたい内
容を文章にまとめたものをあらかじめ受け取っておき終末
部分で教師が代わりにそれを読むようにする。）

五 評価の観点

・伝統を守ろうとする先人の努力や工夫に気付き、郷土を大
切にしようとする心情が育っている。

・郷土の伝統・文化を将来に残すために自分たちは何をすれ
ばよいのか、その方法を考えようとしている。

六 事後指導の工夫

・「わたしたちのまちのおたからマップ」を作成するなど、
郷土に伝わる伝統や文化について学校生活全般を通して広
く学ぶことで、道徳以外の時間においても郷土を愛する心
の育成を図る。

七 その他

・次の資料を参考にした。

印伝屋 上原勇七ホームページ

山梨県の郷土伝統工芸品ホームページ

ブッポウソウのなぞを解く

——中村 幸雄——

(小学校高学年 1—6)

一 ねらい

自分の特徴を知り、長所を積極的に伸ばそうとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

- ・ 中村さんの得意なこと(好きなこと)を、さらに深め、伸ばそうとする態度、向上しようとする気持ちに焦点をあてて考えさせ、ねらいを外さないようにしたい。
- ・ 自分の特長を知り、その道を極めようと努力を重ねていく中村さんの姿から、本当の自分らしさについて自覚することの大切さ、自分の信じる道に従って努力して生きることが安定感・充実感につながっていることに気付かせたい。
- ・ 中村さんの長所は、好きなことを常に求め続け努力することができるといえる。この期の児童にはまだ形成されない能力であるが、中村さんの姿を通して自分の好きなこと、得意なものに目を向けさせ、努力させるようにすることである。

三 事前指導の工夫

・ 長所について自分ではどう考えているかのアンケートをしておき、導入で生かしていく。長所の内容把握について見

四 展開例

直させ、価値の主體的自覚への伏線とする。

1 アンケートの結果を見て、感じたこと、考えたことを発表する。

・ 能力・技能的内容が長所としてあげられている。
・ 自分の長所は見つけにくい。短所はよく気づく。

2 資料「ブッポウソウのなぞを解く」を読み、話し合う。

(1) ブッポウソウはどんな鳥でしょう。

・ 分布しているところ、季節、体の色、鳴き声など。

(2) 中村さんが、南の国へ行きたいとあこがれていたのは、どんな思いがあったからでしょう。

・ 小さいころから野鳥に囲まれて育った。

・ 自然を愛し、野鳥に興味をもち、観察を続けた。

・ 鳥について正しいことを伝えようと努力していた。

(3) 事実を明らかにしようと、中村さんが固く心に誓ったのはどんな思いがあったからでしょう。

・ ブッポウソウの鳴き声をまちがえて覚えてはいけな
い。

・ 鳥について、もっと調べようと新たな目標をもった。

・ 自分の出番だ。自分の力で正してみよう。

(4) 中村さんは、コノハズクを探しあて鳴くのをじっと待っているとき、どんなことを考えたでしょう。

・ やっと見つけたぞ。きつと鳴く。早く鳴いてほしい。

・ ああ、これで証こがたしかめられる。思いがかなう。

(5) 内田博士が学会で発表したとき、中村さんはどんな思いであったでしょう。

・これなどで解くことができた。また一つ確実にになった。

・自分が今まで追いついてきたものへの喜びがわいてきた。

3 自分自身の長所(好きなこと)について振り返る。

4 教師の説話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・資料提示では、ブッポウソウ、コノハズクなどの写真か絵を用意し理解の手助けとしたい。

・ブッポウソウの声(ゲエー、ゲゲゲゲゲ)やコノハズクの鳴き声を録音して聞かせられると効果的である。

・野鳥に対する自分の研究からしても、鳴き声を間違えて放送されることは納得できない。(日本の鳥類研究家の状態が、こんなことであってはいけない。)と奮い立ち、事実を明らかにしようと固く誓った中村さんの心情を引き出す。

六 評価の観点

・自分のよさを伸ばしながら、よりよく生きようとする
こと
の大切さに気付いている。

七 事後指導の工夫

・中村さんのことについて補説する。(次項八その他を参照)

・郷土の先人の生き方を学ぶことにより、自分の生き方を見

直す機会、自分のよさを気づき伸ばそうとする機会とした
い。

・自分のよさを伸ばすためには、友達のよさを見つけ伸ばし
ていくことである。相互の励ましが、お互いを向上させる
ことであることを継続してなげかけていく。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第18集』(青少年のための山梨
県民会議)

『学研の図鑑 鳥』(学習研究社)

・中村幸雄について

農業に従事しながら野鳥の観察を続ける。

黒田長礼博士(鳥獣学者)のコマドリとカワセミについ
ての誤記を指摘、対面する。内田清之助博士から鳥獣増減
調査委託委員を依頼される。(大正十三年・二十五歳)

以来本格的な鳥獣調査・研究が始まる。鳥類十三種・獸
類八種・昆虫類六種・植物六種の発見をする。

昭和四十九年二月五日・八十四歳の生涯を閉じた。

藤原女医さん

(小学校高学年 2―②)

一 ねらい

人の身になって考え、だれに対しても温かい心で接しようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 思いやりの心とは、自他の人間関係において、相手に対して尊敬やいたわり、いとおしみの思いを寄せることである。そのためには、相手の心の中を推し量って思い及ぼし、喜びも悲しみも共にすることが必要である。相手が困難や苦しみに出合っている時は、それをいたわり、心を察し、適切な心くばりをもたせたいと考える。

人間の社会はお互いに支えたり支えられたりしながら成り立っている。弱い人や困っている人を見たときに、思いやりの心で、「自分ではなにができるか。」を相手の立場になって考える大切さに気づかせたい。

・ この資料は、昭和二十二年から四十四年までの二十三年間、村医として献身的に活躍され、村民に愛された「女医さん」藤原くにゑ先生について書かれたものである。藤原先生の医師という立場を超えた人間としての生きざまを通して、深い人間愛に目覚めさせることのできる資料である。

・ 医師という一つの仕事を通して、人間として思いやりの心

をもって村民に接する藤原女医さんの行動を共感的に理解することによりねらいに迫れるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・ 日常の学校生活の中で、子どもたちの思いやりある行動についてメモしておく。

・ 自分が受けた思いやりある行為や、思いやり、親切について考えていることについて作文を書いたりして、思いやり、親切について関心を高めておく。

四 展開例

1 人に親切にされたことや、その時の気持ちを発表する。

2 資料「藤原女医さん」を読んで話し合う。

(1) 無医村時代の小菅村の様子はどうだったでしょう。

(2) 女医さんを迎えた村人たちの喜びを、藤原さんは、どんな思いで見えていたでしょう。

・ こんな村で勤められるだろうか。

・ 喜んでくれている村の人たちのためにがんばろう。

(3) 藤原さんは、医者としての毎日の生活の中で、どんな思いを重ねていったでしょうか。

・ 私を待っている人のためになろう。

・ 病人や家族を上げまし、支え続けよう。

・ だんだん弱っていく自分に不安を感じている。

(4) 涙を流しながらお見舞いに来た村人たちに対して、藤原さんは、どんな思いをもちながら息をひきとったでしょう。

(5) 名誉村民第一号の称号を贈った村民の思いを考えましょう。

・思いやりのあるやさしい人、生神様のような人であった。

・私たちの健康のために一生を捧げてくれた女医さん、ありがとう。

3 人に親切にしてあげたことや、思いやりのある行為ができたかについて振り返る。

4 教師の説話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・藤原さんの心情を追う発問を中心にして、授業を展開し、いつも思いやりの心をもって接している藤原さんの生きる姿を明らかにする。

・藤原さんの生き方を、自分の命を犠牲にして村人のために尽くしたという犠牲的な生き方というとらえ方にならないようにしたい。

・展開後段では、今までの経験を想起させ、相手の立場に立つ思いやり、親切の大切さを考えさせる。

・別の展開例として、藤原さんに対する村民の心情や思いを追っていきながら、藤原さんの思いやりや人間愛に共感させる方法もある。

六 評価の観点

・人間として思いやりの心をもって接する人間愛に共感し、進んで親切にしようとする思いを深めている。

七 事後指導の工夫

・各教科、特別活動において、いつでも他人の温かい思いやりに気づかせたり、思いやりの心を大切にさせたりして、思いやりに対する豊かな感受性を育てていく。

・学校生活の中で、児童が思いやりの心に気づいたり、思いやりの行為が見られたりしたときには、大いに賞賛し、その行為が価値あることであることを認め育ててやる。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『小菅村郷土小誌』

『平成五年度小菅中学校道徳教育公開研究発表会資料』

富士の日の出

(小学校高学年 3―3)

一 ねらい

美しいものや崇高なものを尊重する心情を育てる。

二 資料の特質

・美しいものや崇高なものを尊重する心情は、現実より高い次元において人間性を豊かなものにしていく。豊かな人間性が求められている今日、単に現実的な豊かさを求めるのではなく、崇高なもの、偉大なもの、美しいものを、素朴に気高く美しいものと認めて憧れていくという心を育てていくことは大切なことである。

・本資料は、ゆみ子が主人公である。ゆみ子は、小学校三年生のお正月に家族旅行で東京へ行くが、その新幹線の中から見えた美しい富士山のこと忘れられず、一度でいいから富士登山をしたいと思うようになる。そして、六年生の夏休みに父と富士登山をすることになる。しかし、遠くから見る富士の美しさとはうらはらに、富士登山の厳しさを味わわされたゆみ子は、あまりの疲れと共に、頂上へ登る気力もなくしてしまう。だが、朝、雲海からさす御来光のすばらしさに圧倒させられ、富士からのすばらしい光景に深い感動を覚える。そして、すがすがしい気持ちで頂上を目指したいと思うようになるという内容である。

・ゆみ子が、富士の日の出を見たときの感動は、初めて本物の富士山を見たときの感動や富士登山をすることになったときの喜びとは違って、全身で自然の神秘、美しさに対面し、疲れを忘れ、心が和み、励まされるような気持ち、人間同士の不思議な連帯感をもったことを感得させ、ねらいに迫りたい。

三 事前指導の工夫

・校内コンサート、観劇、林間学校での野外活動など、日常生活の中で、美しい自然や清らかな人の心に接して、崇高さや偉大さに胸打たれる瞬間を共有できる体験を大切にす

る。
・家庭と連携をとり、親子でよいテレビ番組の視聴や、自然の中で体験を積み重ねる。

四 展開例

1 富士山のことで知っていることを発表する。

2 「富士の日の出」を読んで話し合う。

(1) 富士山を初めて見たときどんなことを思ったでしょうか。

・きれいだなあ。

・もつと近くで見たいなあ、登ってみたいなあ。

(2) 富士登山をすることになったときはどんな気持ちでしたか。

・うれしいなあ。早く登りたい。

・やっと念願がかなう。

・どんなものが必要なのかな。準備はいつするの。
(3) 八合目まで登っているときの様子を想像してみましよう。

・汗びっしょりになっている。足が棒のようになってい
る。

・同じような道ばかりで、おもしろくない。

・ただ遠くて疲れるだけ。

・疲れていて景色を見る余裕なんてない。

(4) (仮眠して頂上まで登るなんて……) 小屋に着いた
とき、富士山に対してどんな気持ちになったのか、……
の続きを考えてみましょう。

・二度と登るもんか。疲れるだけだ。

・想像していたのとは大違い。きれいな山ではない。

(5) 「ばんざい、ばんざい。」をし続けたゆみ子の心をぞ
いてみましょう。

・疲れていて眠りたいという気持ちだったが、大自然の
すばらしさに圧倒させられた。この感動が、ゆみ子に
新しい力を与えてくれた。

3 美しいものや美しいことに感動し、心が和んだり、勇気
付けられたりした経験を話し合う。

4 教師の説話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・導入では、写真やビデオなど、視覚に訴える資料を活用し
て、富士山に対する関心を高めるようにする。

・展開例2の(3)では、重いナップサックを用意し、児童の体
験を交えた動作化により、登山の苦しさを共感できるよう
にする。

・展開例2の(5)では、自然の美しさ、偉大さ、荘厳さへの感
動だけではなく、頂上をめざし、あきらめず登り続けた自
分のひたむきな努力と新たな登頂意欲への賛歌、生きてい
ることのすばらしさと感謝ということまで深めるようにす
る。

・展開例3で、美しいもの崇高なものは、自然だけではなく
生命や人間に対してもあることを投げかけるようにする。

六 評価の観点

・登場人物の心の変化を通して、自然の神秘や美しさに感動
し、大切にしようとする思いを深めている。

七 事後指導の工夫

・まじめさ真剣さを大切にする学級経営、人間としてのみず
みずしい感性が磨かれる授業に心がけ、感動体験をより多
く共有したい。

御岳新道を切りひらく

——長田 円右エ門——

(小学校高学年 4—7)

一 ねらい

郷土の発展に尽くした先人の血のにじむような努力への共感を深め、郷土を愛する心情を育てる。

二 資料の特質

・郷土を愛する心を育んでいくことは、二十一世紀に生きていく子どもたちにとって心のよりどころとなり、励みになる大切なことである。郷土の文化や伝統を大切にしたい主体的な行為の必要性について自覚を深めるよう心がけたい。

・本資料は、生活のために切りひらいた新道が、天下の景勝地御岳昇仙峡の幕開けとなった長田円右エ門の生き方を扱ったものである。現在、昇仙峡が郷土の誇る観光地となったのは、先人の努力があつてこそであること、自分達も郷土を愛し守っていく気持ちで大事にしていくよう円右エ門の理念と行動に目を向け、ねらいに迫れるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・山梨県の地図で、昇仙峡、荒川、金桜神社などの位置について確認させておくようにする。

・昇仙峡の役割を考えたり、行ったときの感じなども思い出させておくように。

四 展開例

1 昇仙峡の位置をおさえながら、円右エ門の石碑のことに
ついて話を聞いたり、昇仙峡へ行った人の感想を聞く。

○昇仙峡の位置、円右エ門の石碑について、教師の話や昇仙峡へ行ったことのある友達の感想を聞く。

2 資料「御岳新道を切りひらく」を読み、話し合う。

(1) 昔の猪狩村のようすはどうであったでしょう。

・米が作れない、寒い、生活が不自由、やりきれない。

・薪を売って生活していた。甲府まで一日がかり。

・近道がほしかった。

(2) 新道をひらく計画を立て、工事に取り掛かったとき円右エ門はどんな気持ちだったでしょう。

・村のためにも、新道をひらきたい。

・暮らしはきつとよくなる。きつとつめ合わせができる。

・工事は大変だ。村人も疲れてしまいが、やらなくては。

(3) 洪水があつてから再び工事が始まるまで、円右エ門は
どんな思いであつたでしょう。

・あの景勝地をうもらせたくない。

・新道を切りひらくために、どうしよう。お金は、人は。

・ずっと開発の夢をもち続けた。

(4) 工事が再開して、難所を引き受けたときの円右エ門の
思いはどんなだったでしょう。

・何としても完成させたい。

・こんなみごとな景勝地をうもらせたくない。

・猪狩村もきつとよくなる。

・人々の往来で新しい文化も入ってくる。

・変わり行く様子を想像して、夢がふくらむばかりだった。

(5) 新道が完成したとき、円右エ門の気持ちはどんなだったでしょう。

・よかった。これで村も変わる。生活も楽になる。

・人々の往来も増える。景勝地に驚くだろう。

・人々の喜びが目には浮かぶ。ここを守っていこう。

3 郷土を愛し、大事にしていこうという思いについて自分を振り返る。

4 自分たちの身近な町の先人についての話を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・導入では、資料に挿入してある写真を生かす。

・円右エ門のその後の話についてもふれるよう配慮する。

(次項八を参照)

六 評価の観点

・郷土の発展に尽くした先人の苦労や努力に共感し、郷土を愛し、大事にしていこうとする気持ちを深めている。

七 事後指導の工夫

・郷土の発展に尽くした先人のことについて機会あるごとに紹介していき、郷土を見直すように指導を重ねていく。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史』かがやく人々 第11集』（青少年のための山梨県民会議）

・長田円右エ門について

昇仙峡のグリーンラインを車で走り駐車場で降り、歩いて十分位の所（腰越）に「接待亭」がある。その側に、円右エ門像と画賛の石碑がある。

画賛の意訳「手足にヒビ、アカギレを切らしながら山をきり谷を割る。初めて道を開く。顔は醜いが、心は菩薩」

晩年の円右エ門は、「接待亭」で、猪狩・川窪の人々が甲府へ往来したり、また景勝の探勝に来る旅人たちのために、湯茶を接待し、草鞋を売ったりしながら通行者の休みに所を提供した。新道の崩壊に備え保全用の用材を置く場所にした。

甲府の学者や画家・文人などと交遊し、昇仙峡で風流な書画会を催し、景勝開発に努めた。

昇仙峡の風向の中で六十二歳の生涯を終えた。

フットボールの父 ポール・ラッシュ

(小学校高学年 4―8)

一 ねらい

外国の人々や文化を大切にすることを、日本人としての自覚をもって、国際理解と親善に努める心情を育てる。

二 資料の特質

・国際理解というのは、互いに相手の国の文化を知ることから始まる。そこから相互に文化、伝統、しきたり等が尊重できるようになるのである。子ども達には、日本人としての自覚とともに、各国民も自国に対して誇りを持ち、それぞれの文化や伝統を大切にしていることを理解させる必要がある。そして、真の国際理解とは、人間同士の思いやりや信頼が文化の違いを乗り越えさせる原動力になることと、普段の交流がそれを可能にさせることを知らせたい。外国人との関わりがさらに増え続ける社会では、特にこのことが重要である。

・本資料は、清里の開発にその生涯をかけたポール・ラッシュが、日米の交流のために、フットボールを紹介するというものである。清里開発では有名なポール・ラッシュが、フットボールを紹介したというのはいままで知られていない意外な一面である。しかし、フットボールを紹介する動機というのが、アメリカの文化を知ってもらおうという

ことと、日米の相互交流という点では、清里開発と通じる所がある。ポール・ラッシュが書いたフットボールの種が日本に根付き、成長していったが、単にフットボールを紹介しただけの人でなく『フットボールの父』と尊称されるのはなぜか考えさせようとする内容である。

・日米の戦争という国家の相互理解と尊重に欠ける不幸な出来事があったが、真の国際理解というものが人間同士の交流から出発することを、日本を愛し、日本人を愛したポール・ラッシュの考え、生き方を知ることによって、子ども達に理解させたい。

三 事前指導の工夫

・清里の現在の様子や過去からの開発について調べ、ポール・ラッシュと清里との関わりについて関心を高めておく。

四 展開例

1 フットボールについて知っていることを発表する。その後、映像、写真などを利用して、フットボールを知らせる。

2 資料「フットボールの父 ポール・ラッシュ」を読んで話し合う。

(1) フットボールを日本に紹介しようとしたポールの気持ちを考えよう。

○ポールの考えをしっかりと把握させる。

(2) 日本で最初の試合が行われた時のポールは、どんな気持ちだったでしょう。

・これをきっかけに日本とアメリカの交流がもっと深まるだろう。

・フットボールがこれから日本にどんどん広がってほしい。

(3) 戦争が始まったとき、ポールはどんなことを考えたでしょう。

・個人の努力では、やっぱりだめだ。

・せっかくフットボールが広まったのにくやしい。

・国と国になると、にくしみ合うのはなぜだろう。

(4) 戦争中アメリカに帰されていたポールは、どんな思いでいたでしょう。

・早くこんな戦争を終わらせた。

・日本に帰って、フットボールを再び広めたい。

(5) もし、ポールが生きていたら、私たちにどんな願いを話すでしょう。

・外国の人と交流をもっと深めて下さい。

・日本のことをもっと知ってもらおう努力をして下さい。

・日本が外国のためにできることを考えて下さい。

3 身近に行われている国際交流について話し合う。

4 日本が行っている国際交流の話を書く。

五 指導上の留意点及び工夫
・資料を事前に読ませておくことも考えられる。

・導入でフットボールの写真や映像などを見せて、資料の内容を理解しやすくする。

・国際理解というのには、お互いのことを尊重し合い、一方的なものではないことを終末でおさえる。

六 評価の観点
・ポールの行為を通して、国際理解や親善に努めようとする気持ちをも深めている。

七 事後指導の工夫

・外国との交流の例を取り上げ、外国の人達の考え方にふれる機会を大切にする。

・新聞記事やテレビニュースなどで知った国際交流に関することも紹介し合うようにし、一層関心を高めるように心がける。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『清里の父 ポール・ラッシュユ伝』(ユニバース出版社)

『フットボール元年 父ポール・ラッシュユの真実』(ベア

スボールマガジン社)

花のかおりに生きて

—望月春江—

(小学校高学年 1—5)

一 ねらい

進んでよりよいものを求め工夫し、自己を高めようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 医者を志していた春江が、著名な美術史家から絵の才能を評価され画家への道を勧められる。花を描く日本画家として研鑽をつみ、才能を開花させ高い評価を得るが、若い頃の作品に触れたことを機に、無心に花の感性を描き続ける大切さに気付き、独自の画風を築き上げるに至る生き方を中心とした内容である。

・ 花の美しさを描く日本画家としての高い評価は、自らの才能を磨く努力の上に得られたものである。工夫を重ねる主人公の姿は、妥協することなく花と向き合うことから得られる発見や感動によるところが大きいことを押さえ、ねらいに迫りたい。

三 事前指導の工夫

・ 日常での栽培活動などを通して、植物とふれあう喜びを感じ得させ、主人公への共感が深められるようにしておく。
・ 日常の活動場面をとらえ、工夫しているようすを認め励ま

すことが、本時での価値の自覚へと高められるように配慮する。

四 展開例

1 提示された「惜春」の絵を見て、感じたことを出し合う。
2 資料「花のかおりに生きて」を読んで、話し合う。

(1) 中川先生に絵かきの道を勧められても、簡単には返事ができなかった尚の心の中を考えてみましょう。

・ 医者をあきらめてよいのか。
・ やっと好きな絵をかける。
・ 将来のことを考えると不安だ。

・ 家族の期待もあるが、自分の力を試したい。

(2) 若い頃の絵に大きなショックを受けたにもかかわらず、花と向き合うことをやめない尚の気持ちを考えてみましょう。

・ 若い頃の絵には負けたくない。
・ 絵をかく難しさを知った。
・ これからが本当の勉強だ。
・ 人を感動させる絵をかきたい。

(3) 花の本当の姿が見えたような気がしたとき、春江の心にはどんな思いが広がったでしょう。

・ かき続けてきてよかった。 ・ 思わずほっとした。
・ 心のもやもやが吹き飛んだ。
・ 花の心にやっと近づいた。

(4) 八十歳を過ぎてもなお、大きなサクラを真っ正面から

かこうとした春江の気持ちを考えてみましょう。

・体のおとろえを感じるようになった自分を認めたくない。

・自分を育ててくれたふるさとの自然に感謝したい。

・画家として生きてきた喜びを精一杯に表現したい。

(5) 「惜春」が多くの人々を感動させることができた時、

春江の心にはどんな思いが広がったのでしょうか。

・花にいろいろと教えられて、ここまで続けてこられた。

・花をかくこと一筋に頑張ってきて本当によかった。

・素直な心で、絵の勉強を続けてきてよかった。絵を見る

る人に花の感動を伝えることができてうれしい。

3 今までの学校生活やその他の活動の中で、自分なりに工夫して頑張った体験を思い起こし、発表しあう。

4 日常活動の中で工夫し頑張ったことが、友達や学級のためになっっているようすを紹介してまとめる。

五 指導上の留意点及び工夫

・専門的な話への深入りは避けたいが、補助資料(図録等)

を活用して、資料内容が迫真性をもって理解できるように工夫する。

・画家か医者かと、進むべき道に迷う尚の心の葛藤を共感的におさえると共に、画家としての自分の才能を懸命に磨こうとした生き方を(2)で深められるように配慮する。

六 評価の観点

・自分のよさについて見つめ、よさを伸ばそうとする心情を

深めている。

七 事後指導の工夫

・よく考えて工夫していることを、互いに気づき認め合えるような学級づくりにつとめ、実践への意欲化を育てるようにする。

八 参考資料等

・次の資料を参考にした。

『花をみつめて』望月春江著(秋山書店)

『望月春江展』目録(山梨県立美術館)

・年譜

一九一九年 東京美術学校(現 東京芸大)日本画科を首席で卒業。研究科に残り、結城素明(ゆうきそめい)に師事する。

一九二一年 第三回帝展に「春に生きんとす」初入選。制作中に中川忠順より「春江」の雅号を受ける。

一九七五年 皇居新宮殿に「花菖蒲」を制作。山梨県特別文化功労者。

一九七八年

山梨県立美術館開館。作品二十点を寄贈。紺綬褒賞受賞。第三十八回日本画院展に「惜春」を出品する。

一九七九年 二月 心不全により死去。八十五歳。

四月 県立美術館「特別企画展望月春江」開催。

「惜春」は県立美術館の「春の常設展」展示

作品である。

自然教室でのじぎょう

小学校高学年 〇 4―(2)

4―(1)

一 ねらい

私利私欲にとられず、だれに対しても分け隔てなく接することの難しさと大切さに気付き、公正・公平にしようとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

・人は、自分の行為を自分の判断で決定し行動するが、自分がおかれている環境や目先の利害にとられ、公正公平なものの方や判断ができにくくなることもある。しかし、誰かに見られていないからといって不正をしたり、不公平な判断を下したりするのは間違っている。児童自身もそれをわかっていながら、心の中で葛藤を繰り返すこともある。そこで、このような児童たちに公正・公平とはどういうことかを考えさせ、正しいことを貫くことの難しさと大切さに気付かせたい。

・本資料は、児童にとって身近な自然教室という行事の飯ごう炊さんでの出来事を取り上げて作られている。主人公である「ぼく(正)」は、飯ごう炊さんで使う薪や水を、他の班のこともあまり考えず使ってしまう。次の日に訪れた三分一湧水で、掃除をしていたおじさんから湧水にまつ

わる話を聞くことにより、飯ごう炊さんでの様子を思い出し、安易な気持ちから公正公平にできなかった「ぼく(正)」が、三分一湧水を見ながら、正しい行動を実践することの難しさや、公正公平にふるまうことの大切さについて考えさせられるという内容である。

三 展開例

1 みなさんは、サッカーやドッジボールをするときに、どんなことに気を付けてチームを分けますか。

2 資料「自然教室のできごと」を読んで、話し合う。

(1) 「そんなにもっていったら他のはんの分がなくなっちゃうよ。」と信二に言われたのに、ぼくはなぜそのまま持っていたのだろう。

・薪ではなくて小枝だからいいと思ったから。

・まだいっぱいあるから大丈夫だと考えたから。

・また持ちに来るのが大変だから一度にたくさん持って行けば早く支度ができると考えたから。

・自分の班のことしか考えていなかったから。

(2) ポリタンクの水を少し多めに容器へ入れているとき、ぼくはどんなことを思っていたでしょう。

・誰も見ていないから少しくらい多くてもいいかな。

・すぐ停電は復旧するから大丈夫。

・なくなりそうだけど、ぼくの班には必要な水だ。

(3) 夕ご飯の片付けのときに、遠回りして炊事場へと向かったぼくの中には、どんな思いがあったのだろう。

・信二君や沙也加さんと顔を合わせたくないなあ。

・ほくが多く持つて行ったと問い詰められたらどうしよう。

・自分の班のことしか考えなかったのはよくなかったな。

・信二君や沙也加さんに悪いことしたな。

(5) 三方向に流れる湧水を見ながら、ほくはどんなことを考えていたでしょう。

・ほくも自分のことしか考えていなかったな。

・謝らなくて知らん顔していたのはよくなかったかな。

・水が少なくなっていたとき誰かに相談すればよかったかな。

3 あなたは、今までにまわりの人のことを考えながら、公平にふるまったことがありますか。そのとき、どんな気持ちでしたか。

4 被災した人たちが、他の人のことも考えて公正・公平に行動していた話を聞く。(阪神淡路大震災・東日本大震災等) 指導上の留意点及び工夫

・主人公の心情を追う発問を中心にして授業を展開し、場面ごとに揺れ動く主人公の気持ちにより添いながら、公正・公平にふるまうとはどういうことを考えさせる。

・うしろめたさを感じながらも、ほくは悪くないと思ってい
る「ぼく(正)」の心の揺れを考えさせる。

・本書では、正を中心とした発問構成になっているが、信二

や沙也加の心の中を考える補助発問も考えられる。

・私心にとらわれることは誰にでもあるということに配慮しながら、公正・公平にふるまうことの大切さについて話題にしていこう。

五 評価の観点

・主人公の心の揺れに共感しながら、公正・公平にふるまうことの大切さに気付いている。

・日常生活や学校生活のことを振り返り、公正・公平にでき
たときのすがすがしさを感じている。

六 事後指導の工夫

・学校生活の中で、児童が個人的な感情にとらわれず、公正・公平な態度で人と接している様子が窺えたときには、大いに賞賛し、そのよさを学級全体で共有できるようにする。

・正しいことは認め合い、自他の不正や不公平は許さないという気持ちを育て、社会正義について考えるきっかけとしたい。

七 その他

・次の資料を参考にした。

ほくと、もっと知りたい！BOOKLET 1『三分一の本』

(北杜市郷土資料館 編集・制作・発行)

『長坂のむかし話』

『伝えたい残したい長坂の話』

・次の施設で取材した。

三分一湧水館

湖をわたる風

(小学校高学年 4―(4))

一 ねらい

働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って、公共のために役立つ活動とすることを育てる。

二 資料の特質

- ・高学年の段階では、働くことは自分のためだけでなく、社会生活を支えるものであることを理解させ、社会奉仕活動など公共のために役立つ活動に目を向けさせたい。
- ・本資料の主人公さとしは、湖畔清掃を面倒な行為と思ひ、仕方なく働いていたが、皆が働く姿や中学生の徹の言動や美しい自然の風景から、しだいに働く意義を理解していく。さとしの心情に共感させながらねらいに迫りたい。
- ・高学年ともなれば、何らかの奉仕活動を経験していると思われる。人々から感謝されたり賞賛されたりすることで、社会に奉仕する喜びを知る。このような体験活動と道徳の時間を関連させ自己肯定感を育てることで、公共のために役立つとすることを育てる。

三 展開例

1 今までに、どんなボランティア活動をしたことがあるか発表する。

2 資料「湖をわたる風」を読んで話し合う。

(1) クリーンアップキャンペーンに行く前のさとしは、どんな気持ちだったでしょう。

- ・めんどくさいなあ。中止になればいいな。
- ・ゆうとくんと遊んだほうがいいな。

(2) 湖に出てごみを拾い始めたさとしは、どんな気持ちだったのでしょうか。

- ・きたないなあ。手が汚れていやだ。
- ・誰が捨てたんだろう。なんでほかの人が捨てたごみを拾わなくちゃいけないんだ。

・日曜日なのに、遊んでいたい。

・やっぱり、ゆうと君と遊べばよかった。

(3) なぜ、さとしは、小さくガッツポーズをした徹君がかつこよく見えたのでしょうか。

- ・自分よりも、徹君の方がたくさんごみを拾ったから。
- ・自分は仕方なくごみを拾っていたのに、徹君は自分から進んでごみ拾いに参加したから。

・去年までは一緒にふざけていたのに、今年は一生懸命ごみを拾っていたから。

・湖の自然を守るために一生懸命働いている姿がすごいと思ったから。

(4) ごみ拾いが終わって、お母さんと一緒に湖の方に振り向いたとき、さとしはどんなことを考えたでしょうか。

- ・湖がきれいだなあ。富士山がきれいだなあ。
- ・ごみ拾いをして湖がきれいになってよかった。

・ やっぱり来てよかった。

・ 来年も参加しよう。

3 自分の生活を振り返って話し合う。

○ 地域や周りの人のためにがんばったことを思い出し、その時の気持ちを発表しよう。

4 教師の説話を聞く。

(別の展開例)

・ 学校や地域のために役立つ活動をしている人の話を聞く。

・ 学校や地域のために役立つ活動をしている人々の写真を見る。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 事前にボランティア活動等に関するアンケートをとっておくと、児童の実態が分かり、展開後段で自分の生活を振り返る時に活用できる。

・ 中心発問は、ワークシートを用意すると心情をじっくり考えることができる。

・ 展開後段では、地域や周りの人の役に立った喜びを発表したり聞いたりすることで、自己肯定感を育てたい。

・ 地域で活躍されている方をゲストティーチャーとして招いてお話を伺いねらいに迫っていく。その際、本時のねらいに関わる質問に答えていただくという形で進めていくと、授業が展開しやすい。

・ 公共のために進んで働いている人々の写真や映像を見せ、

働くことのおよさや喜びを視覚的に訴える方法もある。

五 評価の観点

・ 資料を通して、働くことの意義や喜びを理解し、公共のために役立つとうと感じている。

・ 展開後段では、日常生活での自分の行動を振り返り、人のために役立つ喜びを感じ、地域や周りの人のために役立つとう感じている。

六 事後指導の工夫

・ 皆のために働いている姿を見かけたら大いに褒め、自己肯定感を高め、道徳的実践意欲や態度を育てていきたい。

・ 各教科、総合的な学習の時間、特別活動などに関連させ、実際の場での意欲や態度に結びつけていきたい。

・ 働くことの意義を理解することは、将来の社会的自立に向けて、勤労観や職業観をはぐくむ上で重要であるということとを指導者も理解して事後指導にあたる。

七 その他

・ 資料作成にあたっては、毎年四月の第三日曜日に行われている富士河口湖町環境課主催の河口湖畔清掃活動の様子を参考にした。この活動には、地域の人や地元の小中学生が大勢参加している。

地方病とのたたかい

中学校下級学年 ○ 1—(1)

1—(2)

4—(8)

一 ねらい

現在の健康的な生活は、多くの先人の努力の上に成り立つことを理解し、自分の健康を大切にしようとする態度を育てる。

二 資料の特質

・病気に悩まされない健康な生活は、人間にとって充実した生活を送るうえで一番大切なことである。しかし、健康である時は、病気の恐さや健康の大切さを感じることはない。特に、中学生の時期は心身ともに急激に成長し、自分の体力にも自信をもつようになり、しかも医学の進歩から病気を甘く見て、健康をそこなうことがある。現在の健康的で衛生的な生活が、先人の長年にわたる努力のうえに成り立つことを理解し、自分の健康は自分で大切にしなければならぬという基本的な姿勢に触れていきたい。

・本資料は、地方病撲滅に大きく貢献した杉浦建造・三郎親子が主人公である。原因や治療法のまったく分かっていない地方病の解明と撲滅に親子二代にわたり百年間の戦いを続けた。特に、治療法の開発後も農民へ健康の大切さを訴

えながら、宮入員の撲滅や予防策を説き、撲滅を達成させた姿を通して、現在の健康的な生活が簡単に手に入ったものではないことに気づかせ、自分の健康を大切にすることを育てようとする資料である。

・親子二代にわたる医師として、治療法の開発に努力するだけでなく、農民の健康のために行動する姿を考えることによって、ねらいに迫りたい。

三 事前指導の工夫

・地方病の原因や症状について、家族や地域の人々に聞いてまとめておき、病気に対して関心を高めておく。

・(生徒や保護者で)病気で苦しんだ時の経験や、家族の入院などで健康のありがたさを感じた経験を生徒から集めておく。

四 展開例

1 地方病とはどんな病気か、家族や地域の人から聞いたことを発表する。

2 資料「地方病とのたたかい」を読んで話し合う。

(1) 助けを求めてくる患者たちに効果的な治療ができたかどうか杉浦建造はどんな気持ちで診察していたのだろうか。

・なんとかして早く治せるようにしたい。

・医者として情けない。 ・無力だ。

(2) 建造は特効薬のスチブナールを使用するのにとても迷ったのはなぜだろう。

・ 地方病は治っても副作用で苦しむことになったら困る。

・ 地方病さえ治せばいいのではない。

(3) 杉浦三郎が最後の注射で「今日が最後だ。よくがんばったな」と言う時には、どんな気持ちなのだろう。

・ 患者は長い期間の治療によく耐えたな。

・ これで病気が治り、自分としても嬉しい。

・ 自分のやってきたことは間違えていなかった。

(4) 治療法が進んでいく中で、撲滅作業はなかなか進まず、協力しない農民や効果を期待しない農民がいることに、三郎はどんな気持ちだったのだろう。

・ このままでは地方病はなくならない。 ・ 悲しい。

・ 農作業で忙しくても、協力しなければ効果はない。

・ あきらめてはいけない。

(5) 医者としての治療以外に地方病の撲滅や予防を説いて廻ったのは、どんな考えからだろう。

・ 治療技術が進歩しても、自分で注意しないと発病する。

・ 自分たちが宮入員を撲滅しなければ、健康な生活はいつまでたっても実現しない。

3 自分が今までに病気になる、健康の有り難さを実感した経験や、自分の不注意から体調を崩したり病気になることを発表する。

4 保護者からの手紙を読む。

(保護者本人または生徒が今までに罹った病気によって健

康のありがたさを記した文章から)

五 指導上の留意点及び工夫

・ 資料が親子二代にわたることから、主人公も変わり、取り組みが長期にわたっていることを押さえない。

・ 地方病の克服には、多くの医師、農民だけでなく行政の協力もあり、まさに県民一体になって成し遂げたことを補足したい。

・ 現在でも、世界の中には、地方病が発生している地域があることをふまえる。

六 評価の観点

・ 杉浦建造、三郎親子の地方病とたたかう姿に共感し、健康を大切にした生活をしようと考えている。

七 事後指導の工夫

・ 毎日行う健康観察と関連づけ、自分で体調を崩さない生活を送れるように指導する。

・ 家庭での生活についても保護者の協力を求める。

八 その他

・ 次の資料を参考にした。

『地方病とのたたかい』（山梨県地方病撲滅協力会）

『郷土史にかがやく人々 第7集』（青少年のための山梨

県民会議）

『山梨日日新聞』一九九二年三月四日

いのちの輝き―ハンセン病救済に生涯をかけた女医―

中学校下級学年〇 2 | (2)

3 | (1)

3 | (3)

一 ねらい

ハンセン病救済のために一生を捧げた小川正子の生きざまにふれて、人間愛とは何か、真の思いやりとはどういうことかを深く考える態度を育てる。

二 資料の特質

- ・人の心の問われる今日、人間愛や思いやる心はとりわけ大事なものと考えられる。「いじめ」などの問題の根源にある心の問題は義務教育終了を前にきちんと考えさせたい。
- ・本資料では、その当時不治の病、遺伝病だとされたハンセン病に正面から立ち向かい、患者達のために生きぬいた姿は多くの者に愛の心思いやりの深さを感じさせるものである。

三 事前指導の工夫

- ・ハンセン病とエイズについて調べておさせる。

四 展開例

1 ハンセン病は、どんな病気でしょう。

(1) 調べてきたことや知っていることを話してください。

- ・皮膚に斑紋が出来、毛が抜け、肉が崩れる。

- ・細菌の侵入によって起こる慢性の伝染病。

(2) もしそういう病気の人が自分のそばにいたらどうしますか。

- ・恐いから逃げる ・うつったらいやだから避ける

2 ここにハンセン病患者のために生きた女医さんの資料があります。読んでみましょう。

(1) ハンセン病はどういう病気と思い込まれていたのでしょうか。また、そこからどんな悲劇が生まれたのでしょうか。

- ・ハンセン病は遺伝する病気と考えられていた。

- ・ハンセン病患者が一般人と混じって生活していたから、伝染病のハンセン病が広まってしまった。

(2) 小川正子はなぜ孤島に渡る決意ができたのか考えましょう。

- ・正子の目の前で、生き別れる家族を見て何とかしてやりたいという強い思いにつき動かされたと思う。

- ・惨状を目のあたりにすると、人間は同じ人間同志、何かをしてあげたい、力になってやりたいという思いがつきあがるのだと思う。

(3) 小川正子の決意について感じたこと思ったことを言い合ひましょう。

・もう自分も二度と家族と会えないという覚悟の上だったことがすごいと感じた。並の精神力ではできないと思っただ。

(4) 自分だったらどうしたか言ってみましょう。

・自分が意気地がないから多分そこまではできないと思う。

・自分も恐さや不安が先に立って、悩んだ末孤島に渡っていけなかったと思う。

3 小川正子の生き方にふれて、今までの自分について考えてみましょう。

(1) 今までの自分について何か反省したくなったことがあつたら話してください。

・自分は、平気でくさいものとか、汚いものとか、みにくいものをむやみに遠ざけたり避けたりしてきたことについて、少し考え直してみたいと思っただ。

・他人に対してどのような人でも同じ人間として差別や偏見でなく見てこられたかどうか反省したくなった。

・今まで自分の思っていた思いやりがいかに軽かったかと思う。

4 教師の説話

五 指導上の留意点及び工夫

・できるだけ生徒にとって身近なことと関連させて、考えさせる。

・弱いところをもっている人間と、人間としてどう向き合うかという、日常的な一人一人の生きる姿勢について、ここ

で立ち止まり振り返らせたい。

六 評価の観点

・人間同士互いに愛情をもって向き合うことの尊さに気づき、真の思いやりとは何かについて自分の考えをもととしてしている。

七 事後指導の工夫

・本資料を通して、一人一人が揺さぶられた心の中に、その人間愛や思いやりを永く持続させ、少なくとも「いじめ」というような行為が決して行われないう、よりよい生き方をさせたい。

・人間としていかなる人をも差別視することのないよう、また、エイズなどの病気に対しても同様の人間的理解のもと、深い愛情で接していけるよう発展させたい。

・ボランティア活動などへの参加の方途を指導したい。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第3集』（青少年のための山梨県民会議）

『小島の春』（長崎書店）

「二人の力」——イチノセグワの発見と普及——

中学校下級学年〇2—(4)

4—(4)

4—(6)

一 ねらい

一瀬夫婦の生き方を通し、男女は、互いに相手の人格を尊重し健全な異性観をもって生活していく態度を育てる。

二 資料の特質

・異性に対する関心は、中学生にとっては、大きな比重を占めている。単純なあこがれや、表面的な形に左右され、本質からはなれてしまいがちな感情でもある。意識的に異性をさけたり、逆に不自然に異性の関心を誘うような態度をとったりする事もある。大切なものは何か、本当に忘れてならない人間として、しっかりとついていたい考えを見なおさせるようにしたい。異性間における根本にある人間のあり方を考え、相互の理解や、お互いの人格を尊重しあう美しさや、素晴らしさに気づかせたい。

・本資料は、イチノセグワを、苦勞の末、発見した益吉、多くの夫婦が、お互いを認めあい、大切にしながら郷土のために生きていく姿をえがいている。さまざまな困難や、問題を、一つ一つ共有し、お互いを心の底から尊敬しあっている二人の姿は、本当に、自然にとけ込んでいる。夫婦の愛情が、心に素直にしみとおってくる内容である。

三 事前指導の工夫

・二人のお互いを大切に思いやる気持、学びあう姿勢、尊敬しあう心を感じながら、男女が互いにもつていたい健全な異性観について意識させていきたい。

・特に異性に対する関心は、自然な心の発達とともに中学生の生活に入りこんでいる。生徒達がお互い、どのような態度をとりあっているのか観察しておく。どんな人が異性として好ましいのかといったアンケートなども用意しておく
と良い。

・父母や、身近な人の中の異性観を調べておく。本資料や、他の文章などを読んでもらい感想などを書いておいてもらう。

四 展開例

1 桑のさいばい（養蚕）について話す。

○養蚕がさかんに行われていたこと、そのために良質の桑の木の発見が望まれていたことなどを話す。

2 資料「二人の力」を読んで話し合う。

(1) 益吉の葬列の様子は、どんなでしたか。又そのことから何がわかりますか。

・ 参列者がとても多かった。

・ 益吉が、尊敬され、感謝されていることがわかった。

(2) 二人がイチノセグワを発見した時の様子は、どうでしたか。

・ 手をとりあって、とてもよろこんだ。

・ 妻をだきかかえんばかりにした。

(3) なぜ「お母さんも一緒に行こうな」と、言ったのでしょう。

・二人で苦勞してきたから。・妻が気づいてくれたから。

・二人の発見にしかつたから。・感謝しているから。

(4) 発見した桑をめぐつてのさそいを益吉は断わりませんが、何故でしょう

・もうけ話が、こわかつた。・いやだつた。

・本来、何を願つてきたのか考へたかつたから。

・きくののしぐさに、人間としてのあるべき姿勢を教つたから。

(5) 五月の風にそよぐ一面の桑畑をきくのは、どんな思ひで見つめるのでしょうか。

・なつかしい。・あいたい。・やさしかつた夫を思ひ出す。

(6) 益吉ときくの夫婦は、どんな夫婦だつたのですか。

・とても仲がいい。・お互いをとても大事にしていた。

3 人間としての在り方の根本にあるのはどんな気持ちですか。

・お互いを尊重する心。・認め合い向上しようとする気持ち。

4 あなたはこれからどのように異性と接して行きたいですか。

5 教師の説話

五 指導上の留意点

・桑の木の発見は、産業として待ち望まれていたことを知ら

せ、二人が努力してきたことをとらえられるようにする。

・素直に自分の気持ちや考えを発表できる雰囲気をつくる。

・自分ないものや、相手の素晴らしさを認め合う勇氣に気づかせ、それが向上していく姿勢につながることを理解させる。

六 評価の観点

・相手の人格を尊重し異性と関わることの大切について考えている。

七 事後指導の工夫

・学級通信などで健全な異性観に対する友人の考えを知らせる。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『山梨百科事典』(山梨日日新聞社)『三珠町誌』(三珠町)

『郷土史にかがやく人々 集合編Ⅱ』(青少年のための山梨県民会議)

花かげの詩

— 木村主計 —

中学校下級学年〇4―(6)

1―(2)

2―(2)

一 ねらい

父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもつて、充実した家庭生活を築いていくような態度を育てる。

二 資料の特質

・私達は一人で生きている訳ではない。いろいろな集団の中で、沢山の人々とかかわり合い、恩恵を受けながら生活している。その最も基本的なものが、家族の人間関係である。日常気づかずにいる親の愛情、兄弟、家庭の愛情に支えられていることに気づかせたい。時代や社会の状況がいかに変化しても、この思いは、変わらないだろう。生徒達は、さまざまな環境の中で、家族の自分への思いに気づいていても負担に感じたり、かえって反抗的な態度に出てしまったり、照れ臭さそうにしたり、時には、それを自分の都合に合わせて、利用してしまうようなところさえあるように思う。なかなか素直に認めようとしめない。お互いが支え合う中から、生きがいや、やる気がうまれる事を自覚し、父母はもちろん、家族に対する敬愛の気持を深め、そ

の一員としての自分を認識しながら充実した生き方をしていく姿勢を育てたい。

・本資料は、向嶽寺（塩山市）にある歌碑の題名である。山梨県出身の詩人、大村主計が、嫁ぐ姉を慕う気持ちに詩にしたものである。姉と弟のお互いの思いが、やがて美しい詩をうむこの資料を通し、家族の愛情が人生を送っていく支えになっていることに気づかせたい。

・主計とはるゑの心情に触れ、家族を大切にしていこうとする心情を育てたい。

三 事前指導の工夫

・今までの自分の歴史（自分史）を作りながら、家族に直接話を聞くことで、親子のふれあいの機会をもたせ、その取材を通して、家族の自分への思いを実感させる手がかりとしたい。

・家庭と連携をとりながら、生徒の様子や、家族構成、意識などを把握しておく。

四 展開例

1 花かげの詩について話す。

○ビデオ・切手（記念切手）・向嶽寺の碑・花かげのお菓子などを使って、興味をもたせるようにする。

2 資料「花かげの詩」を読んで、話し合う。

(1) この頃のご祝言は、どんな様子でしたか。

○その時代の様子や、結婚式について、現在と違うことを話す。

(2) 二人の生活の様子は、どうでしたか。二人はどんな姉弟だったでしょうか。

・二人は、とても仲が良かった。
・何をするのもいっしょだった。

(3) はるゑは、なぜ今のうちに何か言っておかなくてはならないのですか。

・明日からもういない。・会えない。・話ができない。
・そばにいて心配してやれない。・はげましてやれない。

(4) 泣いている主計を見つけて、はるゑはどんな気持ちだったでしょう。

・身を切る思い。・仕方ない。・立派になってほしい。
・わかれたくない。・いっしょにつれて行きたい。

(5) 別れの情景を綴った弟の詩を、はるゑは、どんな気持ちで聞いているのでしょうか。

・うれしい。・満足。・なつかしい。・得意。
・大切に思ってくれている弟の心を感じて泣いてしま

う。
・素直な気持ちをうれしく思う。・家族の大切さを感じ

る。
・私も頑張ろうと、力が湧いてくる。

○お互いが、生きる支えであることを気づかせる。
○気持ちを素直に表現する、素晴らしさを感じさせる。

3 自分のこととして考える。

あなたの家族に対して感じていること、自分自身が改める必要があることについて、ノートに書きましよう。

4 花かけのテープを聞かせる。
5 指導上の留意点及び工夫

・当時のご祝言（結婚式）について理解を深めるようにする。

・ビデオ、場面絵などを使って、話をすすめる。
・展開2の(5)では、お互いが支えになっている、ということに気づかせる。

・素直に認め合ったり、自分の気持ちを考える雰囲気をつくる。

六 評価の観点

・自分と家族とのかかわりを見つめ、家族の一員として、自分にできることについて考えている。

七 事後指導の工夫

・自分史を読み合う中で、家族とのかかわりを深めあうように指導する。
・地域に対する愛着をより強いものにしていくようにする。

八 その他
・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第18集』（青少年のための山梨県民会議）

情熱の人

— 近藤喜則 (きそく) —

中学校下級学年 〇 4—(8)

1—(4)

一 ねらい

郷土の先人や地域の高齢者達が真実を求め、理想の実現をめざして生き生きと人生を切り開いていく姿にふれることにより、尊敬や感謝の念を深め、自分の生涯を豊かにしていこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・自分の将来を考えさせていくためには、的確な判断力で現実を見つめたり、将来に向けて理想を実現するために諸条件を検討したりして、高い理想を求めて生きる態度と能力を育てていく必要がある。また、自分が所属する社会というものを深く認識させる必要がある。社会なくして自分というものは存在できず、その社会は、家族や先人たちによって形成され、その中で自分が生かされている事に気付かせたい。また、それらの人々に対しての認識や理解を深めることで、おのずと湧きでてくる尊敬や感謝の気持ちを大切にさせていきたい。

・本資料は、南部宿（現在の南部町南部）の名主であり、本陣でもある近藤家に生まれ、明治初期の県政や峡南地方の政治・産業・福祉・文化の普及に全力を傾けた近藤喜則が

主人公である。ここでは、特に教育の普及ということ

「蒙軒学舎」を取り上げた。喜則は、少年のころ（幕末）

から中央の役人や文化人と接する機会が多く、伊豆・江戸・長崎と遊学し、開明的な考えを身に付けていく中で郷土の人々やその生活を向上させようという考えをもつよう

になっていった。その喜則が豊島住作と出会うことにより

塾の設立を決意し、生徒たちに期待しながら夢を実現させて

いこうとする姿を通して、実現すべき価値を見出し、意

欲的に生きることの充実感や人生の豊かさに気付かせた

い。また、喜則が郷土やそこに住む人々の生活や環境をよ

りよくするため、国の発展・将来を考え、地域教育に力を

注いだことに着目させ、その先見性や生徒に対する愛情に

気付かせたい。これらのことにより尊敬の念を深めさせる

と共に自分が今何ができるかを考える機会としたい。

三 事前指導の工夫

1 自分の住む地域についてアンケートを行う。

・好きなところ。(よいところ)・改善したいところ。

2 自分の住む地域について自由作文を書かせる。

四 展開

1 今、自分が住むこの地域の好きなところと改善したいと

ころを数人に発表させる。

アンケート結果について確認する。

2 資料「情熱の人 近藤喜則」を読み、話し合う。

(1) 喜則は、なぜ文化を広める必要があると感じたので

しよう。

- ・時代に乗り遅れているから。
- ・毎日の生活に流されているから。

・何も疑問に思わないから。

- (2) 豊島住作との会話の中での心地よい興奮とは、どんな興奮だと思いますか。

・自分の考えがようやく実現しそうだから期待にあふれる興奮。

・目の前が急に開けたような興奮。

- (3) 心を育てるとは、人のどのような力を引き出そうと考

えたのでしょうか。

・思いやりの心。

・豊かな気持ち。

・何事にも意欲的な気持ち。

- (4) 喜則は、富士川のほとりで自分の半生をどのように考えたのでしょうか。

・教育に力をいれたことは、間違いでではなかった。

・やるべきことをやった満足な人生。

- 3 身近な中で地域に尽くしていると思われる人は、どんな人がいますか。または、どんな事がありますか。

・交通指導の人。 ・地域での空き缶拾い。

・道路の花の手入れをしているお年寄り。

- 4 地域についての自由作文を読む。

○事前に選んでおく。(美化するものにかたよらない。)

五 指導上の留意点及び工夫

・発問に対して、資料の文や語句にこだわらないようにする。

・近藤喜則の業績についてもふれておきたい。

・理解を深めるため、事前に読ませておく事もよい。

六 評価の観点

・喜則の理想や気持ちを探る中で、高い理想を持ち情熱をもって生きること共感している。

七 事後指導の工夫

・郷土を見直すという観点で、事前のアンケート結果を使い

郷土を知る調査・授業を仕組む。

・郷土について家族で話し合う機会をもたせる。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『蒙軒学舎物語』(南部町商工会)

『郷土史辞典山梨県』(昌平社)

『蒙軒学舎とC・B・イビー』(南部町成人大学資料)

『郷土史にかがやく人々 第2集』(青少年のための山梨県民会議)

ワインにかけた二人

中学校下級学年〇 4―(8)

1―(2)

4―(5)

一 ねらい

社会の一員としての自覚をもち、社会に尽くした人々への感謝と尊敬の念を深め、郷土の発展について考えようとする
気持ちを育てる。

二 資料の特質

・近年は、地方の農山村でさえも、地域社会の一員としての自覚や郷土意識が薄くなってきたと言われている。日頃なにげなく目にしていく風景や、地域をささえている産業の歴史のなかに、郷土を愛し、地域社会を発展させようとした人たちがいる。資料を通して、こうした先人たちの考え方や生き方について考えさせ、地域社会に対する意識についてふりかえさせるとともに、地域を愛し発展させていこうとする心情を育てたい。

・本資料は、明治十年にワイン醸造を学ぶためにフランスへ渡り、帰国後ワイン醸造のために尽くした高野正誠と土屋竜憲について書かれている。フランス語がまったくわからない二人が大きな不安をいだきながらフランスへ渡り、あせり、苦悩しながらも、なんとかしてワイン醸造の技術を

学んで帰って来た。帰国後二人は、その年に収穫したぶどうで日本ではじめてのワインを醸造した。そしてその後二人は、それぞれワイン醸造の研究やワインの普及のためにその生涯をかけた。

・明治時代に何もわからないままフランスへ行くときの二人の不安や農園での二人の苦悩に共感させながらも、そうした困難を乗り越えなんとかして目的を達成し、その後もあきらめずにワイン醸造の研究や普及に努力し続けた二人を支えた考え方や生き方について考えさせることにより、ねらいに迫りたい。

三 事前指導の工夫

・祖父母や父母から、現在の地域社会の発展をもたらした先人たちの話を聞き、まとめさせる。

四 展開例

1 勝沼のワインや明治十年頃の社会や人々の生活について話す。

2 資料「ワインにかけた二人」を読んで話し合う。

(1) 二人がどういう人でどんなことをしたのか、内容を把握させる。

(2) 二人がフランスへ行くことになったとき、どんな気持ちだったか考えさせる。

・どんな国なのだろうか。

・こともわからないのにやっつけていけるだろうか。

・ほんとうにワインの技術を学んでこれるだろうか。

(3) フランスの農園での実習のなかで二人が感じたあせりや苦悩について考えさせる。

・ ことばもよくわからない所でないやになっただろう。
・ 前にも進めない、かといってひきかえすこともできずやりきれない。

(4) 帰国した二人は、その後もその人生をワインの研究と普及にかけ努力し続けた。この二人のこうした生き方を支えている考え方はどういうものだったのだろうか。

・ ワインの技術を学んで帰ることがこれからの村の発展のためになるのだ。

・ 約束したことだ。このままでは帰れない。

・ 自分が一度はじめたことだ。帰国して約束を果たしたからもう終わりというわけにはいかない。

・ なんとかかしているいいワインをつくりたい。そしてそれが商品として売れるようにしたい。

3 地域の発展にかかわった先人について調べたことを発表する。

4 教師の説話をしてまとめる。

五 指導上の留意点及び工夫

・ 当時の旅行や外国への意識などを想像させ、生徒の頭の中からイメージができるようにしたい。

・ 自分が今暮らしている地域に目を向けさせ、地域と自分との関わりに気づかせたい。

六 評価の観点

・ 自分が今暮らしている地域社会の発展の陰には、先人の多くの努力があつたことに気づき、地域社会と自分との関わりについて考えを深めている。

七 事後指導の工夫

・ 祖父母や父母の話をきいてまとめたものを印刷して全員に配布し、読ませる。また、家庭に持ち帰らせ家庭との連携をはかりたい。

八 その他

・ 次の資料を参考にした。

『山梨のワイン発達史 勝沼・ワイン一〇〇年の歩み』
(勝沼町)

平和と友情の鐘

中学校下級学年	○	4	—	4	—	10
		2	—	6		
		4	—	(3)		

一 ねらい

姉妹都市締結のいきさつを知ることを通して、感謝の念をもち、どの国の人々も同じ人間として尊重し合い、世界平和や人類の幸福に貢献しようとする心情を育てる。

二 資料の特質

・本資料は、中学生の僕が訪問団の一人として姉妹都市を訪問したことを通して、わかったことや感じたことが書かれている。気軽な気持ちで訪問団に参加した僕の体験から、ホームステイ先の少年との関わりや、両県の姉妹都市になつたいきさつを知ることを通して、相手への尊敬の念をもつことに気づかせ、真の国際交流とは何かについて考えさせたい。

・かつて大きな災害に見舞われた本県が、アイオワの人々の支援を受け、その後の交流が現在も続いていることを知ること、国境を越えた人間愛に気付き、多くの人々の支えがあることへの感謝の気持ちをもたせたい。また、良好な関係が続いているのは、互いの支え合いの気持ちがあつたからだということにも気付かせたい。

三 展開例

・各学校には、ALTなど外国籍の先生がいるため、他国の文化や人柄にふれる機会は多くある。国際理解は、他国の文化や伝統、人々とふれあうことで、互いに理解し尊敬することである。それは、互いに差別や偏見をもたずに公正、公平に接して、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする気持ちをもつことにもなる。本資料を活用し、その一助としたい。

1 国際交流の体験談や、それに関連した新聞記事について知る。

2 資料「平和と友情の鐘」を読んで考える。

(1) トーマスさんの行為からどんなことを感じるか。

・日本のためにと行動したことがすばらしい。

・何が必要なのかを考え行動していることに思いやりを感じる。

・簡単にできることではない。

(2) 助けてもらった山梨の人たちは、どんな思いになつたただろう。

・本当にありがたい。

・何かお礼をしたい。

・アイオワが大変なときには、今度はこちらが支援をしよう。

(3) グレイが本をプレゼントしてくれた理由に気付き、ほかはどんなことを考えただろうか。

・軽い気持ちで訪問団に参加してしまった自分が恥ずかしい。

・何も知らずに参加した自分が情けない。

・この本の内容についてグレイと話したかった。

・訪問団の一人としてできることがあったのではないか。

・グレイは山梨とアイオワのつながりを伝えたかったのに、僕はその話に興味を示さなかったから申し訳ない。

(4) 「海の方こうの特別な友達にメールを出した」とあるが、どんなことを書いたのだろう。

・お世話になった感謝の気持ちを書いた。

・本のお礼と、その本を読んで思ったことを書いた。

・また遊びに行きたいという気持ちを書いた。

・自分の考えの甘さをあやまり、これからも友達でいようと書いた。

3 友好関係を支える思いについて考える。

・五十年以上も良好な関係が続いているのはなぜかを考える。また、その引き継がれた絆を今後も続けていくために、これからどう生きていったらいいかについて考える。

4 教師の説話を聞く。

四 指導上の留意点及び工夫

・実際に姉妹都市を訪問した経験のある生徒や教師の話を開

かせるなど、身近な出来事として捉えさせる。

・姉妹都市締結五十周年記念のDVDを見せるなど、当時の映像や写真などを活用する。(山梨県観光部国際交流課)

・国際理解は他国のことを知ると同時に、自国への理解を深めることにあるという点に考慮し、自分の故郷への関心を高める。

五 評価の観点

多くの善意や支えにより自分たちがあることに気づき、互いに尊重し合い、世界平和や人類の幸福に貢献しようとする思いを深めている。

六 事後指導の工夫

・授業の感想を書き、発表し合う。

・心のノート「日本人としての自覚をもって」(136～138ページ)を読む。

・姉妹都市締結五十周年記念DVDを視聴する。

七 その他

・次の資料を参考にした。

・『海の方こうの特別な友達～アイオワと山梨の物語～』

(ローリー・エリクソン著)

・『ザ・やまなし』平成二三年一〇月号(山梨日日新聞社)

・山梨インターネット放送局

「アイオワと山梨交流の歴史」

美しいふるまい

(中学校下級学年 2-1)

一 ねらい

礼儀の根底にあるものについて考えることを通して、礼儀の意義を理解し、相手を尊重しようとする心情を育む。

二 資料の特質

・ 礼儀は、相手に対する敬愛の気持ち、態度や動作として表現されたものであり、その根底には、相手を思う気持ちや人間尊重の精神がなければならない。しかし、中学生のこの時期は、礼儀の大切さはある程度理解してはいるものの、その意義については十分理解されず、従来からのしきたりや形に反発したり、恥ずかしさやその場の状況に左右されたりしてしまい、望ましい行動ができないこともある。

・ 本資料では、そのような実態を考慮し、あいさつに対して「面倒である」「窮屈である」と感じる主人公に共感しながらも、校長先生の行動や、講師の話などから、礼儀の根底にあるものを考えられるような内容とした。

・ 本県に深く関わりのある小笠原流礼法についても触れることで、礼儀は、人間関係や社会生活を円滑にするために創り出された優れた文化の一つであるということや、時代により形は変わっても、その根底にある相手を思う心はいつ

の時代も同じであり、現在も継承されていることも考えさせたい。

三 展開例

1 「礼儀」に対する生徒のイメージを聞く。

2 資料「美しいふるまい」を読んで考える。

(1) 明日、あいさつ運動の当番だったことを思い出したばくは、どんな気持ちになっただろう。

・ めんどうだなあ。

・ だから委員になりたくなかったんだ。

(2) ばくは、あいさつ運動をしながら、どんなことを思っただろうか。

・ めんどうだなあ。

・ せっかく早く来たのに、あいさつしないなんて嫌だな。

・ なんて、こんなこと続けているんだろう。

(3) 礼儀の根本にあるものとは、どんなことなのだろう。

・ 相手への思いやりの心

・ 相手を尊重する心

・ 自分のことよりも相手のことを大切にすること

(4) 先週とは違う気持ちであいさつをすることができたのは、ほくの中にどのような変化があったからだろうか。

・ 茶道の話から、「相手への思いが形になってあいさつという行為になる」ということが分かったから。

・ 校長先生がほくたちをどのような気持ちで迎えてくれ

ているかが分かった気がするから。

3 わたしたちは、これまでどのような気持ちであいさつをしていたかについて振り返り、礼儀とは何かについて考える。

4 心のノート「心を形に表していこう」(47ページ)に記述する。

四 指導上の留意点及び工夫

・授業の前半では、礼儀に対するイメージをふくらませ、さらに多くの思いを考えさせることで、誰にも似たような思いがあることを確認する。

・展開例(3)で、期待する生徒の反応が見られなかった場合には、お茶の世界に作法がある理由や、ほくがドアを押さえていたのは、どのような思いがあったからなのかについて考えさせるなどして、ねらいとする価値に気付けるようにする。

・展開例(4)では、多くの心情の変化をとらえさせるようにする。その際、校長先生の迎える側の視点から考えることで、相手への思いが重要であるということに気が付ける場合と、茶道についての話から、礼儀作法の根本にある思いに気付ける場合とがあるので、どちらにも同じような思いがあることを捉えさせたい。

・本展開例は心情を育むことをねらいとしたため、展開の後段で、これまでの生活を振り返り礼儀とは何かを考えることとしたが、実態によっては相手を尊重しようとする態度

を育むことをねらいとし、展開の後段で、「そのように行動するために自分に必要なことは何か」について考える展開も考えられる。

五 評価の観点

・礼儀の根底には、相手を思う気持ちがあることに気付き、相手を尊重しようとする思いを深めている。

六 事後指導の工夫

・礼儀について自分の行動を振り返る機会を設ける。
・生徒が礼儀正しく行動できた際には、相手もすがすがしい気持ちになったことを伝えるなどして、行動につながれるようにする。

七 その他

・次の資料を参考にした。

『小笠原流礼法入門 美しいふるまい』

小笠原流礼法宗家 小笠原敬承 著 (淡交社)

『図解 小笠原流礼法入門 立ち居振る舞い』

監修 小笠原忠統 (中央文芸社)

貧しくとも心けだかく

(中学校上級学年 1—1)

一 ねらい

今日の物質的豊かさの中、物の尊さ等に思いを寄せ、物やお金に対する感覚を正し、真の豊かさについての考えを深める。

二 資料の特質

・金銭感覚や物への執着は、今日極めて薄れてきている。自分のことしか考えない生き方の中では、そのような感覚は磨かれない。ここには貧しい生活を余儀なくされた一葉が年頃になり、だれもが着飾りたいところを我慢し、二十歳にも満たない年齢で家計を支えなくてはならないという寂しい現実の中で生きた姿が描かれている。皆が着飾って出席した歌会にも古着で出席した一葉は、むしろ心中誇らしいものさえ感じている。本資料は、貧しさとは何か、豊かさとは何かについて考えさせ、読み手に自らの生活ぶりを振り返らせようとするものである。

・現在の自分の生活があたり前と思っている生徒が多いと思われるが、本資料をとおして一葉の気持ちを考えることで、ねらいに迫るようにしたい。

三 事前指導の工夫

・自分自身のこづかい出納帳を一週間記録させる。

・生徒個々の家庭が、どのような収入で家計を成り立たせているかを認識するために、それぞれの「我家の家計」について調べてくる。

四 展開例

1 学校内の落とし物箱を借りてきて見せる。その量の多さからどんなことを思うか発表する。

2 資料「貧しくとも心けだかく」を読んで話し合う。

(1) 今、皆は生活に何か不自由を感じていることがあるでしょうか。

・携帯電話が欲しい。

・自分一人の部屋が欲しい。

(2) なつにはどんなのぞみがあったのでしょうか。

・小学校からさらに上級の学校へ進んで勉強をしたかった。

・歌会に出るための新しい着物が欲しかった。

・小説を書きたかった。

・本もたくさん読みたかった。

(3) なぜなつは塾の仲間たちのしている衣装くらべが嫌だったのでしょうか。

・自分はいつも地味で古い着物ばかり着ていたから嫌だった。

・そんなことより、勉強を真剣にしたかったから。

(4) なつが歌会に出るための晴着のことを母に相談した時の気持ちを考えてみましょう。

・自分の家が窮乏していることがわかっていたので、言い出しにくかった。

・でも、晴着を着て出たいという乙女心から、意を決してそのことをきり出したと思う。

(5) 晴着のことをうちあげられた時の母親の思いを考えてみましよう。

・普段不満を言わないなつだったから、よほどのことだと思ひ、何とかしてやりたいと必死になったと思う。

(6) なつが母のくれた古着に心の中で誇らしいものを感じていたことから、貧しさとは何か、豊かさとは何かを考えましよう。

・物や金がないというのは貧しいことではあるが、物を大切にすることや、それ以上に心のもち方により心は豊かでいられると気づく。

3 宿題だったこづかい帳を開いて自分の生活の仕方を考えてみましよう。

・いかに無駄遣いをしているかに気づく。

4 教師の体験談を話す。

五 指導上の留意点及び工夫

・単に時代が違うということで片付けてしまわぬよう、大切なことは何かを一人一人に真剣に考えさせたい。

・物や金の尊さだけで終わらず、その心のもち方に及ぶよう展開したい。

六 評価の観点

・節制に心がけ調和のある生活の実現に努めることが、自分の将来を豊かにすることにつながるということを感じている。

七 事後指導の工夫

・ともすると現状の生活を当たり前のように思いがちだが、折にふれ、物や金の尊さと心のもち方の問題をからめて、金銭感覚、経済観念を自立や共生の世の中に生きる基本的生活習慣として身につけさせたい。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第2集』（青少年のための山梨県民会議）

『身のふる衣、まきのいち』（筑摩書房）

トンネルの向こうに

—新倉掘抜にかけた永島安竜—

中学校上級学年 〇 4 | (2)

1 | (2)

一 ねらい

公共の福祉や社会の発展に尽くすことの大切さを理解し、よりよい社会を実現していこうとする意欲を育てる。

二 資料の特質

- ・ 広く様々な社会生活の局面に処して、不特定多数の人々の利害を、自分一個の利害に優先させてものごとを考えた
- り、処理しようとする気持ちがあくみとれる資料である。
- ・ 自分だけの利害とみんなの利害とを区別し、人間だれもがもつ自分さえよければという気持ちを押えて、社会の一員としてふさわしい公德心に関し、ひとりひとりの生徒のものの考え方や感じ方をふり返らせながら、ねらいに触れさせていきたい。

・ この資料は、当時、富士北麓に数少ない医者として、何不自由ない生活をしていた、永島安竜（呑山）と息子（元長）が私財を投げ出し、天上山を掘り抜き、河口湖の水を荒れ野（丸尾）に引き込み田畑に変えるという難工事に取り組みだ話である。

・ 掘抜完成までにおきた様々な問題を乗り越えて掘抜に尽く

した安竜の心の動きを追い、その要所をとらえることによって、生徒に公共の福祉と社会の発展のために尽くそうとする心を育てるための、資料とすることができる。

三 事前指導の工夫

・ この資料は江戸時代の出来ごとなので、現在は使われていない語句が多いため、読解の段階で説明を加える必要がある。（年号、領主、背負子、水呑百姓、一文銭、駿河、わら草履）

・ 掘抜工事を行うのに現在と、この時代の道具の違いを明らかにすることにより、いかに難工事に挑戦したのかを理解させる。

・ 河口湖は水の排出路がなく、毎年のように水害に悩まされていた事を説明する。

四 展開例

1 新倉掘抜に関する写真、ビデオ等で関心をもたせる。

2 資料「トンネルの向こうに」を読んで大要を確認し次の点について話し合わせ、考えさせる。

(1) 「……やりたい者だけがやればいい。」と言った村人をどう思いますか。

○ 掘抜を成功させれば村人の暮らしが豊かになるとわかってはいるが、貧困の苦しさをゆえの弱さ、この心情を生徒自身の問題として共感させたい。

(2) 小作の作兵衛さんから、一文銭を百枚もらいました。が、この時の安竜の気持ちをどのように思いますか。

○このできごとは、安竜のその後の生き方に大きな影響を与えた。挫折していた安竜が再び掘抜に挑戦しようとした気持はどこから生まれてきたのかを考えさせ、作兵衛の掘抜によせる思いと、安竜が村人によせた、より豊かになつて欲しいと願つた、二人の心情を読みとらせる。

(3) 「……本当にありがとう、みんなよく頑張つたな。」と言つた安竜の気持ちはどんなか。

○医者である安竜は掘抜が完成しても、何の得もないのに「村の衆、ありがとう。」と感謝しているのは、なぜだろうか考えさせる。

3 教師が類似経験を話すことにより、身近な自分自身の問題としてとらえさせる。

4 資料にあるような経験を生かすためにはどのようにすればよいのか考えさせ、発表させる。

安竜だけでなく、だれもが強くてすばらしいところをもっているが、反面弱いところももっているとしたら、この資料を通して、自分自身の生き方を考えさせる機会としたい。

五 指導上の留意点及び工夫

・内容項目4―(2)だけではなく、項目1―(2)（より高い目標を目指し、希望と勇気をもつて、着実にやり抜く強い意志をもつ）に変えることもできる。

六 評価の観点

・よりよい社会の実現のために必要なことについて、自分の考えをもつてとらえている。

七 事後指導の工夫

・安竜の強い意志だけにとどまるのではなく、広く社会の発展のために尽くすことの大切さを自覚させ、そのために、自分に出来ることに目を向けさせる。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 第15集』（青少年のための山梨県民会議）

消防の父 小宮山 清三

中学校上級学年 〇 4 | (5)

1 | (2)
1 | (4)

一 ねらい

働くことの尊さを理解するとともに社会への奉仕の気持ちを深め、進んで公共の福祉のために尽くそうとする心情を深める。

二 資料の特質

・物があふれ、豊かな時代に暮らす現在の中学生は、苦勞して働くことなく、ほしいものを簡単に手に入れやすい環境で暮らしている。また、気の合った仲間とは進んで仕事に取り組もうとするが、その他の集団や共同体の中では、働くことに消極的なことが多い。そのため、勤勞の尊さを理解したり、働くことを通して社会へ奉仕し、社会の発展に尽くそうとする態度は育ちにくいことがある。そこで、一人一人が働くことよって相互依存の関係が成立し、社会全体の幸福がもたらされること、またそれによつて個人の幸福ももたらされることを理解させたい。さらに、これら のことに気付かせることを通して、勤勞の尊さと社会全体の利益を大切にするこゝについて考えさせたい。

・本資料は、山梨県のみならず、日本の消防の発展に限りな

い貢献をした小宮山清三が主人公である。自分たちで村を治め、守るといふ「自治」の観点から消防をとらえ、その発展に限りない力を注いだ清三ではあつたが、やがて甲府の旧町火消したちの反抗にあい、苦惱し、葛藤するようになる。しかし、主人公はそれを乗り越え、現在の消防の基礎を築いていく。ここではその清三の姿を見つめさせ、また一方で町火消したちの立場にも目を向けさせることによつて、社会へ奉仕していくことの必要性に気付かせ、勤勞の尊さや公共の福祉を大切にすることについて考えを深めさせたい。

・町火消したちの反抗にあつた清三が、消防の発展と自分の身を守りたいという気持ちとの狭間で苦惱する姿を見つめさせ、そのときの心情を考えさせることによつてねらいにせまれるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・消防に関する情報を事前に与え、関心をもたせておく。
・日常の清掃活動などの勤勞活動にどのような気持ちで取り組み、それらの活動がどのような意味をもつかなどについて意見を聞き、関心を高めておく。

・家族の職業についても目を向けさせ、働くことについての家族の考えを調べさせておく。

四 展開例

1 調べてきた家族の職業についての考えを発表する。

2 資料「消防の父小宮山清三」を読んで話し合う。

(1) 新柳町の火事の後、「こんなに焼けてしまった。」とつ

ぶやいたときの清三は、どんな気持ちだったでしょう。

・火事が起こったら、私たちは何もできないのか。

(2) 池田村消防組頭になったときの清三はどんな気持ちだったでしょう。

・消防を発展させるためがんばるぞ。

(3) 町火消したちの反抗を知って活動を続けようかやめよ

うか迷って悩む清三についてどう思いますか。

・だらしな。

・悩むのも仕方のないことだ。

(4) 「やめてはいけないんだ！」と心の中で思ったときの

清三はどんな気持ちだったでしょう。

・自分のやることがみんなに役立つのだから頑張ろう。

3 社会奉仕や働くことについて話し合う。

(1) 働くことを通して大切だと思うことは何ですか。

・自分のためばかりではなく、周りの人に役立つように努力して働いていくこと。

4 教師の体験談を話す。

五 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(3)において、きれいごとの主人公への批判ばかりではなく、人間のもつ弱さ、醜さについても考えさせる。その際、町火消したちの取った行動や生徒自身の中にひそむ心の弱さにも目を向けさせる。

・現在の消防の果たしている役割についても考えさせる。

六 評価の観点

・働くことを通じ、進んで公共の福祉のために尽くそうとする心情を深めている。

七 事後指導の工夫

・勤労生産活動などの学校行事、学年行事、日常の清掃活動等を通して働くことを実践させ、継続的に勤労を尊ぶ心を養う。

・家庭や地域とも連携を図りながら、学級活動等を通して、社会への奉仕の気持ちを深める。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『郷土史にかがやく人々 集合編』（青少年のための山梨県民会議）

『山梨県政六十年史』（山梨県）

『自治体消防三〇周年記念誌 山梨消防の歩み』（山梨県自治体消防制度三〇周年記念誌編集委員会）

内藤清右衛門と『甲斐国志』

(中学校上級学年 4―8)

一 ねらい

郷土の歴史、文化の発展に尽くした先人の生き方に触れ、尊敬と感謝の念を深め、郷土の文化等を大切にし、郷土の発展に尽くそうとする心情を豊かにする。

二 資料の特質

・都市化の進展に伴い、自分たちの住んでいる地域の歴史や地理、文化に無関心の生徒も多い。それらが多くの先人の努力の上に今日まで伝えられていることを理解することは、郷土に対する興味関心を高めるだけでなく、先人の残してくれた郷土の文化を大切にし、郷土を愛する心情を豊かにする上で有意義である。

・『甲斐国志』は、山梨県の郷土研究にとって欠かすことのない文献である。本資料は、その編さんの中心人物である西花輪村(現田富町)の内藤清右衛門の労苦、葛藤を史実に即してまとめたものである。

・『甲斐国志』編さんは、当時の甲斐国すべての村役人、寺社等が関わった大事業である。文化二年(一八〇五年)より、足かけ十年にわたる苦難の末、完成させた清右衛門等の郷土を思いう心、努力、生き方に触れさせることが大切である。

三 事前指導の工夫

・学校図書館や身近にある郷土資料館等を利用し、郷土の歴史に対する興味や理解を深める。特に江戸時代後期(一八一〇年頃)の地域の様子等について調べておく。

四 展開例

1 江戸時代の地域の様子について調べたことを発表しよう。

2 資料「内藤清右衛門と『甲斐国志』」を読んで話し合う。

(1) 『甲斐国志』の編さん委員を委嘱された時、清右衛門はなぜ戸惑ったのでしょうか。

・名主の仕事がおろそかになつては困る。

・「国志」の編さんは大変な仕事だから。

・少し高齢だったから。

(2) 資料の収集や作業が思うようにはかどらなかったのはどうしてだったのでしょうか。

・この事業や支配者に対する不信感があったから。

(3) 『甲斐国志』の編さんが困難になったとき、清右衛門はなぜ、編さんを継続しようとしたのでしょうか。

・子孫に、郷土のことをよく知り、誇りをもってもらいたかった。

・郷土に誇りをもち郷土を愛していたから。

(4) 江戸の定能よりたびたび催促されましたが、清右衛門はあくまで慎重に作業を進めました。どうしてでしょうか。

・いい加減な「国志」にしたくなかった。

・真実を大切にできなかった。

・郷土の文化を大切にしたい。

3 自分たちの地域の文化や発展に尽くした先人の生き方について考える。

4 継承されている郷土の伝統文化について話す。

五 指導上の留意点及び工夫

・清右衛門の郷土を思う心情、葛藤、生き方を中心に資料に即して指導する。

・『甲斐国志』の中のその当時の地域の様子等生徒たちの興味のある事項について調べ事前に配布しておく。

・清右衛門以外にも甲斐国の住民や定能の家臣等多くの人々がこの事業に関わった大事業であったことにも触れておく。

・難しい言葉や事柄もあるが道徳資料であるのであまり深入りせずあっさり触れる程度でよい。

六 評価の観点

・古い時代の歴史や文化を知ることを通して先人の苦労を理解し、進んで郷土の発展に尽くそうとする心情を深める。

七 事後指導の工夫

・『甲斐国志』を使って江戸時代の地域の様子（人口、位置、石高、文化財、等）を調べる。意外な発見や驚きは、郷土についての興味関心をより一層高めると共に郷土を誇

りに思い郷土の発展に尽くそうとする心情を養う上で有益である。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『大日本地誌体系四十四 甲斐国志』（雄山閣）

『郷土史にかがやく人々 第12集』（青少年のための山梨県民会議）

『春秋彩る甲府城—新甲斐国志五』（テレビ山梨）

『田富町誌』田富町編

・田富町（現中央市）西花輪八九の内藤家には『甲斐国志』

草稿本、絵図等の資料が残されている。また、近くの菩提寺長徳院に清右衛門の墓がある。

種まく人

中学校上級学年			
4	2	2	4
(10)	(2)	(5)	(3)

一 ねらい

浅川兄弟の生き方に触れ、どの国の人々とも同じ人間として尊重し合い、差別や偏見を持たずに公正公平に接し、世界の平和と人類の幸福に貢献しようとする意欲を高める。

二 資料の特質

・日本の朝鮮統治下にあつて、相手の立場に立つて相手の文化をも尊重しようとした浅川兄弟の生き方は、厳しい時代だけに一層光彩を放っている。民族の歴史を正しく見つめその教訓の上に国際親善を深めていこうとする姿勢は、国際化時代に生きる今日の生徒にとって大切なことである。

・一九一〇年、日本は韓国を併合し武力を背景に朝鮮民族の誇りを奪い三十五年間にわたつて日本の統治下においた。朝鮮の人々が受けた傷は大きい。そうした中であつて、朝鮮の人々から慕われ、朝鮮文化を掘り起こし朝鮮民族の誇りを大切にしようとした山梨県出身の日本人がいた。高根町（現北杜市）出身の浅川伯教・巧兄弟である。本資料は、兄弟の生き方を巧を中心にして取り上げたものであ

る。兄弟は、日本統治下の朝鮮に渡り、朝鮮民族の中にとけ込み、大地の緑化に努め、民族の文化を掘り起こし、民族としての誇りに目覚めるよう尽力した。

・表題の「種まく人」は県立美術館にあるミレーの絵のことではない。「露天埋蔵法」による松の種の発芽法を発見し朝鮮国土の緑化に貢献したり、陶磁器等の研究を通し民族の誇りを自覚させようとした兄弟の業績を讃え、表題としたものである。

三 事前指導の工夫

・社会科の学習や図書館等で日本による朝鮮統治について事前に学習しておく。また、教師もその歴史について事前に調べ模造紙等にまとめておく。

四 展開例

1 日本による朝鮮統治について調べたことを発表しよう。

2 資料「種まく人」を読み話し合う。

(1) 巧は、なぜ朝鮮の服装や食べ物や好み朝鮮式の家に住み、現地の言葉を話し、同じ生活をしようとしたのでしょうか。

・朝鮮の人々と心を通わせたかったから。
・その土地の文化を尊重していたから。

(2) どのようにして、巧は松の発芽法「露天埋蔵法」を発見したのでしょうか。（また、それは彼の生き方とどのように結びついていたのでしょうか。）

・民衆の話からヒントを得た。

・朝鮮の民衆にとけ込んでいたので、民衆の知恵から学ぶことが出来た。

(3) 伯教は日本統治下の朝鮮にあつてなぜ、「木履の人」を帝展に出品したのでしょうか。

・自国の文化を大切にすることをもらいたかった。
・芸術を通して心を通わせようとした。

(4) 「疲れた朝鮮よ、他人の真似をするより、もっている大切な物を失わなかったなら、やがて自信のつく日が来るであろう。このことは又工芸の道ばかりではない。」と述べているが、この言葉は何を訴えようとしているのでしょうか。

・人々に民族の誇りを自覚させようとした。

・自国の文化を大切にしようとした。

・自民族に自信と誇りをもとう。

・大切なことはお互いに人間として尊重し合うことだ。

3 世界平和と人類の幸福に貢献しようとする事について考える。

4 外国人から見た日本について話してもらおう。

五 指導上の留意点及び工夫

・生徒と同年代の十五歳の少女を、拷問の末に殺すなど、多大な迷惑をかけた過去を反省し、国際理解を深める立場から指導する。

・国際理解とは互いの違いを尊重し合うことでもある。自国の文化を尊重すると共に他国の文化も尊重することが大切

であることを理解させる。

六 評価の観点

・浅川兄弟の朝鮮民族の文化を大切にすることに触れ、人類の幸福に貢献しようとする意欲が高まったか。

・生徒の感想には、教師の共感的コメントを付け加える。

七 事後指導の工夫

・朝鮮と日本との歴史的関係についてさらに調べ、次のようなことについて深め、考えさせる。

(古代の日本の文化のほとんどは朝鮮を経由して入ってきたものであり、厳しい鎖国の江戸時代にも国交のあった国が朝鮮である。不幸な時期もあったが、そのことの反省の上に良き隣国としての関係を築いていくことが大切である。また、朝鮮の文化同様日本の身近な文化、伝統を大切にしていくことも国際理解の視点から大切である。)

八 その他

・次の資料を参考にした。

『浅川巧著作集 朝鮮の膳』(八潮書店)

『朝鮮の土となった日本人』(草風館)

『木履の人』(山梨日日新聞社)

『郷土史にかがやく人びと 第17集』(青少年のための山梨県民会議)

秋のほたる

—生命を見つめて生きた文人 飯田蛇笏—

中学校上級学年 〇 3—(1)

2—(2)

一 ねらい

あらゆる生命の尊さを理解し、自分も他人もかけがえのない命を与えられた存在としてお互いに尊重していこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

・ 自他の生命を尊重することは、あらゆる人間関係を築く上での基本である。また、人間以外の生命を尊重していくことも、意義ある人生を送っていくにあたって必要なことである。しかし、自然環境の破壊が進む状況と、生命軽視の風潮の中で、命あるものを大切にしていこうとする態度を養うことは難しい面がある。その上、情緒が不安定になる中学生という時期は、気分や体力にまかせ、かけがえのない命を傷つけたりしてしまうこともある。そこで自らの生命の大切さを深く自覚させると共に、すべての生命の大切さを理解させ、自分も他人も大切にしていこうとする生き方について考えさせたい。

・ 本資料は文人飯田蛇笏が主人公である。自らの老いを自覚し、自然の中で自らを見つめ、自分の親や子供たちの死に

向かい合うことによって生命の尊厳について目が開かれていく。やがて、命あるものすべて対して共感の心が生まれしていくのだが、ここでは主人公の心情を考えさせることによって、生命の尊さや大切さについて考えを深めさせていきたい。

・ 蛇笏の、自らの老いや肉親の死に対する心情を考えさせ、蛇笏が生命についてどのような気持ちをもつに至ったかを考えさせることによって、ねらいに迫れるようにしたい。

三 事前指導の工夫

・ 生命に関するビデオ等の教材を通して身の回りの生命に目を向けさせ、生命に対する関心を高めておく。

・ 家庭とも連携を取りながら、自分が生まれたときの親の気持ちなどを尋ねさせ、自分の出生時の様子を知るようにさせる。

四 展開例

1 自分の出生時の様子を発表し合う。

2 資料「秋のほたる」を読んで話し合う。

(1) 老いを自覚した蛇笏はどんな気持ちだったでしょう。

・ 私にももうすぐ死が訪れるのかな。

(2) 青々とした草木を見たり、風がそよぐのを感じ、蛇笏が実感したことは何でしょう。

・ 草木も生きてる。自分も生きています。

(3) 長男の戦死広報を手にしたときの蛇笏はどんな気持ちだったでしょう。

・もつと生きられるはずなのになぜ死んでしまったのか。

・もつと生きていてほしかったのにくやしい。

(4) 蛇笏が父の死を受け入れられたのはなぜでしょう。

・精一杯生きたから死ぬのも仕方がない。

・生きているものは死ぬときが来るのだから仕方ない。

3 生命の尊さについて考え、話し合う。

(1) 「誰彼もあらず一天自尊の秋」の句を詠んだとき、蛇笏が死を通して考えたことは何でしょう。

・生きているものはすべて大切なんだな。

・命は尊いな。

(2) 印象に残った俳句は何ですか。自分なりの解釈を付けて加えて発表してください。

4 教師の心に残った俳句とその解釈を聞く。

五 指導上の留意点及び工夫

・展開例2の(3)、(4)の発問と生徒の反応を対照的にとらえさせ、若い息子の死と、父親の死のもつ意味の違いについて、「生きる」こととの関連で考えさせるようにする。

・展開例3では、自分たちは生命を大切に生活しているかを考えさせながら授業を進める。

六 評価の観点

・蛇笏の気持ちを追いながら、生命の尊さについての理解を深めることができたか。

・かけがえのない自他の生命を尊重していこうとする気もち

を深めている。

七 事後指導の工夫

・家庭や地域社会とも連携を図りながら、家族や地域の人々を大切にしていく指導を行う。

・学級活動や学校行事、生徒会行事などの取り組みを通し、自分や周りの友達を大切にしていくよう指導する。

・福祉活動などの実践を通し、生命尊重の態度を強化する。

八 その他

・次の資料を参考にした。

『山梨の文学』（山梨県立文学館）

『日本の詩歌19 飯田蛇笏』（中央公論社）

『目で見る日本の詩歌9 近代の俳句』（TBSブリタニカ）

「Be Gentleman (ジー ジェントルマン)」

中学校上級学年〇 1―(4)

1―(5)

一 ねらい

自分の志をもって行動することが、生涯を豊かにすることにつながることに気付き、目標をもって生きようとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

・ 少子高齢化社会の進行や自然災害への対応、産業や経済の構造の変化、価値観の多様化など、子どもたちを取り巻く環境は、日々めまぐるしく変化している。そのような中で、子どもたちは、「生きる力」を身に付け、社会の現状や変化に流されることなく、それぞれが夢や希望をもって、その実現に向けて成長してほしいと誰もが願っている。

・ そこで本資料の、石橋湛山の生き方を通して、今、自分ができることは何かを考えたり、目標をもって生きることの大切さに気付いたり、生徒が、自分自身のこれからの生き方を考えたりする契機としたい。

三 展開例

1 山梨県出身で有名な方々について思い出す。

・ 「ボーイズ ビー アンビシャス (少年よ大志を抱け)」

この言葉を知っているか。この言葉の意味は何か考えさせる。

・ この言葉が、甲府一高の校訓であることを教え、山梨平和ミュージアムの資料等を活用して石橋湛山を紹介する。

・ 生い立ちや、内閣総理大臣にまでなったことを知らせる。

2 資料「ビー ジェントルマン」を読んで考える。

(1) 二年落第しても、大島校長先生に出会えて良かったと思っただけはなぜか。

・ 生き方を教わったから。

・ 今後の自分の生き方の参考になったから。

・ 「ビー ジェントルマン」など心に響く言葉を教えてもらったから。

(2) 震災の時に湛山がとった行動の裏側にあつたのは、どのような思いだろう。

・ とにかく大勢の人を助けたい。

・ 人の命が最も重要だ。

・ 自分にできることを精一杯しよう。

(3) いつの日も、人のためになるように生きることと信念とした湛山のことをどう思うか。

・ 自分中心に考えてしまい、なかなかできないことだと思う。

・ 自分もそんなふうになりたい。

・そのために必要なことは、相手に対する思いやりだと
思う。

3 自分の考え方や生き方をみつめる。

(1) 日々の生活の中で何かの時に、自ら行動したことが
あったか。

・ 他人事のようなとらえ方をして何もできなかった。

・ 学級などの問題解決に向けて、声を出して提案をし
た。

(2) 湛山の生き方にふれて、今どんなことを考えている
か。

・ 誰かから言われた言葉を大切にして、生きていき
たい。

・ 人生には苦勞もあると思うが信念をもってがんばり
たい。

・ 今、いろいろ悩みはあるが、自分のしたいことに向
かって夢や希望をもって、進路選択をしたい。

4 心のノート「自分の人生は、自分の手で切り拓こう」
(30ページ)や「あの人からのひと言」(138ページ)を活
用し、自分の生き方について考えを深める。

四 指導上の留意点及び工夫

・ 資料を通して、湛山の生き方に触れて、それまでの生徒自
身のことを振り返ったり、これからの生き方を考えさせ
たりしていきたい。また、湛山の生き方から「一 (一) 強
い意志」や湛山の政治家としての功績から「四 (二) 公

徳心、よりよい社会の実現」にも触れることができる内容
である。

五 評価の観点

・ 志をもって行動することが、生涯を豊かにすることに
つながることに気付き、目標をもって生きようとする気持
ちを深めている。

・ 湛山の生き方について、感動したり、共感したりする
だけで終わらずに、これまでの自分の生き方を振り返っ
ていく。

六 事後指導の工夫

・ 進路選択などこれからのことを考える機会に、湛山の
生き方に触れたり、「心のノート」を活用し、これからの
自分のことを考えたりして、人のために生きるとは、ど
んなことなのかを考えさせていく。

・ 学ぶことや信念をもって生きることの大切さについて、
折に触れて教師側からも語り、考えさせていく。

七 その他

・ 次の資料を参考にした。

・ 『偉大な言論人 石橋湛山』浅川保著 山日ライブラリー

・ 『石橋湛山の生涯と思想』

山梨平和ミュージアム―石橋湛山記念館―ブックレット2

・ 『自由思想』第一二二二号 関東大震災と石橋湛山

財団法人 石橋湛山記念財団

地雷のない世界から実りの大地へ

中学校上級学年 ○ 1—(2)

4—(10)

一 ねらい

国を超えて人間を救うため、また生きることを支援するために、組織をあげてやれる限りのことをしようと強い意志で取り組む生き方に共感し、自分もあきらめずに目標に向かうとする気持ちを育てる。

二 資料の特質

・ 中学校上級学年は生徒会活動や部活動の中心となつて活動し、自分の進路を考える時期でもあり、目標や希望をもつて生活することが必要となる。しかし、困難に直面するとすぐあきらめてしまい、粘り強く最後までやり遂げることができない生徒も多い。その中で、誰でも困難や障害にぶつかるとはあり、それを乗り越えることで自分自身の成長や結果につながっていくことを気付かせたい。

・ 本資料は、地雷に苦しむ人々を救うため日夜努力し、長い年月をかけて目標に向かって取り組む姿を描いている。一度はあきらめかけたものの、自分を支えてくれたのは亡き母の言葉や、家族や社員、現地の人々の存在、そして目標をもち続けたことであった。自分の生き方につなげて考えることのできる内容である。

三 展開例

・ 「平和」や「国際理解」が叫ばれる世の中で、本資料は国際貢献や人間愛の精神についても深く考えることのできる資料である。

1 カンボジアという国について知っていることを出し合う。地雷の写真を見せて、地雷について知る。

・ どのようなことを知っているか
・ 何をするものか

・ 値段は ・ 世界にどのくらい埋められているか

・ どのような被害があるのか

2 資料「地雷のない世界から実りの大地へ」を読んで話し合う。

(1) 雨宮さんは足や手のない現地の人を見てどんなことを思ったのだろう。

・ 地雷から救ってあげたい。

・ 何も罪のない人が被害にあつてかわいそうだ。

(2) 雨宮さんは、現地の年老いた女性の「助けてください。」という言葉や、母がいつも話していた「人のためになるような人間になりなさい。」を思い出して、どんなことを考えたのだろう。

・ この人たちを助けたい。

・ 自分に何かできることはないだろうか。自分の技術を生かして地雷を除去することはできないだろうか。

(3) 地雷除去機の開発をあきらめかけた雨宮さんが、継続を決心したのはなぜだろうか。

・目標を実現させたいという強い気持ちがあったから。
・自分たちの作った機械で人々を救いたいと、技術者としてのやりがいを感じていから。

・亡き母の言葉や力を合わせて取り組む社員の姿が支えてくれた。

・カンボジアの人々の気持ちを考えるとあきらめることができなかった。

(4) 雨宮さんの言葉「モノづくりは人づくり」とは、どういう意味だろうか。

・ものを作って売るだけではない。開発し創造したモノによって、人が幸福になり、人の心が豊かになって生き方まで変わっていくということ。

3

(1) これまでの自分の生活態度や考え方を見つめ振り返る。自分はこれまでに、困難にぶつかったことがあっただろうか。その時どんな思いだったか。また、どう行動しただろうか。

(2) 途中であきらめずやり遂げることや継続することの大切さとは、何か。

※心のノート「目標に向かうくじけない心を大切にしたい」(22〜25ページ)を活用することもできる。

四

指導上の留意点及び工夫

・「偉大な活動だ」ということで終わることがないように、

目標に向かって強い意志で取り組むことの大切さに気付かせるように指導したい。

・途中あきらめかけたという人間の弱い部分にも着目し、それをどう乗り越えていったか、その先にある達成感や成就感についても想像力を働かせて考えさせたい。

五

評価の観点

・自分の生活を振り返り、目標をもつことや粘り強く取り組むことが、いかに大切なことであるかに気付いている。

・一人の力は小さなものであっても、力を合わせて地道に取り組み続けられれば、大きな力へとつながっていくことを知り、これからの自分の生き方について考えている。

六

事後指導の工夫

・目標をもって生活する態度を育成する。

例えば、進路を考えたときに自分の目標をもち、その目標を達成するには何をどう頑張ればよいのかを具体的に考え、実行できるようにする。

・自分の生活を振り返り、将来を見つめる時間をつくっていく。

七

その他

・次の資料を参考にした。

・日立建機ホームページ「地雷廃絶への挑戦」

[平成7年度編集・作成委員]

【所属・職名は平成8年3月31日現在】

- 石原 静雄 山梨大学名誉教授
横森 清治 元甲府市立湯田小学校校長
深沢 完興 昭和町立押原中学校校長
飯田 文弥 山梨県郷土研究会常任理事
弦間 耕一 山梨県郷土研究会理事
宮沢 正樹 峡北高校教諭
近藤 博文 甲府市立新田小学校校長 山梨県道德教育研究会長
勝村 六郎 元甲府市立新田小学校校長
佐藤眞佐美 児童文学作家
村松 清子 甲府市立国母小学校教頭
望月 大和 甲府市立北西中学校教頭
比志 保 竜王町立玉幡中学校教頭
遠山 榮子 富士吉田市立下吉田第二小学校教諭
長田 光雄 足和田村立西浜中学校教諭
中村 勝一 山梨県教育庁学校教育課主幹
吉田 一郎 東山梨教育事務所指導主事
前田誠一郎 都留市立谷村第一小学校教頭
佐藤 町子 上野原町立大鶴小学校教諭
筒井 一枝 八代町立八代小学校教諭
小林 淑子 白根町立白根源小学校教諭
小野眞理子 春日居町立春日居小学校教諭
原間多恵子 身延町立身延南小学校教諭
比志 秀樹 須玉町立須玉小学校教諭
三井 恵司 富士吉田市立明見小学校教諭
蘓原 桂 甲府市立湯田小学校教諭
小林 一徳 市川大門町立市川小学校教諭
加藤 朗 都留市立東桂小学校教諭
大村真知子 山梨市立山梨南中学校教諭
三枝 幸一 都留市立都留第一中学校教諭
佐藤喜美子 八代町・境川村中学校組合立浅川中学校教諭
山本 純司 南部町立南部中学校教諭
出羽伊津子 大泉村立泉中学校教諭
臼井 稔 甲府市立上条中学校教諭

[平成7年度挿絵作成委員]

【所属・職名は平成8年3月31日現在】

廣瀬 智徳 塩山市教育委員会教育委員
宇野五千雄 御坂町立御坂西小学校長（表紙）
天野 昭 大月市立富浜中学校長
横森 喜鴻 白根町立白根源小学校教頭
大村真知子 山梨市立山梨南中学校教諭
矢崎 育子 甲府市立甲府北中学校教諭

[資料提供等御協力いただいた方々]

鈴木 美江 中村 高志 内藤 幹彦 中村 司 根本 章雄
依田由基人 学習研究社 キープ協会 東京芸術大学 勝 沼 町
南部町立南部中学校 小菅村立小菅中学校 甲府西高等学校 山梨県立文学館
山梨県立美術館 県内各教育委員会 (順序不同)

[事務局員]

杉原 廣 深沢 武美 長谷川義高 輿水 均 塚越 武文
小池 正 内藤 理 赤松 東 利根川 健 長田 光雄

[平成23年度 編集委員]

[所属・職名は平成24年3月31日現在]

比志 保 中央市教育委員会教育長
佐藤喜美子 笛吹市立春日居中学校校長
内藤 重明 韮崎市立甘利小学校校長 山梨県道德教育研究会会長
山本 純司 南部町立万沢小学校校長
穂原 桂 甲府市立伊勢小学校教頭
内藤 雅人 韮崎こすもす教室主幹
伊藤 敬子 富士川町立鯉沢小学校教諭
名取千奈美 南アルプス市立櫛形西小学校教諭
青柳 仁美 甲州市立大藤小学校教諭
望月 好則 甲府市立善誘館小学校教諭
渡辺 厚子 富士河口湖町立河口小学校教諭
埴原志津香 北杜市立小泉小学校教諭
三枝ゆかり 甲州市立塩山北中学校教諭
望月 育代 富士河口湖町立西浜中学校教諭
渡部 一司 北杜市立甲陵中学校教諭
小林 知子 甲府市立上条中学校教諭

[資料提供等御協力いただいた方]

アメリカ大使館農産物貿易事務所	北杜市教育委員会
石橋湛山記念財団	南アルプス市教育委員会
印傳屋上原勇七	山梨日立建機株式会社
実相寺	山梨平和ミュージアム
富士川町教育委員会	山梨県知事政策局広聴広報課

なお、教育庁義務教育課においては次の者が編集に当たった。

堀之内睦男	佐久間浩之	荻原 孝幸	井上 由久
数野 保秋	小林 正治	谷澤 浩明	小林 大
保坂 伸	廣瀬 学	猪股 真弥	田中 一弘

山 梨 県

道德教育用郷土資料集（教師用）

平成24年3月 発行

編集・発行 山梨県教育委員会

〒400-8504 甲府市丸の内一丁目6-1

電話 055-237-1111

印刷：株式会社サンニチ印刷

